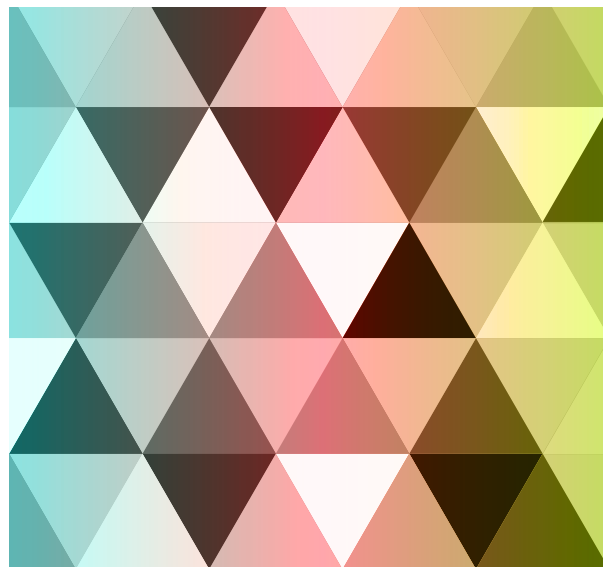


九州産業大学
建築都市工学部
Year Book

2021



Architecture

Housing and Interior

Civil and Urban Design Engineering

2021 年度イベント一覧	2
---------------	---

建築都市工学部の紹介	4
------------	---

教員紹介／学科の特色	6
------------	---

■ 建築学科	6
■ 住居・インテリア学科	8
■ 都市デザイン工学科	10

研究室紹介	12
-------	----

■ 建築学科	12
■ 住居・インテリア学科	17
■ 都市デザイン工学科	26

OB・OG 寄稿	34
----------	----

学生寄稿	40
------	----

■ 建築学科	40
■ 住居・インテリア学科	41
■ 都市デザイン工学科	42

施設紹介	43
------	----

進路実績紹介	44
--------	----

■ 建築学科	44
■ 住居・インテリア学科	46
■ 都市デザイン工学科	48

資格実績紹介	50
--------	----

博士前期課程 研究課題および指導教員	52
-----------------------	----

建築都市工学部長賞	53
-----------	----

卒業研究 54

■ 建築学科	54
-2021 年度 優秀作品一覧	
-2021 年度 設計作品	
■ 住居・インテリア学科	64
-2021 年度優秀研究一覧	
-2021 年度優秀研究（設計部門）	
-2021 年度優秀研究（論文部門）	
■ 都市デザイン工学科	76
-2021 年度 優秀研究	

建築都市工学部 全国高等学校プロジェクトコンテスト 82

■ プロコンについて	82
■ 総評および各賞コメント	84
■ 入賞作品紹介	88

ONLINE オープンキャンパス紹介 96

■ 建築学科	96
■ 住居・インテリア学科	97
■ 都市デザイン工学科	98

課外活動紹介 99

■ ABC 建築道場	99
■ 北欧デザイン研究会	100
■ 九産大野生動植物研究会	101

2021年度イベント一覧

4 入学式 (4/1)

5

6 「ABC 建築道場の活動展」(6/28 ~ 7/9)

7

「建築模型アイデア図鑑：身近な材料でつくる 83 の方法」出版
編著：建築学科 教授 矢作昌生 / ABC 建築道場
(西日本工業大学 石垣充研究室との共同)

九産大オープンキャンパス (7/18)

景観セミナーレクチャー (前期：6/11, 7/2, 7/23 zoom 開催)
「いま、台湾の風景に触れる」主催：KSU 景観研究センター

8

BS テレビ東京「突撃！隣のスゴイ家」“港南の住宅”が放映
建築学科 教授 矢作昌生

福岡女子大学との合同サマースクールでの一部講義 (8/26 ~ 31)
『生活者の視点から九州・福岡の様々な環境問題を考える』
「住み続けられるまちづくりー環境共生ー」/ 都市デザイン学科 教授 内田泰三
「再生可能エネルギー (小水力発電) と地域開発」/ 都市デザイン学科 准教授 佐藤辰郎

9

10

糸島国際芸術祭 2021 「テーマ：身体尺度」案内黒板のデザイン・制作
住居・インテリア学科 准教授 諫見泰彦・同研究室学生

KSU イノベーションセンター併設カフェ「In.out」オープン
空間・グラフィックデザイン
住居・インテリア学科 教授 福山秀親 / 同研究室学生

オンライン 香椎祭 (10/30 ~ 11/2)

オンライン「全国高等学校プロジェクトコンテスト」
発表及び最終審査会 10/31



11

オンライン特別講座 デンマークの街と建築第 1 回
「人間中心の街 コペンハーゲン」
住居・インテリア学科 教授 小泉隆 主催 福岡デンマーク協会



オンライン講演 同済大学 日本学研究国際シンポジウム (11/13)
「光と影の美～日本における積み木による子どもの遊び環境の創造～」
住居・インテリア学科 准教授 諫見泰彦 主催 同済大学 (中国・上海)



九産大レクチャーシリーズ Vol.41 「Unbalanced/balance」
(11/17) 西澤 徹夫氏 / 主催 ABC 建築道場

12

景観セミナーレクチャー (後期: 11/5, 12/10, 12/24 zoom 開催)
「Perspectives from Russia, US and UK in the midst of a global pandemic」 主催: KSU 景観研究センター

卒業設計講評会 / 主催 ABC 建築道場 (12/19)

九産大レクチャーシリーズ Vol.42 「あたまのなかとそと」
(12/19) 中山 英之氏 / 主催 ABC 建築道場



1

九産大レクチャーシリーズ Vol.43 「それは本当に必要か。」
(1/29) 増田 信吾氏 / 主催 ABC 建築道場

2

九産大レクチャーシリーズ Vol.44
『生きてゆくための場所をどう設計するか』
「ひとまず結び付けておく」技術としての建築
(2/26) 木村吉成氏 / 主催 ABC 建築道場



TNC テレビ「ももち浜ストア」にて
『KSU イノベーションセンター併設カフェ「In.out」』が放映
空間・グラフィックデザイン
住居・インテリア学科 教授 福山秀親 / 同研究室学生

九産大プロデュース展 2022 への参加
「福岡・大川家具工業会と芸術学部と連携した家具開発プロジェクトの成果展示」
住居・インテリア学科 吉村研究室学生 (2/24 ~ 2/27)



3

KBC テレビ出演「アサデス。」“団地再生プロジェクト”
住居・インテリア学科 准教授 信野康博

「大学生が提案する 武家屋敷を生かした柳川のまちづくり」
住居・インテリア学科 松野尾研究室学生 (3/9)

「北欧建築ガイド 500 の建築・都市空間」刊行
住居・インテリア学科 教授 小泉隆 / 北欧デザイン研究会 出版プロジェクト

学位授与式 (3/17)





Faculty of Architecture and Civil Engineering

建築都市工学部

建築学科 | 住居・インテリア学科 | 都市デザイン工学科

西日本初の建築、住居・インテリア、
都市・土木を総合的に学べる学部。

これまで分野、資格、法律などが縦割りに分断されていた3領域を総合的に扱うことで、国土の強靱化、循環型まちづくり、グリーンインフラ、住環境ストックの有効活用などの現代的な課題に対し、住空間から都市まで横断的に活躍できる人材を育てます。

アドミッション・ポリシー

(入学者の受け入れ方針)

建築都市工学部は、工学における基礎的知識をベースに、国土から住まいまで連続する空間のあり方を追求する広い視野を持ち、多様な社会ニーズに応えることのできる実践的能力を有した人材養成のため、次の人材から、基礎的な知識や適性を多面的・総合的に評価し、入学者選抜を行う。

1. 建築都市工学に関する学修意欲が高い人
2. 物事を多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる人
3. 建築都市工学分野において卓越した能力を持っている人



育成する人材

産業界の最前線で活躍できる人材

「産学一如」の建学の理想のもとに、国土から住まいまで連続する空間のあり方を追究する広い視野を持ち、多様な社会のニーズに応えることのできる実践的能力を有した人材の養成を目指します。



学びの特長Ⅰ

学科連携による資格取得教育の充実



建築士資格は、3学科の学生全員が目標にできます。学科間で教員が協力し、充実した資格取得教育を実現します。その他の資格についても、各学科の専門性をいかして取得をサポートします。

学びの特長Ⅱ

地域貢献プロジェクト型教育の推進

まちづくり、空き家問題、災害に強い建築設計、新しい家具・インテリアの開発など、実社会の課題を積極的に学部・学科で取り組み、教員、学生がプロジェクトグループを結成し、実践的に学びます。



Topics

充実した教授陣による実践教育で高い就職率を実現

建築家、空間デザイナー、各委員、研究者など、実社会で活躍する多様な教授陣が学外連携の教育を実践し、高い就職率を誇っています。



学生による活発な課外活動を積極支援

ABC建築道場、デザイン研究会、ピオトップ研究会など、多数のサークルが活動。実務家を迎えてのセミナーなども活発に企画・開催しています。



教員紹介

建築学科

	研究分野
	建築構造・材料
	研究テーマ
教授	コンクリート系構造物の 応力伝達機構に関する研究
UCHIDA KAZUHIRO 内田 和弘	

	研究分野
	建築構造
	研究テーマ
教授	鉄筋コンクリート造建物の 安全性に関する研究
HANAI NOBUAKI 花井 伸明	

	研究分野
	都市計画
	研究テーマ
教授	景観まちづくり 防災まちづくり
HITAKA KEIICHIRO 日高 圭一郎	

	研究分野
	建築計画 建築意匠
	研究テーマ
教授	建築空間に関する研究および 設計活動
YAHAGI MASAO 矢作 昌生	

	研究分野
	建築計画、 建築社会システム
	研究テーマ
准教授	地域ストック活用
OHBA TOMOKO 大庭 知子	

	研究分野
	建築構造・材料
	研究テーマ
准教授	建築の耐震構造に関する研究
KANG WOOJA 姜 優子	

	研究分野
	建築史・意匠
	研究テーマ
准教授	ドイツ近代建築史
TOMITA HIDEO 富田 英夫	

	研究分野
	建築環境・設備
	研究テーマ
准教授	生活環境の快適性に関する研究
FUKAGAWA KENTA 深川 健太	

	研究分野
	建築計画
	研究テーマ
准教授	高齢者居住に関する研究
FUNAKOSHI MASAHIRO 船越 正啓	

建築学科の取組みや特徴

- 経験豊富な講師陣による充実した専門教育
- 実践型の教育カリキュラム
- 高い就職先の質と就職率

住宅をはじめ、文化施設、高層ビル、建築遺産、街、地域、都市環境など、領域が幅広いのが建築学です。そこで安全性や耐久性を学ぶ「構造・生産系」、空間の快適性や省エネを学ぶ「環境・設備系」、デザインや空間の機能性を学ぶ「計画・歴史系」の3つの専門的視点から、体系的にアプローチします。各分野の考え方や相互の関係を学修し、建築業界あらゆる分野で輝ける多様なエンジニアを育成します。



[各系の特徴]

- 構造・生産系
 - コンクリート系構造物の応力伝達機構に関する研究
 - 鉄筋コンクリート構造物の安全性に関する研究
 - 建築災害の低減・防止に関する研究
 - 建築物の耐震設計・耐震改修に関する研究
- 環境・設備系
 - 生活空間の快適性に関する研究
- 計画・歴史系
 - まちづくりと都市政策
 - 居住計画に関する研究
 - 建築の歴史の研究
 - 確かな設計能力を身に付ける実践教育



[4年間の学びの流れ]

1年次

学びの基礎づくり

建築の原点である住宅を題材に「見て、触って、造る」体験学習で建築学を学ぶための基礎をつくります。

2年次

専門的な学びの基礎づくり

「計画・歴史系」、「環境・設備系」、「構造・生産系」のそれぞれの分野において、進路と興味に応じた専門分野を学修します。

3年次

専門分野を選択・学修

希望する専門分野の研究室に入り、専門知識や技術をより深く修得します。

4年次

将来(就職・進学)に向けての活動

卒業研究では、卒業論文または卒業設計を選択します。

計画・歴史系 / 環境・設備系 / 構造・生産系

【JABEE】3年次には、JABEE(日本技術者教育認定機構)の認定を受けた、より高度で充実した教育・指導を行う「建築学科総合コース」の選択もできます。JABEE認定により、国際的に通用する技術者を養成する高等教育機関として認められ、卒業と同時に技術士補(要手続)の資格を得ることができるとともに、技術士の一次試験が免除されます。

建築学科総合コース

建築造形演習

建築意匠・建築設計の基礎となる立体造形やドローイングなどの表現技法を、実際につくる「演習」で修得します。

住宅設計

「住宅」の設計プロセスを通して、環境を読み取り、生活を思い描き、発想し、形にし、図面化することを学びます。

建築デザイン製図

設計課題を通して、設計・計画、構造・材料・構法、環境・設備の各専門分野を総合的に設計作品にまとめる能力を養います。

卒業設計

自ら課題を発見し、リサーチし、基本構想、計画・設計、プレゼンを行い、「考え・つくり・伝える」建築力を養います。

教員紹介 | 住居・インテリア学科


	研究分野	建築環境・設備
	研究テーマ	都市・建築における快適環境の形成とエネルギー有効利用に関する研究
	教授 KITAYAMA HIROKI 北山 広樹	

	研究分野	建築計画 デザイン学
	研究テーマ	建築・インテリア領域における空間デザイン、北欧の建築・デザイン
	教授 KOIZUMI TAKASHI 小泉 隆	

	研究分野	都市計画・建築計画 デザイン学
	研究テーマ	商環境デザインに関する研究、非専用住宅（生産を伴う住宅）に関する研究
	教授 FUKUYAMA HIDECHIKA 福山 秀親	

	研究分野	建築構造・材料
	研究テーマ	鉄筋コンクリート構造物の耐久性とその評価方法に関する研究
	教授 SHIRAKAWA TOSHIO 白川 敏夫	

	研究分野	建築環境・設備 環境工学 教育工学
	研究テーマ	快適で健康的な居住環境デザインのための教育・研究 ICTを活用した教材開発・研究
	准教授 KAGAWA HARUMI 香川 治美	

	研究分野	都市計画・建築計画 産業技術教育学
	研究テーマ	アート・サイエンスコミュニケーションとまちづくり・まちおこしに関する実践研究
	准教授 ISAMI YASUHIKO 諫見 泰彦	

	研究分野	都市計画・建築計画
	研究テーマ	既存ストックの再生・活用・リノベーションに関する研究
	准教授 SHINANO YASUHIRO 信濃 康博	

	研究分野	建築計画 住生活学 福祉工学
	研究テーマ	居住地選好及び居住ライフスタイルに関する研究、福祉住環境に関する研究
	准教授 MATSUNOO YOSHIMI 松野尾 仁美	

	研究分野	建築計画（建築人間工学） デザイン学
	研究テーマ	建築空間・設備機器・家具の快適性や安全性に関する研究
	講師 YOSHIMURA YUKI 吉村 祐樹	

■ 学科の学びの特色

住居・インテリア学科では、2022年度から「空間設計のスペシャリストを育成する」独自のカリキュラムがスタートします。その特徴は、次の通りです。

1. 空間設計のスペシャリストを育成

住居・インテリア領域の中でも、①人々を包み込む基本的な空間、②人々が住まう住居、③オフィスや商空間といった業務系施設のインテリア、④住居と業務系施設を複合した住居系複合施設のインテリアの4つを対象を絞り込んだ設計教育を設計基幹科目として位置づけます。その上で、住居・インテリア領域における上記の4つを対象とした設計の専門家たる人材養成を目指しています。

2. 少人数で実践的に専門性を高めるスタジオ制

1・2年次に前述の空間設計を学ぶ設計基幹科目とともに、住居・インテリア領域の基盤となる科目を学修し、住居・インテリア領域の知識を涵養して行きます。1・2年次での学びから、将来の進路選択を考えながら、各自が興味・関心のある専門分野を探索します。3年次前期からは専門分野別の各スタジオにわかれ、住居・インテリア領域における個別の専門的知識及び技術・技能を学修します。スタジオ制の導入により、実践力を培うことを重視した教育プログラムとなっています。

3. 実体験や地域・社会の課題解決を目指した学び

カリキュラムでは、デザインサーベイ、プレゼンテーション実習といった実体験を伴う科目が複数開講しています。所属スタジオでの活動では、ITを活用する工学実習もあり、実体験が豊富なカリキュラムとなっています。また、地域や企業との共同のプロジェクトが、数多く進行しており、本学の建学の理想である「産学一如」そして理念に導かれながら、楽しく学ぶことができるようになっています。このように、実体験や地域・社会の課題解決を目指した学びも特徴の一つです。

■ 2020年度の学科の TOPICS

「福岡県住宅供給公社 名島三の丸団地

— D.I.Y リノベーションプロジェクト —

かつて活気に溢れていた団地の活力を取り戻すため、自らの暮らしを見直し、自らの居住空間を、自らの手で作っていこうというプロジェクトです。

2021年4月より、団地2住戸を学生がデザイン及び施工し、10月に完成しました。この2住戸は、団地住民によるD.I.Y促進のため、誰もが購入できる材料で、誰もが施工可能な工法で作られたD.I.Y展示場として機能します。同時に、退去時の原状回復範囲を大幅に緩和するといった、団地のルール自体もリノベーションすることに成功しました。これを機に、学生と共に団地住民によるD.I.Y文化を根付かせ、団地に活気を取り戻したいと思っています。



■ 卒業後の進路

【住居空間の企画・設計・施工】

住友林業(株)、積水ハウスリフォーム(株)、タマホーム(株)、大和ハウス工業(株)、(株)日本ハウスホールディングス、ミサワリフォーム(株)、(株)ベガハウス、(株)安成工務店

【各種空間の企画・設計・施工(商業施設・公共施設・展示場、住宅、インテリアデザイン等)】

(株)アーキタンツ福岡、(株)オオモリ総建、(株)スペース、(株)白水社、(株)ハダ工芸社、(株)バウハウス丸栄

■ 目指せる資格

卒業後すぐに一級建築士、二級建築士の受験資格を取得可能です。卒業後、数年以内に二級建築士を取得しているOBOGがいます。

その他、インテリアコーディネーターや宅地建物取引士に挑戦し、在学中に合格する学生も複数います。

	研究分野	生態学・緑化学
	研究テーマ	自然環境の保全・再生・修復 および創出
教授 UCHIDA TAIZO 内田 泰三		

	研究分野	水環境工学, 河川工学, グリーンインフラ
	研究テーマ	自然の機能を活用した流域管理に 関する研究, AI/IoT 技術による 洪水予測
准教授 SATO TATSURO 佐藤 辰郎		

	研究分野	地盤工学
	研究テーマ	発生土や副産物の地盤工学的 有効利用
教授 HAYASHI YASUHIRO 林 泰弘		

	研究分野	土木材料 コンクリート構造工学
	研究テーマ	軽量コンクリート部材の 開発に関する研究など
教授 MATSUO EIJI 松尾 栄治		

	研究分野	土木環境システム
	研究テーマ	分散型水管理社会の構築に関する 研究、陶芸の里の文化的景観 の計画と管理に関する研究
教授 YAMASHITA SAMPEI 山下 三平		

	研究分野	水工水理学 海岸工学
	研究テーマ	沿岸域の防災と海域の利用 に関する波や流れの研究
准教授 YOKOTA MASAKI 横田 雅紀		

	研究分野	耐震工学 構造工学
	研究テーマ	設計の想定を超える規模の地震作 用に対する橋梁全体系の崩壊動特 性の解明とその評価法の確立
准教授 OKUMURA TORU 奥村 徹		

	研究分野	社会システム工学 安全システム 自然災害科学
	研究テーマ	災害対応及び対策の実証的研究
准教授 YAMADA TADASHI 山田 忠		

■学科の概要

本学科は土木工学をベースにした学科で、人間が社会生活を営むうえで必要となるインフラ（インフラストラクチャー、infrastructure）が学びの対象になります。インフラにはITインフラ、医療インフラなどがありますが、土木工学では道路、鉄道、空港、トンネル、ダム、橋、公園、河川、海岸、上水道、下水道、都市計画などの社会インフラが対象です。近年では、環境や都市防災にも注目が集まっていますが、これらも土木工学が大きく関連します。つまり、人間が豊かな生活を送るための基盤となる「みんなの共有財産」を整備していく分野のひとつであり、建築都市工学部においては縁の下の力持ち的な存在に位置づけられます。日本では水道の蛇口をひねれば水が出て、川を渡りたければ車で橋を渡ることができるのが当たり前になっています。途上国では決して当たり前の話ではなく、日本でも長い歴史の中でごく最近の話であり、まさに土木技術の進歩が社会に貢献しているのです。

近年は豪雨の発生頻度が年々増加しています。また、巨大地震などへの備え、2025年大阪万博に向けたさらなる開発、老朽化した施設の維持管理、自然との共生、低炭素社会の実現など、今後のわが国の社会基盤整備に求められる課題は山積し、かつ多様化しています。一方で、人口減少による財政縮減も新型コロナウイルス対策への出費と相まって、限られた予算の中で効率よくインフラを整備していくことが社会的な大きな課題となっています。

■4つのキーワードとカリキュラム

本学科では、まず基礎知識を学んだ上で、「土木デザイン」、「都市防災」、「まちづくり」、「環境緑化」の4分野を軸に実践的能力を身につけ、「安心・安全で美しく、自然に配慮した都市」を計画・設計・建設する能力を有する技術者を育成します。さらに、都市防災に関する内容や科目の充実と都市防災専門の教員の配置で、ハードとソフトの両面から都市防災を学べるカリキュラムを設定しています。また建築学科や住居・インテリア学科の授業も履修可能で、建築都市工学部の三学科を横断する形で学修することもできます。

■目指せる資格

本学科が提供する教育プログラムは、JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受けています。これは、本学科の教育プログラムが国際的に通用するレベルにあることを証明するもので、プログラム修了生には「技術士補」と同等の資格が授与されます。また、卒業と同時に「2級建築士・木造建築士」が受験できること、「測量士補」や「環境再生医（初級）」の資格を登録申請により取得できることなども本学科の魅力となっています。また、土木施工管理技士（2級は在学時に受験可）、建築施工管理技士、造園施工管理技士、管工事施工管理技士、ビオトープ管理士などの技術者資格（2級）を、最短で取得するための体系的なカリキュラムが導入されています。その他、技術士（一次試験免除）、高等学校教諭一種免許状（工業）、2級建築士（受験資格）なども特徴として挙げられます。

■優良企業への高い就職率

本学科を卒業して活躍する分野は多岐にわたります。人数的に最も多い民間会社（建設コンサルタント業・建設業・住宅/不動産会社・高速道路会社・鉄道会社・電力会社・造園業など）も優良企業ばかりです。また、官公庁（国土交通省・都道府県庁・市役所や町役場・警察・消防など）も人気の就職先です。



実習の様子

■内田研究室（構造解析ゼミナール）

安全な構造物を作るためには、構造物のこともっとよく知る必要があります。内田研究室では、様々な力を受ける構造物や構造部材の挙動を解析的に明らかにすることが大きなテーマです。

内田研究室では、解析手法として、構造設計にも利用される構造解析や材料レベルからモデル化を行う有限要素法解析（FEM解析）を用います。3年生でゼミ配属になると、有限要素法の勉強を開始します。ゼミでは毎回、プレゼン形式で輪講を進めます。4年生になると、研究室会議で、毎週の研究の進捗状況をプレゼン形式で報告し、みんなでディスカッションします。内田研究室ではプレゼンに次ぐプレゼンです。また、3年生歓迎会に始まり、4年生の卒研の節目節目に、その他、夏合宿、最終発表

会、最終提出、追い出しコンパと、飲み会に次ぐ飲み会です。とても充実した2年間を送ることができます。



2019 夏合宿

■花井研究室（コンクリート系構造ゼミナール）

鉄筋コンクリート造は、建物のさまざまな構造種別の中でも主要な構造のひとつです。また、地震国・日本において、地震に強い建物を造ることは重要な課題です。花井研究室・コンクリート系構造ゼミナールでは、鉄筋コンクリート造の建物について、建物を構成する部材や接合部の加力実験を通じて、設計法や性能評価方法について研究しています。

これらの研究成果は、日本建築学会「鉄筋コンクリート構造計算規準」といった建物の設計基準に反映されています。

また、企業と共同で、鉄筋コンクリート造の建物の新たな耐震補強工法の開発にも取り組んでいます。

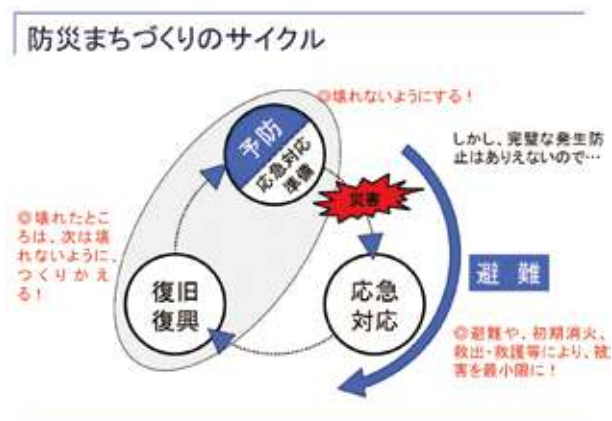


■日高研究室（都市政策ゼミナール）

日高研究室は、都市計画を専門とする研究室です。1999年度に開設されました。1999～2006年度までの8年間は、CADやCGによるコンピュータ支援によるビジュアライゼーションを主な研究テーマとし、その活動の中では、景観研究センターとの連携により、小型CCDカメラを活用したシュノーケルカメラシステムの開発等を行ってきました。

その後は、『景観まちづくり』や『防災まちづくり』をテーマとした都市計画研究を軸にして卒業論文等の指導を行っています。近年の卒業論文等では、『景観まちづくり』研究として「景観法制定前後の景観形成基準の変化に関する研究」「絵になる景観の視点場環境に関する研究 - 筑後画壇の描いた風景画を事例として -」等、「防災まちづくり」研究とし

て「地域による地震災害予防・減災活動に関する研究」、天神地区等のエリアマネジメント組織との共同研究として「エリア防災の推進に関する研究」、「雨水貯留浸透技術を活用した分散型水管理による防災まちづくり」等の研究に取り組んでいます。



■矢作研究室（建築デザインゼミナール）

建築デザイン・設計を専門分野とする研究室です。実践教育を主眼としており、課題や研究活動においても、学生の提案内容が実際の社会でどのような意義があるか、あるいは実現可能であるか意識しながら指導を行っています。3年次のゼミでは、少子高齢化、グローバル化、環境問題、SDGs、ウィズコロナなど、その時々社会問題について話し合い、学生がそれぞれ社会への眼差しを持ち、建築で何ができるのか徹底的に議論を行います。他には、建築家を選択して、作品や思想を調べて議論を行い、建築家の住宅作品をCGや模型で再現して、その建築家が意図したことを読み解くなど、実践的な修練を行います。

そのような修練の集大成として行う「卒業設計」では、田所佑哉くんの作品が「SDL卒業設計日本一決定戦」で11選をはじめ、学外で7つの賞を頂き、

他の学生も学内外で入選を果たしました。



田所佑哉くんの卒業設計作品「便乗する建築」

■大庭研究室（建築ストック活用ゼミナール）

私たちの住む身近な地域には、多くの使われていない建物が存在します。その種類は、住宅（戸建て、集合住宅）や店舗、診療所、学校など様々であり、建物の歴史や所有者、築年数、構造、規模、敷地、周辺環境、地域課題等も異なります。それゆえに、「建築ストックの地域活用」には決まった正解がありません。また、これらストックは、適切に管理されなければ私たちの生活によく影響を及ぼします。しかし、管理・活用の工夫により、地域の衰退緩和や活性化に繋げることができます。リノベーションは地球環境保全に貢献する選択肢とも言えます。

大庭研究室は、2021年度より始まった新しい研究室です。建築ストックとその周りにある地域資源（自然、歴史、文化、慣習、人材等）のコラボレーションによる地域づくりの仕組みを研究していきます。

フィールドワークを中心に活動し、詳細な調査・分析に取り組み着実に研究成果を積み重ねていきます。

（主な研究テーマ）

- ・民家再生（空き家活用）システムに関する研究
- ・農泊の持続可能性に関する研究
- ・地域施設の適正配置計画に関する研究



2020年：松山市の戸建て住宅を活用したシェアハウスの実測調査の様子（写真中央が大庭）

■姜研究室（耐震構造ゼミナール）

巨大地震に対して備えるためには、新築建築物の耐震設計の高度化だけではなく、既存建築物の耐震性能を評価して適切な対応をすることも重要な課題となります。耐震構造ゼミナールでは、新築建築物の耐震設計法、新構法の開発、既存建築物の補強方法などを研究しています。



- ・耐震壁中間梁のせん断強度に関する研究
- ・有開口耐震壁の圧力場を考慮した耐力評価式の提案
- ・W-Eco SYSTEM：省資源・長寿命化を目指した小型PCaパネル打ち込み型枠構法の開発
- ・中村式鉄筋コンクリート造建築の調査・記録および解析
- ・デザインの保護を重視した近代建築の耐震補強の方法と近代遺産の保存活用
- ・九州における現存する鋼構造物の資料調査

←門司赤煉瓦プレイスをはじめ、福岡や北九州などのまちづくりの活動に参加し、保存・活性化のお手伝いなどもしています。

■富田研究室（建築歴史ゼミナール）

富田英夫研究室（建築歴史ゼミナール）では、近代の建築・都市理念の地球規模での影響関係に注目し、つぎの [1] [2] [3] をメインプロジェクトとして研究しています。

[1] 20世紀ドイツの建築芸術学校バウハウスの教師・卒業生たちの地球規模での建築・都市設計にかんする研究

[2] 中世・近世・近代のドイツ語圏地域における曲線・曲面を使った建築形態のCGを用いた形態分析（例えば、ドイツ後期ゴシックの反転曲線リブの形態やフライ・オットーのグリッド・シェル構造の形態など）

[3] 日本人建築家第一世代（とくに九州出身の辰野金吾、曾禰達蔵）の建築手法の研究

[1] バウハウス研究の実績



「マルセル・ブロイヤーの家具」展
（東京国立近代美術館ほか、2017）建築部門への協力（カタログ執筆、住宅作品選定監修、および配置図兼平面図のトレース）

■深川研究室（建築環境ゼミナール）

私の研究室では建築環境工学を専門に研究活動に取り組んでいます。具体的には、屋内外の環境について温冷感の観点から研究しています。

また、コロナ禍では実現できていませんが研究活動の一環で、夏季にシンガポール（写真上）やタイ（写真下）に渡航し、現地の大学と交流活動を行っています。これは、学生時代に少しでも多くの経験をして視野を広げてほしいと考えたことがきっかけです。参加した多くの学生はこの体験がきっかけで海外により興味を持つようになった様子でした。

4年間は長いようであつという間に過ぎていきます。そのため、ゼミ生には少しでも多くの経験ができるよう、何事にも好奇心をもってチャレンジしてもらいたいと考えています。



シンガポール国立大学にて



チェラロンコン大学（タイ）にて

■船越研究室（居住計画ゼミナール）

今日の高齢社会の進行に伴い高齢者が誰とどのように住まうかは重要な課題です。本研究室は、近居、隣居、同居など親子の居住関係を基軸とした高齢者居住について研究を行っている居住計画研究室です。

本学科では3年次から1研究室当たり7～8名の学生が研究室に配属され、同学年から卒業研究の導入教育をゼミナール形式で行っています。

3年前学期の建築学特論Ⅰでは、建築技術者としての眼を養うひとつとして20世紀の名建築について学び、そのまとめとして関心のある建築について発表・討論を行っています。また、高齢者居住および建築計画研究のための調査・分析方法について学んでいます。

3年次後学期の建築学特論Ⅱでは、日本住宅の変化・発展および多様化する高齢者居住について学び、

そのまとめとして親子二世帯居住の住宅設計を行っています。

卒業研究は、卒業研究履修生各々が興味・関心のあるテーマに取り組んでいます。そのため居住施設、公共施設、福祉施設、福祉政策、都市景観等々バラエティーに富んでいます。

卒業後の進路は、(株)一条工務店、スウェーデンハウス(株)などの住宅メーカーおよび三井住友建設(株)などの建設会社に就職しています。



■北山研究室（建築設備ゼミナール）

建築や都市の環境・設備分野が専門の研究室です。快適でエコな環境形成は大切な命題ですが、研究室では“Think Globally, Act Locally”を合言葉に、様々な空間スケールでの快適環境形成を目指して課題に取り組んでいます（図1参照）。

卒業研究の紹介

2021年度は10名の4年生が卒業研究に取り組みました。そのうちの4つを紹介します。「**住宅における床冷暖房の導入に関する研究**」は、これまで検討した床冷暖房とエアコンの併用実験の結果を踏まえ、改めて原点に立ち返り、住宅への導入に向けて既往の文献のレビューを重ね、具体的な併用運転スケジュールについて取り組みました。多くの文献レビューと検証実験から、導入に向けた課題が明らかになりました。

「**公立小学校における空調・換気設備の運用実態と教室環境評価に関する研究**」も継続しているテーマですが、昨年からのコロナ禍で学校教室では、特異な状況が続いています。教室での換気が恒常的になっている一方で、冷暖房への負担が大きくなって

おり、児童にとってはやや我慢を強いる環境になっていることが懸念されます。大学での対面授業でも窓開け換気が徹底されましたので、「**講義室での換気設備と室内環境の実態**」について、機械換気の風量、窓開け時の自然換気風量、授業時の温熱環境や空気環境を測定し、実態を確認しました。対策はこれからですが、換気設備を含め、温熱・空気環境をどのように整えるか、今後の重要な課題です。

現在、住宅の気密性能は省エネ法での要求事項ではありませんが、過去には厳しい基準の下に施工されていました。そこで、「**法改正前後における気密性能の施工実態**」を、気密性能測定装置で実測しました。いずれのケースも基準以下に施工されており、法的規制が解除後も施行の精度は担保されているようでした。

卒業後の進路

今年も、卒業生の半数は大手サブコンへ、その他は住宅・インテリア系、公務員など、全員がそれぞれの道へと巣立ちました。うれしい限りです。

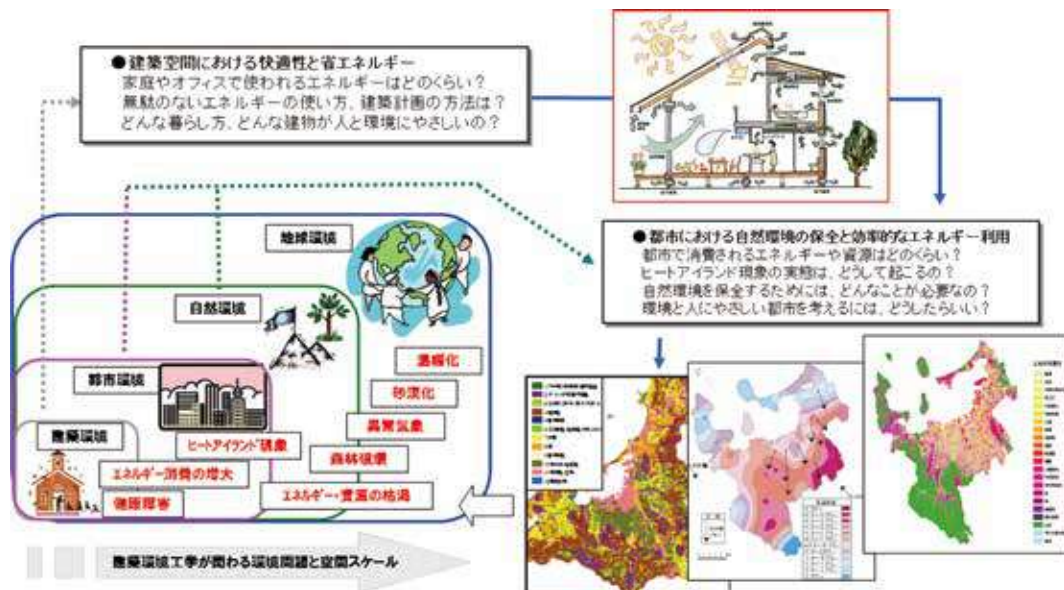


図1 研究対象のスケールと環境問題

■小泉研究室（空間デザインゼミナール）

インテリア・住宅・建築などを対象とした空間デザインに関する研究とその実践活動を主たる専門とする研究室。近年は、北欧の建築・デザインの調査研究を基に、それらをまとめた書籍作りや展示会の開催、講演活動などに力を入れています。以下、最近の実績。

[学生の活動]

(1) 2021年度「卒業研究論文」の題目

立位姿勢でのスマホ使用時における水平バーと前面壁による補助を受けた場合の姿勢に関する実験研究／空間を演出する階段の手法と効果に関する事例研究／オープンスペースにおけるテレワークボックスの配置と使われ方に関する研究／建築空間におけるシークエンスの演出方法に関する研究／タイニーハウスを使った二拠点居住の暮らし方に関する研究／宿泊施設にコンバージョンされた事例に関する研究／建築内部空間において、外部的に感じさせる演出手法に関する事例研究

(2) 2021年度「卒業研究設計」の題目

自然の遊びを大切にしたい「離れ」を持つ学び舎／個が集まり混ざりあいながら共存する全体性をパブリックとする在り方～ランドスケープと建築の間で移ろう私のliving & reading space～／天神西通り界隈における歩行者優先化を主としたストリートデザイン

[小泉の活動]

- (1) 北欧の建築・デザインに関する書籍・論考
 - ・『北欧建築ガイド 500の建築・都市空間』小泉隆＋九州産業大学小泉隆研究室（学芸出版社、2022年2月）
 - ・『アルヴァ・アアルトの曲げ木によるキャンチレバーチェア及びパイミオチェアの造形特徴～マルセル・ブロイヤーの椅子との比較による支持フレーム及び座・背面の形態分析～』吉村祐樹、小泉隆（『デザイン学研究』、2021年）
 - ・『ステイホームを心地よく…ぬくもりの北欧スタイル』行正り香、小泉隆、その他（NHK出版、2020年）
 - ・『アルヴァ・アアルトのインテリア —建築と調和する家具・プロダクト—』単著（学芸出版社、2020年）
- (2) 「北欧の灯り展 ～照明デザインから見る灯りの文化～」日本フィンランドデザイン協会と共催。
 - ・2019/7/4—7/31 新宿リビングセンターオゾン
 - ・2019/9/7—11/3 長野県小海町高原美術館
- (3) 講演等
 - ・2021/11/28 オンラインセミナー 講演「デンマークの街と建築：人間中心の街コペンハーゲン」福岡デンマーク協会主催 *左図
- (4) 展示計画
 - 『がんと向き合うママと家族の「共に生きる」笑顔の絆写真展』展示計画、小泉隆、吉村祐樹、酒井航（DOUBLE = DOUBLE FURNITURE）（千早なみきスクエア、2020年11月6日～9日）*右写真

[小泉 隆]



プロフェッショナルが見たデンマーク
[第1回 開催]
日時：11月28日(日) 14:00～15:30
主催：一般社団法人 福岡デンマーク協会
協力：教育文化研究所
小泉 隆 (九州産業大学建築都市工学部)

FDAオンライン特別講座
デンマークの街と建築 第1回
「人間中心の街 コペンハーゲン」

参加費：一般 1,000円 会員 500円
申込方法：
<https://fdajapan.peatix.com>
お問い合わせ：
denmarkfukuoka@gmail.com



■白川研究室（住居構法・材料ゼミナール）

担当科目

住宅構法概論、建築材料、環境構造実習、材料構造実験など

研究室の専門分野

本研究室は、建築材料や構法などを専門分野としています。研究としては、鉄筋コンクリート構造物の耐久性予測、補修補強材料の評価、新たな仕上げ材料の開発などを行っています。現在行っている研究の一部について研究の背景と内容を紹介します。

現在、多くの建物が存在し、また、建設されています。その一例を図1に示します。図は国土交通省より公表されているマンションの新規供給戸数とストックを示している。昭和三十七年に建物の区分所有等に関する法律が制定され、平成二十一年までに毎年十万から二十万戸供給され、六百万戸弱のマンションのストックがあります。現在、マンションに関わらず、建物の維持管理が人口減少と絡み社会問題となっています。

図2は、同じく国土交通省より公表されている建築土木分野で使用される工事額の推移です。現在五十五兆円程度が建設工事に使用されています。この内、維持修繕工事の比率は高まっており、28%が維持修繕工事に使用されています。維持修繕工事を行うには、建築物の躯体部分の劣化程度（耐久性）を診断することが必要となってきます。

研究室では、非破壊で建物の劣化状況を予測することができる「表面吸水試験装置」を開発し、その有用性を検証しています。図3に研究室で開発している「表面吸水試験装置」と既に実用化されている「透気試験装置」を使用し、実構造物を調査している様子を示します。

一般に、建物を診断する場合、建物の一部を壊し

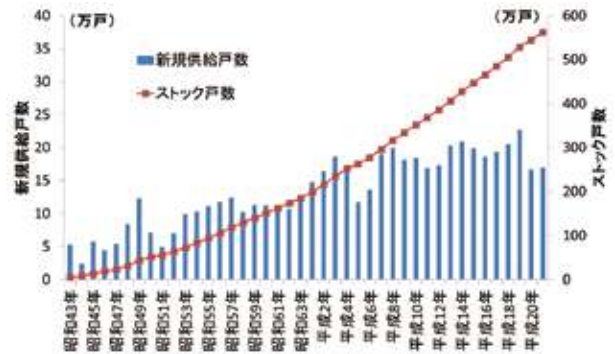


図1 マンションの新規供給戸数とストックの推移



図2 維持改修工事の推移（建設業ハンドブック 2017）



図3 表面吸水試験装置による実構造物調査

て、劣化状況を判断するのですが、この装置は、非破壊で建物の劣化状況を判断することができる装置です。現在、この装置を使用し、鉄筋コンクリートの耐久性を評価する方法について他の大学と共同で検討もを行っています。

■福山秀親研究室（商環境デザインゼミナール）

<A>『領域・境界』を主題にした建築意匠論・建築論を基盤にする**設計の研究**。

『領域・境界』を主題にした**商環境**（オフィスや商業空間、非専用住居、新しい形式の住居、公共施設）の**実務設計**。

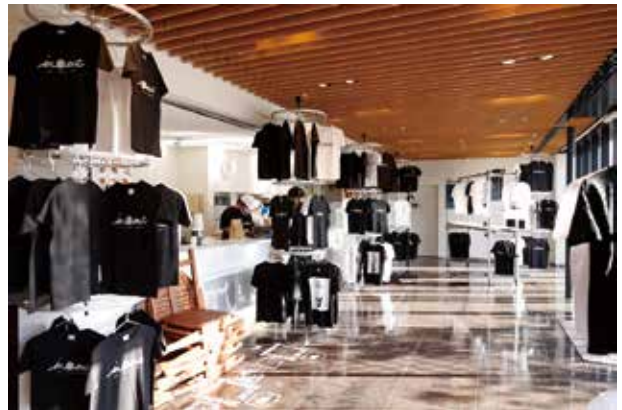
上記<A>の研究設計・実務設計を専門とする福山秀親主宰の研究室です。企業や地方自治体から実施を前提にした設計・デザインの研究・実務を積極的・戦略的に受託を行い、『領域・境界』を主題にした建築意匠・建築論を社会に於いて実施の設計・デザインに繋げる方針で活動を行っています。

受託研究例（2021年度）①本学オープン・イノベーション・センターのカフェ業務空間・グラフィック・ユニフォームなどのブランディング実施計画（受託元：本学理事会+産学支援室、テーマ：障害者就労の商環境）②駅前不動産賃貸集合住宅・新しい住宅価値の創造実施計画（受託元：駅前不動産、テーマ：賃貸住宅の非専用住居化）③川端通り商店街における商・住併用空間実施計画（受託元：うちのひ、テーマ：商環境+住居・都心住居）④ソーシャルインパクト調査・展示実施計画（受託元：クロスエイジ+本学商学部木村研究室、テーマ：農業支援事業、研究の表現ツール）⑤地方自治体のブランディング実施計画（受託元：古賀市上下水道課、テーマ：公共事業民営化の業務空間）等。

研究活動と教育活動を分けて位置付けています。

教育活動は（ゼミナール）は、商環境デザインゼミナールという名称で、業務空間（商環境）・消費空間（住環境）を活動の『領域・境界』の視点・立ち位置から建築・インテリアを考察していきます。

『領域・境界』を主題にした建築意匠・建築論をゼミメンバーで深め、ゼミ生個々自らが、**新しい領域論・境界論**を示し、**新しい建築・インテリア**の空間設計や概念操作に繋げていき、「卒業研究」で発展させました。卒業研究の形式は「**研究としての設計**（設計実習とは異なる）です。



本学オープン・イノベーション・センターのカフェ業務空間・グラフィック・ユニフォームなどのブランディング実施計画



ソーシャルインパクト調査・展示実施計画

■ 諫見研究室（地域貢献実践ゼミナール）

ドイツの文豪、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）の言葉である「知識だけでは充分ではない、活用せよ。意欲だけでは充分ではない、実行せよ」は、諫見研究室の研究室訓です。諫見研究室は、科目「地域貢献学実習B」や「住居・インテリア特論Ⅰ／Ⅱ」、「インターンシップ」を基盤に、まちづくり・ものづくり・ひとづくり・いえづくりに関する課題を通し、学生が考えたこと、作ったものが、地域の役に立つ活動を実践しています。

主宰者の諫見泰彦は、山口県長門市、福岡県糸島

市、長崎県大村市、宮崎県延岡市等に出向き「市民参画型のまちづくり実践研究」を、三好不動産、ハウスメイト、トランスコスモス等と連携し「いえづくり教育用の教材開発研究」を実施しています。また日本建築学会子ども教育支援建築会議の議員として、大学間の共通研究にも参画しています。さらに「アート・サイエンスコミュニケーションとまちづくり・まちおこし」に関する踏査研究と出展作品の製作に取り組み、文化庁文化・芸術による子ども育成総合事業派遣芸術家としての活動も行っています。



積み木であかりのワークショップの実践 [山口県長門市]
 ・国立青少年教育振興機構子ども夢基金活動事業 採択
 （連携：長門おもちゃ美術館、本学子ども教育学科）



糸島国際芸術祭案内板「黒板ロボ」の製作 [福岡県糸島市]
 ・日本産業技術教育学会コンテスト 入賞
 （連携：糸島芸農＝糸島国際芸術祭実行委員会）



空店舗でコワーキングカフェの設計施工 [長崎県大村市]
 ・日本インテリア学会九州支部長賞 受賞
 （連携：De-Sign グループ・株式会社大村湾商事）



造形表現スクーリングによる賑わい創出 [宮崎県延岡市]
 ・小田原短期大学保育学科通信教育課程 委嘱
 （連携：延岡市役所、学校法人三幸学園）

■香川研究室（居住環境デザインゼミナール）

居住環境デザインゼミナールの目的

本ゼミナールの目的は「快適で健康的な居住環境デザインのための研究」です。

環境工学の分野では、課題を発見し、技術的解決を探求するために、五感を研ぎ澄まし、ハカ(測・量・図・計)り、ICTなどの手段で得たデータを定量的に分析、評価します。そこで本ゼミナールでは、「誰のために、いつ、どこで、□を○の状態にする、□を○の量に満たすようにする」ひいては「□の状態や量を○にするために◇する」といった枠組みを構築して、□、○、◇に当てはまる解を合理的に導き出すための具体的な目標を設定します。□は、私たちが居る住環境すなわち居住環境の、特に住居・インテリア空間に焦点を絞って分解して選んだ、居住者の快適性や健康に大きく影響しそうな要素です。□の制御や組み合わせの工夫によって快適で健康的な居住環境デザインを具現化できるという仮説をたてています。目に見える要素も見えない要素も時々刻々と非定常に流れ複雑に相互作用していますが、その環境を、□と○と◇の枠組みに当てはまるようにモデル化して考えていきます。

「快適で健康的に過ごしたい」という願いは普遍的です。大学生は独善に陥らずに活動を推進できれば、学生にしか成し得ない方法で、社会問題の解決に貢献できる恵まれた立場にいます。大学での取組が社会に通じているか、産官民と連携協力したり、学会や研究会で成果発表したりして、継続的に情報発信し、切磋琢磨します。

2021年度の卒業研究テーマ

小中学校の普通教室と特別教室の環境調査とエネルギー消費量の調査／地理情報データを用いた障がい者グループホームの必要エリア特定／椅子の配置が利用者間の距離に与える影響／共有空間の雰囲気を変える窓フィルムデザインについての調査と分析／営業支援を重視したプレゼンテーション3DCAD



写真 ゼミナールでの活動の様子

を用いた古民家リノベーション案の作成／段ボールベッドの居心地評価のための実験研究

2021年度プロジェクト活動

被災地における人々の健康的な生活と快適性のための居住環境調査／ひとにも住宅にも環境にもやさしい窓と次世代空調システム／建築設備におけるサステナブルデザインに関する環境調査

ゼミナール卒業生の主な就職先

石垣市建築課職員／大橋エアシステム(株)／亀屋硝子(株)／(株)河村佐藤デザイン／(株)九電工／(株)JRシティ大分／昭和建设(株)／(株)新日本設備計画／須恵町職員／(株)スエナガ／セキスイハイム九州(株)／大英産業(株)／大和ハウス工業(株)／高藤建設(株)／トーテックフロンティア(株)／ナフコ(株)／(株)ピースホーム／福岡エネルギーサービス(株)／丸栄化工(株)／(株)よかタウン等

ゼミナールの連携協力先 大分市教育委員会／福岡市教育委員会／宗像市教育委員会／NPO法人都市・建築遺産保存支援機構／熊本県益城町の皆さま／安心計画(株)／(株)オープンソース・ワークショップ／亀屋硝子(株)／(株)スエナガ／(株)サンゲツ／三建設備工業(株)／(株)ゼンリン／富士通(株)FI本部／(株)福岡パッケージ／リノベンチャー(株)／九州計測器(株)

今年度も引き続き多大なるご指導とご支援を戴いております。記して深謝申し上げます。香川 治美

■信濃研究室（再生デザインゼミナール）

■既存ストックの再生・活用・リノベーション

研究のテーマの軸は、今世紀に入り始まった“リノベーション現象”を手がかりに、既存ストックをいかに再生・活用することにより、私達が育ててもらった“まち”を次世代に引き継ぐことができるのかです。そのためには、これからの時代がどうなるのかを予測し、どのように対応していけば自分の住んでいるまちを維持できるのかを学んでいく必要があります。

■何を学ぶのか

再生・活用・リノベーション時代に重要なのは、「文化的価値の上の文化的行為をいかに創造できるのか」です。リノベーションが生み出す「ライフスタイルの文化的価値」は「世界観」を共有する人々を吸引する「共感システム」として機能し、感度の高い人々を引き寄せ、いつしか「エリアの再生＝まちづくり」へと発展していっています。このような文化的構図を背景とした継続的な小さな取組の拡大が、育ててもらった“まち”を次世代に引き継ぐことにつながっていきます。そこで、つぎのようなことを学んでいきます。

- ①日本および海外の各地で実践されている再生・リノベーション、まちづくりの取組み事例について。
- ②新しい時代を予測した、これからの生き方・働き方を考えたうえでの住まい方など、これからのライフスタイルと住まいについて。
- ③再生・リノベーション実践のためのデザイン、設計、施工、活用技術について。コンペ等の作品制作、協力企業とのコラボレーションによるリノベーション実践体験、ワークショップやイベント等の企画・実践、自力施工（D. I. Y.）など。

このような目標をかかげ、研究や作品制作、ゼミ活動をおこなっていきます。

信濃 康博



名島三の丸団地リノベーションプロジェクト



福間倉庫リノベーションプロジェクト

■松野尾研究室（住生活学ゼミナール）

□研究室の特徴

研究室では、「住居」を中心に据え、主に居住ライフスタイルに関連するテーマを扱っています。また、住まいが集まってできた「まち」も研究対象として捉えています。ゼミでは、こうしたスタンスのもと、住居について間取りだけでなく、法令、架構、環境を総合的に理解して設計ができるよう、実践的な学びの場を設けています。

□研究室の研究テーマ

*伝統的な木造建築文化に着目

日本の伝統的な木造建築文化に着目し、古民家や伝統的建造物群保存地区を研究対象としています。歴史的建造物を地域資源として活かすための課題を分析するほか、そこに住む人の暮らし方調査や古民家の実測調査も行っています。現在の住宅のあり方を考察するためにも、日本の歴史的文脈の中で培われた木造建築文化に触れるよう、伝統構法を学ぶ機会も設けています。

*質の高い住まいを目指して

暮らしの価値観が表れる居住ライフスタイルや居住地選好に注目し、どこに住むとどんな暮らしが実現できるかを調査しています。調査結果から、暮らしの質を高めるための要素を考察していきたいと考

えています。住まいや住む場所の質が高まれば、毎日の暮らしが豊かになるのではないのでしょうか。こうした質の高い住まいのあり方は、地域へと波及し、まちづくりへと繋がっていくと考えています。

*だれもが過ごしやすい住環境を

今後、少子高齢化が進行し、高齢者の一人暮らしや在宅介護が増加するなか、社会の変化に対応した住宅のあり方が問われています。そこで、高齢者や障害者、そして誰もが過ごしやすい住環境を目指して、福祉住環境について研究しています。

□研究室の活動報告

地域資源の活用をテーマに、古民家が建ち並ぶ新宮町立花口地区を研究フィールドとして、継続的に調査研究を行っています。今年度は、歴史的建造物への理解を深める為、柳川での古民家の活用事例の見学や活用に取り組む団体に聞き取りを行いました。

そのほかに、桧原シュタイナー土曜学校4年生の「いえづくりプロジェクト」の子ども達の家づくりを学ぶ場に、当研究室の学生が設計した木造建造物を提供しました。大工技術者の指導のもと、子ども達と学生が一緒になって、建造物を組み立てることで、子ども達だけでなく、学生にとっても木造建造物を学ぶ機会になりました。 松野尾 仁美



写真1 「いえづくりプロジェクト」組み立ての様子



写真2 「いえづくりプロジェクト」完成作品の様子

■吉村研究室

吉村研究室の研究対象は、家具や照明器具など空間に関わるモノです。特に「建築人間工学」の視点から研究を進めています。建築人間工学とは人間と建築空間・設備機器・家具等との調和（安全性や快適性等）を考える学問です。

研究室では主に次のことを行っています。①卒業研究（4年次必修科目）、②福岡・大川家具工業会と連携した家具開発（KSUプロジェクト型教育）、③建築人間工学に関する研究、④和紙を使った灯り制作と展示会出展。本稿では活動の一部を紹介します。

【卒業研究について】

卒業研究においても家具の寸法や角度など工学的な視点から研究を進めています。ある学生は、高齢者が椅子から立ち上がることを容易にする肘掛位置に関する研究をしました。まず既存製品の寸法調査や高齢者へのヒアリング調査などから現状を把握し、次に高齢者と若者を被験者とした椅子の肘掛け位置の評価実験を行い、その結果をもとに設計図を作成し、最後に自ら木製椅子を制作しました（写真1）。制作した椅子はJID日本インテリアデザイナー協会南日本エリア主催「第15回学生インテリアデザインコンテスト」に出展し、最優秀賞を受賞しました（写真2）。

【プロジェクト型教育について】

協同組合福岡・大川家具工業会および本学芸術学部生活環境デザイン学科との産学連携プロジェクトは、2021年度で7年を迎え、様々な家具・雑貨の企画開発をしてきました（写真3）。試作品は学外にて展示会を開催し、合わせて展示計画も行っています。プロジェクトに関わることで家具業界への理解を深め、2019年度2名、2020年度2名、2021年度1名が家具関連業界へ進路が決まりました。



写真1 卒業研究最終成果物



写真2 コンテスト出展用プレゼンボード



写真3 背板の角度・奥行が変わるソファ

文：吉村 祐樹

内田研究室（生態工学ゼミナール）

研究方針

Conserve to preserve! 都市および農村の持続的発展には、開発のみでなく自然環境との共生が不可欠です。本研究室では、自然環境の保護・保全・再生・修復・創出に資する手法について、動植物の生理生態から研究を行っています。

キーワード：都市緑化・治山緑化・生物多様性



立花山での実習

近年の卒業研究課題

- ・外来植物スズメノナギナタの発芽特性
- ・小学校プールにおけるヤゴの生育と羽化に関する2、3の考察
- ・サクラマチクマモト屋上緑化が都市の生物多様性で担う役割
- ・阿蘇における地域性種子を用いた治山緑化
- ・福岡市のため池の分布と現状
- ・低管理インフラにおける植物の侵入と野生動物の利用実態



自動撮影カメラに写るニホンイノシシ

研究室の活動

(1) 地域交流

- ・唐原川のいきもの観察会（福岡市）
- ・小学校プールのいきものたち（立花小・勝馬小）
- ・オグラコウホネプロジェクト（新宮町）
- ・都市のいきものたち（福岡市）
- ・立花山写真展（香椎下原公民館）

など



造成中のはばたき公園における生物相調査

(2) 卒業研究の様子



小学校プールにおける試験区の設定



阿蘇荻岳のフロラ調査

■佐藤研究室（流域マネジメントゼミナール）

研究室の方針

「水」をベースとして自然と人の営みが調和した、より豊かで持続的な社会の構築を目指して、実践的な研究やプロジェクトに取り組んでいます。

地球温暖化に伴う気候変動の影響はもはや将来の問題ではありません。日本、特に九州では毎年のように豪雨災害が発生し、甚大な被害を受けています。一方で、人口減少・少子高齢化やコロナ禍、生物多様性の損失、再生可能エネルギーの導入など、社会的な課題も深刻です。持続的な社会の構築に向けて、人口増加、高度経済成長をベースに培ってきた流域における住まい方を再考する必要があります。防災・減災、環境保全、都市・地域づくりを一体的に捉えた新たな流域マネジメントを実現していかなければなりません。そのためには、自然の持つ様々な機能をうまく使って社会課題の解決を目指す NbS (Nature-based Solutions) やグリーンインフラの考え方が重要となります。当研究室では、グリーンインフラの多面的な機能の評価や不確実性を補うための最新 AI/IoT 技術に関する研究、災害からの復興デザイン等に関する実践的な研究を行っています。

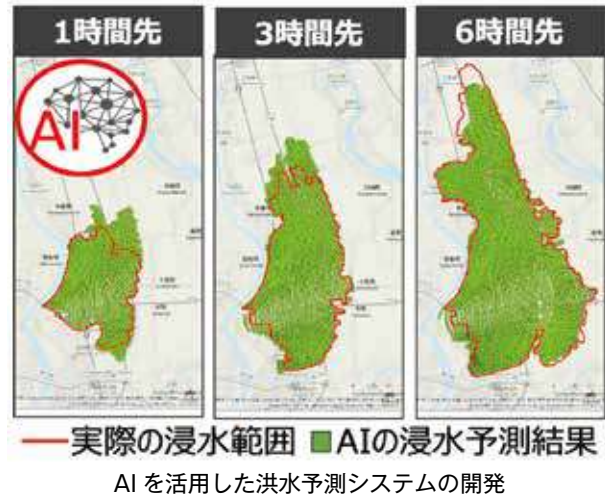
研究テーマ・プロジェクト

- ・自然再生河川の生物生息場、洪水減勢効果の検証
- ・流域治水の実現に向けた、住民ベースの流域モニタリングツールの開発
- ・豪雨災害からの復興デザイン

研究室の雰囲気

現場（フィールド）での経験、得られた感覚は貴重な財産です。コロナ感染症の状況を見ながら、出来るだけ多くの現場（フィールド）を経験できるように心がけています。また、研究は一人で行うものではありません。研究室のメンバーやプロジェクトで関係する方々に協力してもらいながら、また自身も協力しながら研究を進めていくことが重要です。

キーワード：グリーンインフラ、Nature Based Solution、流域治水、多自然川づくり、地形・地質、河川環境、小水力発電、再生可能エネルギー、GIS、ドローン、LiDAR、社会的共通資本、IoT



自然再生河川における魚類調査



災害後の小学校跡地利用に関するワークショップ

■松尾研究室（コンクリートゼミナール）

■研究内容

コンクリートは社会インフラを支える重要な建設材料のひとつです。コンクリートの歴史は古く、ローマ時代から使われていました。ただ、当時のコンクリートは固まるメカニズムが現在とは全く異なるので、正確には別ものと位置付けられています。近代のコンクリートは産業革命期に新たに発明されました。それでも19世紀前半からの長い歴史があり、基本的な技術はすでに確立されています。それでもその時々、社会背景に応じて研究する内容はまだまだたくさんあります。松尾研究室ではこのコンクリートに関する材料的あるいは構造的な研究を行っています。

当研究室での最近の研究事例は、「マイクロ・ナノバブル水を練混ぜ水に用いたコンクリートの表層品質改善」、「卵殻を細骨材の代替に用いたコンクリートの特性」、「電子レンジを用いた表乾状態の判定手法の確立」、「竹筋コンクリートに関する研究」、「非破壊試験による品質管理に関する研究」、「軽量コンクリートの開発研究」、などがあります。

マイクロバブルやナノバブルは美容面でご存知の方も多いと思いますが、これをコンクリートの練混ぜ水として使うことで品質改善ができるかを確認しています。卵殻は新たな細骨材（砂のこと）としての活用を試みています。このような場合、吸水率を明らかにする必要がありますが、その手法として電子レンジを使ったやり方を提案しようと試行錯誤して実験しています。竹筋コンクリートとは鉄筋の代わりに竹を使ったコンクリートのことで、戦時中にも使われた実績があります。当研究室では、現在の設計法に合わせて見直すところから始め、竹の特性をうまく活用して適材適所で使うための技術を試行錯誤しながら開発しています。非破壊試験は社会的にもニーズの高いテーマで、劣化が急速に進みつつ

あるインフラを効率よく劣化診断する技術です。当研究室では透気係数というコンクリートの密実度を表す指標を使って基礎研究を行っています。軽量コンクリートは発泡スチロール廃材を砂の代わりに用いたもので、適用事例として農地の水門（ゲート）を作った現場での実証試験を行っています。

■研究室の雰囲気

実験が大変なときもありますが、研究室のみんなで一致協力して楽しく頑張っています。実験は主に9号館の1階で行っています。学生部屋は8号館4階にありますので、気軽に遊びにお越し下さい。



写真-1 卵殻が入ったモルタル



写真-2 コンクリートの固有振動数の測定

■林研究室（地盤工学ゼミナール）

■研究室の方針

理工系学生としてふさわしい経験を積むことを目指しています。卒業研究は、自ら考え計画的に行動し、解決するプロセスを学びながら、自ら定めた目標に向かって取り組んでもらいます。成果よりもプロセスを大切にしています。

現場見学、共同研究や土木研究会の活動などを通じて企業や他大学の方、本学の下級生とも交流する機会も設けています。土や土木に親しみながら、研究や専門分野に対する興味を高め、技術者としての素養を身につけることを期待しています。また、幅広い人間関係を築くことで、今後の人生を豊かにするきっかけにして欲しいと願っています。

■研究内容

建設資材としての土や地盤の防災に関する研究を行っています。

「発生土や産業副産物を用いた新しい土質安定処理方法の開発」では、河川やため池、港湾・航路などからの軟弱な発生土、フライアッシュなどの産業副産物を堤防や道路などの盛土材として活用するための土質安定処理方法を研究しています。土の力学特性改善だけでなく、環境安全面や経済面などにも着目し、民間企業と共同で研究を実施しながら問題解決に挑んでいます。

「降雨による斜面災害リスクに関する評価手法の開発」では、住宅地に近接した斜面の多い北九州市を対象に、近年多発する豪雨による土砂災害の減災対策を研究しています。雨の降り方と地形や地盤の特性の相互関係を考慮することで、土砂災害の発生を的確に予測する手法の確立を目指しています。産官学が共同で現地調査や解析などを行っています。

■研究室の雰囲気など

実験や調査の実施は各自の主体性を尊重していますが、研究室内の共同作業や外部との共同研究も実施しています。また、親睦会やスポーツ大会、学外での研究会・イベント参加にも力を入れているため、



2021 年度卒研生



利根川遊水地での現場実証実験



耶馬溪跡田トンネル工事現場見学

結構忙しい毎日です。そのような中でもお互いに思いやりと和を大切にし、ともに苦勞を乗り越えることで絆を深めています。連帯感のある充実した研究室です。

■山下研究室（景観計画ゼミナール）

■研究室の方針について

技術や思想は実践に応用されることで真価がわかります。本研究室では、学生とともに、社会が課題とするテーマについて、現場に入り、地域の人々や自然の状態を体験的に知り、それを大きな視野や科学的な手法によって捉え直し、対策を練って、実装するというプロセスを重視します。

本研究室の大きなテーマは次の2つです：

- 1) 地球温暖化への適応と分散型水管理
- 2) 伝統工芸の産地における文化的景観の持続と観光

市民のみなさんや行政や企業の技術者、それに他大学の研究者や学生との交流をとおして、幅広い実践的なプロジェクト型研究教育を進めています。



■学生の研究内容について

上記の2つのフレームに基づいて、2021年度は以下のテーマの卒業論文に取り組みました。

【卒業論文】

- ・東野 修平 「新設雨庭の水収支と植栽の実測評価」
- ・一尾 拓矢 「立花口区の古民家における認証制度活用のための住民意識調査」
- ・永本 海里 「小石原焼の里の生業・観光・風景の持続に関する調査研究」

- ・村上 巧真 「相国寺の枯山水庭園における雨水浸透機能の実測と評価」
- ・山下 峰明 「社会福祉法職員の水害に対する意識に関する事例研究」
- ・加藤 颯馬 「新宮北小学校における雨水管理機能の継続的調査」



■研究室の雰囲気等

8号館4階の研究室・ゼミ室が、大学にみんながいる場所です。計画系の研究室なので、実験室はなく、研究室・ゼミ室ではおもに、研究の報告会、ゼミの研究会、PCを使った作業などを行います。もちろん、休憩時には、みんなで雑談したり、ゲームをしたりすることもありますよ。

学内では研究室・ゼミ室のほかに、23号館4階の景観研究センターで、研究会やセミナーが開催されるときに参加して、学内ではなかなか聴けない貴重なお話を伺う機会がたくさんあります。

研究室・ゼミ室での活動だけでなく、調査やプロジェクトのために、学外に行くことが多々あります。また、学会やシンポジウム・研究会での発表もあり、他大学の学生・院生と、切磋琢磨もしています。

2021度は長引くコロナ禍の影響で、例年行っていたゼミ合宿や研究室の懇親会を開催することができませんでした。それでも研究にしっかりと取り組み、現地に行ける時は慎重に対策をしながら積極的に足を運ぶこともしました。大切な時間を丁寧に過ごすことはできたかもしれません。

■横田工学研究室（海岸ゼミナール）

研究室の方針

海岸工学という分野には難しそうなイメージがあるのではないのでしょうか。主要な外力である波や流れの発生メカニズムは複雑であることは否めませんが、卒業研究では工学的な課題の解決を試みるので、数式の難しさを恐れる必要はありません。

1年という限られた時間のなかで（長く感じるかもしれませんが）、課題解決に資する知見が得られたならば、成功です。

大事なのは日々の研究への取り組みであり、適切な情報を収集し、得られる知見を想像し、結論を得るために必要な検討手法を考え、自主的に創意工夫を繰り返すことが求められます。

研究の内容

沿岸域は、物流、漁業、レジャー、観光など、多くの産業に利用される一方、高波、高潮、津波など、自然の脅威にさらされています。研究室では港や海岸などの沿岸域の利用・防災・環境をテーマとし、波・流れなどの自然現象の解明・予測や対策などの研究を行います。主に取り組んでいる研究課題は以下のとおりです。

このほか、波力発電や水質保全など自主的なテーマ設定を歓迎します。

・越波に関する研究

- 動画に基づく越波打上げ高の出現特性の把握
- 越波打上げ高と海象条件の比較
- 波別越波量の観測装置の開発
- 観測に基づく越波飛沫の出現特性の把握

・平板式消波構造物に関する研究

- 水理模型実験による効果の検討
- 数値実験による効果の検討



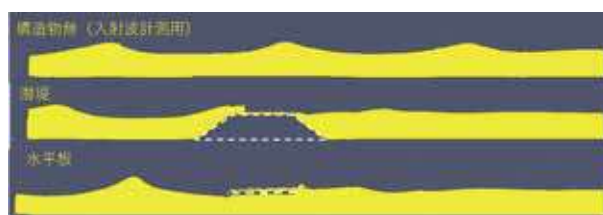
越波の現地観測



水理模型実験



水理模型実験




数値シミュレーション

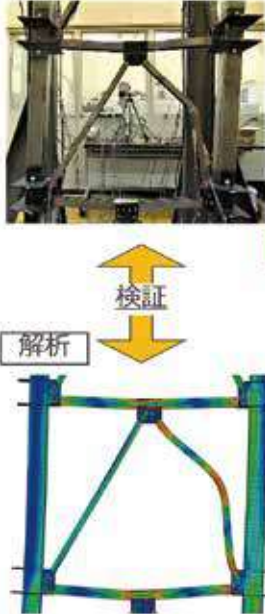
■奥村研究室（耐震・構造工学ゼミナール）

シミュレーションの精度検証（模型レベル）

実験



検証




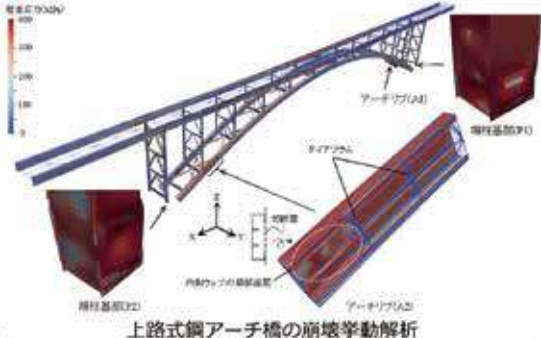
振動台寸法：1500×1500mm
 加振方向：水平1方向+鉛直
 最大加速度：14.7m/s²
 最大搭載質量：1ton
 振動数範囲：1～100Hz

実大構造の崩壊挙動の解明と制御法の検討

スーパーコンピュータによる高精度大規模解析

「不老」FX1000
 7.782 PFLOPS
 2,304ノード
 110,592コア





上路式鋼アーチ橋の崩壊挙動解析

■研究の概要

一般に橋梁の耐震設計では、あらかじめ規定した設計用の地震動に対して構造安全性や地震後の使用性・修復性等の耐震性能を確保します。この際、設計用の地震動は過去に経験した最大級のものをもとに設定することが基本的な考え方となっています。しかし、その前提が崩れた場合、すなわち設計の想定を超える規模の地震動が作用した場合に対して、構造物が崩壊に至るような致命的な被害を防止するための十分な保証があるとは言いがたいところがあります。従来、過去の記録を上回る巨大地震を経験するたびに設計用地震動の規模を引き上げるといった対症療法的な措置がとられてきていますが、これに加えて想定を上回る地震に対しても構造物が壊滅的な大規模崩壊に至らないようにするための対策を講じておかなければなりません。このためには、想定外の地震作用に対して構造系が耐震設計上の安全限界を超えた後の崩壊挙動を正確に予測し、制御するという新たな設計の枠組みを構築する必要があります。このような次世代の耐震設計を推進するための研究として、本研究室では振動台を用いた加振実験

ならびに高精度の数値解析を実施し、構造物の崩壊挙動の解明、その予測手法の確立に向けて取り組んでいます。具体的には、橋梁の一部を模した骨組模型の加振実験を行い、構造系が崩壊に至るまでの詳細なデータを取得します。これをベンチマークデータとしてモデルレベルでの数値解析の妥当性と精度検証を行った上で、実際の橋梁を対象とした構造全体系の崩壊挙動を大規模な数値解析により明らかにします。このような先駆的な研究を進めるためには、従来の考え方や手法にとらわれない柔軟かつ挑戦的なアプローチを行うことが重要です。大規模数値解析においては、(株)地震工学研究開発センターの協力のもと、スーパーコンピュータにより構造解析を行うためのプログラム開発を進めています。

■研究課題

- ・ 想定を超える地震作用に対する橋梁全体系の耐崩壊性能の評価
- ・ 次世代スーパーコンピュータによる鋼構造物の高精度耐震解析プログラムの開発
- ・ 自己復元特性を有する免震・制震機構の開発

■山田研究室（防災計画学ゼミナール）

○研究室の方針

日本では毎年のように自然災害が発生しています。近年の九州地方に限っても2016年1月の大寒波、2016年4月の熊本地震、2017年7月の九州北部豪雨、2020年7月の豪雨などがあます。研究室では、災害に遭わないようにするための、もし遭っても被害を軽減するための教育研究活動、社会貢献活動に取り組んでいます。

○卒業研究のテーマと成果

研究は行政や住民による災害対応やソフト面の災害対策を対象にしています。

行政を対象にした研究として、2016年1月寒波における自治体の断水対応を把握し教訓を抽出した研究、2016年1月寒波が自治体広報紙の水道管凍結対策記事に与えた影響を分析し今後の記事のあり方を検討した研究などがあります。

住民を対象にした研究として、2017年7月九州北部豪雨における日田市消防団と朝倉市消防団、2018年7月豪雨における呉市消防団の災害対応を把握し教訓を抽出した研究、1969年から2018年までの風水害における消防団員の人的被害を分析し対策を検討した研究などがあります。

卒業研究で取り組んだ内容は学術誌である土木学会論文集や水道協会雑誌に掲載されています。

1) 山田忠・勝田瑞基・酒井大貴、2016年1月寒波が福岡県内60自治体の広報紙の水道管凍結対策記事に与えた影響、水道協会雑誌、Vol.90、No.1、pp.21-34、2021.

2) 山田忠・後藤雄太・松枝心路、風水害における消防団員の人的被害の特徴－1969年から2018年までの災害を事例に－土木学会論文集F 6（安全問題）、Vol.1、No.1、pp.20-27、2020.



2017年7月九州北部豪雨の日田市の災害現場



2018年7月豪雨の呉市の災害現場

○3年間の主な就職先

卒業生は市役所（土木職）や建設会社に就職しています。主な就職先として、宮崎市役所1名、佐賀市役所1名、三井住友建設株式会社1名、大林道路株式会社3名、ライト工業株式会社1名、九鉄工業株式会社1名、株式会社安部日鋼工業1名、西日本高速道路エンジニアリング九州株式会社1名、日本都市技術株式会社1名、明伸建設コンサルタント1名、株式会社東田中建設1名となっています。

キャリアと遊泳法

隈研吾建築都市設計事務所 原田 爽一朗 (2013年度卒)

レッドオーシャンやブルーオーシャンというのはマーケティング業界でよく聞く言葉です。競争の激しい市場をレッドオーシャン、その逆がブルーオーシャンです。建築設計業界がどちらなのかという議論は脇に置きますが世の中にはレッドやブルー以外にも多種多様な海が存在しています。大学はこのような海の多様性をお試し的に知ることができる港だと思います。元々手先も不器用で飽き性だった私は、図面と整合性のとれた模型をつくったり、図面を何度も修正するという建築設計業には不可避のタスクに劣等感を抱いていました。優秀な同級生達を横目に、彼らと同じ建築設計業の海で泳いでいけるのが不安でした。このまま就職することは、戦略無くレッドオーシャンの激しい競争の渦中に飛び込んでいくような先の知れない恐怖があったのです。そこで、ひとまず当時の私の実力でも飛び込めそうな、別の海を在学中に見てみることにしました。もともと語学に興味をもっていたので、学部の三年時にオーストラリアのシドニー大学(図1)で短期の語学留学を経験しました。当時のシドニー大学ではRhincerosとGrasshopperを使った設計スタジオが盛んで、自分と同じ世代の学生がコンピューターを使って様々な造形をデザインしている光景に刺激を受けました。(図2)自分がこれまで一義的にとらえていた建築設計業界の海が全く違って見えました。なぜならソフトの使い方次第では自分の苦手な模型や図面を効率よく作成できることを知ったからです。この経験がきっかけで大学院は他大学に進学し、語学やコンピューテーショナルデザイン、都市計画などの新しい海に飛び込むこととなります。このように世界に存在する様々な海に飛びこむことを繰り返しているうちに、自分に適した遊泳法を編み出すことができるようになり、次第に泳げる海が増えていきます。もちろんそれは決してきれいな遊泳法では

ないかもしれませんが、ある意味広い海では目立つのです。大学院を出てから、でたらめに遊んでいるところを運よく今の会社に拾ってもらえました。

現職では畳一畳分の小さなパヴィリオンから、海外の国家的プロジェクトまで数多くの設計業務に携わっています。これまで自分ががむしゃらに覚えた遊泳法も月日と共に自然になってきているかもしれません。社会人になって思うのは、自分が学生時代に楽しみながら習得した泳ぎ方=スキルは実務でも生きてきますが、反対に、社会で溺れないようにと誰かから受動的に持たされた浮き輪=知識を実務で活かす場面は本当に少ないことに日々驚かされます。

在学生の皆様には是非、浮き輪的知識を蓄えるのではなく、様々な海に飛び込み、自分の遊泳法を見つける挑戦に満ちた大学生活を送って頂ければと思います。

多様な海に飛び込んでいく上で何より大切なのは泳ぐことを好きになることです。その為には泳ぎかたの基本を教えてくれるメンター(指導者)を見つけることも重要でしょう。なぜならメンターは泳ぐことそのものを好きにさせてくれるプロでもあるからです。私が今も建築を仕事にできているのは、学部生時代に素晴らしいメンターに出会い、建築を好きになることができたからです。建築設計の基礎とものづくりの喜びを教わり、その基盤があったから、多様性の海でも自分を見失わずに、泳ぐことを楽しんでいられるのだと思います。



図1：シドニー大学



図2：設計スタジオの模型

「建築」の味わいや奥深さ

九州産業大学 嘉野 広美 (2009年度卒)

今年、36歳になり、卒業して12年が経ちました。大学在学中や卒業時に思い描いていた自分とは違う道のを歩いてきました。2020年に着任し、母校の九州産業大学で「研究」や「教育」を担う職業から「建築」というものと向き合っています。

私は、大学入学時、「発展途上国に教会などの日々の暮らしを支えるような場所づくりのお手伝いができる技術を身につけたい」と思い九州産業大学の建築学科へ入学しました。

大学の講義では、建築の専門的な歴史や建築に関わる様々な営み（意匠、設備、構造、運営など）を知りました。また、建築の専門以外の講義では、法律や心理学、経営や人文学などの一般教養科目を学びました。さらに実習講義を通して設計のプロセスやデジタルツールなど技術の基礎を学ばせて頂きました。4年間という限られた時間では到底学びきれないほどの幅広い学問だと感じました。

卒業後は、数年の建築設計事務所での設計補助業務の経験を経て、25歳の時、母と共に保育所を設立、20名近くの従業員を雇用し、雇用促進の助成金数百万を頂く事業に5年ほど尽力しました。事業主として、時には保育補助者として、時には給食の先生として、福祉に関わる事業を運営していく中で様々な役回りを兼務し奔走しました。その後、30歳で建築の世界へ復帰。関東の技術者派遣を行う会社へ就職し、国内5大ゼネコンの一つである大手企業で約4年の間、ビル改修工事の施工管理者として働きました。勤務地が東京都千代田区ということもあり、皇居関連や超高層オフィスビル、商業施設の複合ビルなど特殊な工事に関わることも多くありました。2020年、35歳で縁あって母校の九州産業大学で教員・研究者という職業に従事させて頂いています。この12年間で様々な職業や役職を経験、体験してきましたが、「大学」という場所や在学中の期間に



▲在学時にも使用した↑8号館の大講義室

知ったこと、考えたこと、出会った方々から受けた影響はとても大きく、社会人として働く上での全ての基礎になっています。特に、生きる上で必要な三要素「衣食住」の一つである「建築」という分野だからこそ持つ特性かもしれませんが、全ての知識や経験が「建築を形作る」時のエネルギーとなり、物事の理解や、人とのコミュニケーションの助けとなっています。

具体的に言うなれば次のようなことです。「建築」とは1人で全てを担う事は非常に困難、場に適した材を探してくる事だけでも容易なことではありません。ましてやスピーディーに変化する現代、本当に多くの専門分野や業種の方々が協力しあって現実に形づくられることができるものです。

様々な業界や時代の中で求められる「建築」を現実のものとして作り上げていく一連の過程-既存を知る、歴史を知る、携わる人の想いを知る、作り方を知る、得た知識を自分の考えや視点も織り交ぜ組み上げていく、それらを言葉や画などを用いて伝えていく、出来上がったものを見守っていく。このようなプロセスや技術は、建築の分野に限らずあらゆる分野で求められています。ぜひ「建築」を目指す中でこの奥深さや味わいを楽しんで頂きたいです。

「本当に自分がしたいこと」とは

住友林業株式会社 児玉 照善 (2019年度卒)

2016年に九州産業大学の住居・インテリア設計学科に入学し、2020年に卒業した後、現在は住友林業株式会社の設計職として忙しくも愉しみながら業務に励んでいます。まだまだ未熟な私ですが、この度は自分の考えと共に、「本当に自分がしたいこと」という言葉をテーマに寄稿を送らせていただきます。

皆様は現在様々な環境に身をおいて、学業や部活動、アルバイトなど忙しくも充実した日々を過ごされているかと思われます。そのような楽しい時間は思い出となり、皆様の記憶に残り続けることでしょう。しかし、時が進むと皆様も社会に出るために就職活動をする方が多いと思います。その際に自己分析をすることで、自分がやりたいことについて考えることとなりますが、皆様は「本当に自分がしたいこと」について考えたことはありますか？優秀な皆様であればすぐに多くの答えが返ってきそうですが、その返答に関しましては一旦皆様の心に留めていただき、私のお話しをさせていただきます。

私は、恥ずかしながらも高校時代まではプロのサッカー選手として社会で活躍することを夢見た人間でした。人々を熱狂させるようなゴール。チームの危機を救う1本のセーブ。そんな、人々を歓喜させ、夢を見させてくれるような職業に私は魅了され、「本当に自分がしたいこと」はサッカー選手になることだと思っていました。しかし、私は身体的な理由からプロを断念した後、様々な経験や出会いを経て、「本当に自分がしたいこと」について理解し、現在私は住宅の設計士として同じ夢に向かって日々愉しく仕事をしております。このお話をする、多くの方から全然違う事ことをしていると言われるのですが、私は同じ道を進んでいると感じています。確か

に、自分が今行っている業務についてはプランの作成やお客様との打ち合わせ、見積もり等、一般的なハウスメーカーの設計業務を行っており、サッカーとはかけ離れた業務を行っております。しかしそれは、業務を外側から見たハード面からの視点であり、本質のソフト面は、自分が書いた1本の線でお客様の夢を叶え、喜んでいただくという、サッカー選手になりたいと感じた時と本質が一緒なのです。つまり、私の「本当に自分がしたいこと」は、サッカー選手になることではなく、自分の行動で人々に喜ばれ、他者の夢を叶えるという内面的なことです。

なぜこのようなお話をさせていただいたかという、建築は学生の時に学んだ知識以上に膨大な知識が必要で、さらに時間やコストなどの制約も重なります。なので、最初は上司や先輩方にご迷惑をおかけすることも多々あります。そこで悲観したり、自分が進む道を諦めないよう、自分の内面の部分を見つめておく必要があると感じています。なぜこの職業を選んだのかを内面的な理由で述べる方ができる方々は、この先社会に出てつらい経験も多くあるかもしれませんが、自分のやりたいことをやるためという目標のもと、乗り越えていけるかと思えます。もう1度ご質問させていただきます。「本当に自分がしたいこと」は見つけられていますか？皆様と一緒に社会で活躍できる時間を楽しみにしております。

最後に、この度の寄稿を送らせていただいた感謝の意を表すと共に、「本当に自分がしたいこと」を叶え続けるため、これからも日々住宅設計の業務や知識の向上に邁進していこうと思う。

好きを仕事にしてみても

有限会社リード・クリエイション 信岡 友美 (2019年度卒)

今回本誌に寄稿する機会を頂き、誠にありがとうございます。

私は住居インテリア設計学科を卒業後、店舗デザイン・設計施工の会社に入社して4年で3年目になります。普段はお客様とのお打合せから設計デザイン、見積りや現場管理等、店舗づくりに関わる仕事をトータルで行っています。

大学3年次に就職活動を始める前、やりたい仕事について深く考えた際に「沢山の人の思い出に残る空間を作りたい」という思いから、店舗デザインの仕事を志しました。仕事に役立ち、自分の知識として武器になるものが欲しいと思い、インテリアコーディネーターの資格を取得したのもこの頃です。在学時の物販店でのアルバイトや設計事務所でのオープンデスクの経験は、仕事をしている今でも活かしていると感じます。

「デザインするにはまず現場を知る必要がある」。これは、入社前から何度も上司に言われた言葉です。実際に入社してひと月経った頃には、1人で現場に行くことが多くなっていました。職人さんの仕事を見て、わからないことはすぐ調べ、時には質問しながら沢山のことを学びました。いいデザインをしようとしても、作り方や細かい納まりを知らなかったり、寸法感覚がなかったりすると図面を描くことさえままなりません。同じものを作るにしても、テナントによって条件は様々なので、日々勉強を続けています。

私の会社は、初めて独立開業する個人オーナー様が主なお客様です。どのような気持ちで開業しようと思ったかを伺うと、人生の大切なポイントに携わっているのだと実感し、身が引き締まります。責任が大きい分、好きなことを仕事にできているといっても、楽しいことばかりではありません。夜遅くまで図面に追われることや、休日関係なく仕事を

することも日常茶飯事です。しかしお引渡しが終わったあと、お客様に「想像以上のお店になりました」「おかげで幸せです」と直接言ってもらえることが多く、その度にこの仕事をしていてよかったですと感じます。初めてお引渡しに立ち会ったお客様から「思い出と一緒に写真を撮りましょう！」と仰っていただき、撮影した2ショットは宝物です。

これから5年先、10年先、例えば職場が変わったとしても店舗デザインの仕事は続けていると思います。そして、今まで私が携わってきたお店にプライベートで通いながら、オーナー様と世間話や昔話をして盛り上がるような関係になれていたら幸せです。

今これを読んでいる学生さんの中には、将来何になりたいかわからないという方がいると思います。大学生活の中で、何のためにやっているかわからないと感じることもあるかもしれませんが、私も学生時代は思うことがありました。ただ、直接興味のない分野でもレポートをまとめる力や文章力は必ず役に立ちます。そして真剣に取り組んでみると意外と面白いかもしれません。沢山の選択肢と可能性がある今の時間を大切にしてほしいと思います。



学生時代の経験を活かした社会人生活 行橋市役所 環境水道部上水道課上水道係 古野 宏明 (2019年度卒)

1. 業務内容

現在、私が配属されている上水道課においては、市内の上水道の管理および運用が全体の業務となっています。その中でも私の所属している上水道係では主に、水道工事（設計および現場管理等）・漏水対応・給水申請等々の申請書類の審査および管理・水道メータの管理・竣工時の検査・窓口等による問い合わせ対応等、事務仕事から現場仕事まで多岐にわたり業務を行っています。これらの業務はそれぞれに様々な知識が必要となりますが、共通して人に直接関わり納得のいく説明をすることが必要になる業務でもあります。上述した業務を例に挙げると、水道工事においては、施工業者との事前打合せ、施工中における状況に応じた打合せ等、住民に対しての工事に関する事前のお知らせが必要となります。特に断水等が発生する場合は周知と了承の徹底が必要となるため施工業者と共に綿密な計画を立て住民に納得して頂く説明をしなければなりません。このように、私が社会人となって行っている業務は書類や図面を相手にすることも多々ありますが、それ以上に人を相手に説明していくことが非常に多くまた、重要な仕事となっています。また、行政という立場である以上住民の意見を聞き住民に寄り添いつつも、対応可能なことと対応不可なことについてはしっかりと線引をして納得していただくように説明しなければならないことが非常に難しい仕事でもあります。

2. 学生時代の経験で活かしていること

私が学生時代に経験し、社会人となって活かされていることは「自分の意見を相手に伝える」こととなります。上述したように私が現在社会人となって行っている仕事は相手に説明し納得していただくことが重要です。そういった場において私が拙いなが

らも社会人としてやっていけているのは、学生時代の経験のおかげであると常々感じています。特に、大学院生のころはこの「自分の意見を相手に伝える」発表の場が非常に多く、授業、ゼミ、研究室での活動（環境教育等）、学会や修士論文の発表等様々な場所で発表の機会を得ることができました。また、これらの発表の場においては「自分の意見を相手に伝える」ために事前に様々な下調べや計画、打合せなどを行い自分の意見をまとめることが必要となるため、現在自分が行っている仕事に通ずるものが多くあり仕事をこなす上での糧にもなっています。特に、ゼミや学会等の場では、先生と意見を出し合い議論を行ったり、他の大学の先生や学生と意見交換を行ったりなど「自分の意見を相手に伝える」だけでなく「相手の意見を聞く」ことも多く、これらの経験が現在に非常に強く活かされていることを実感しています。また、学生時代に先生方や他大学の学生から聞いた話や自分が実際に調査等で経験したことが話しの種となり住民や業者の方々と打ち解け円滑なコミュニケーションを築くきっかけになることもあり、学生時代のあらゆる経験が現在に活かされているとも感じています。学生時代の中心ともいえる研究に関する専門知識についても現在は仕事の中心として活かす場はありませんが、話の種として大きく活かされていると感じています。いずれは市内の除草管理や街路樹など自分の専門知識を活かせる課に配属されていることもあると思われるので、その時は大いに専門知識を活かして仕事をしていきまた、行政としての立場も踏まえて専門知識の知見を広めていきたいと考えています。

最後に、内田先生をはじめ学生時代にお世話になった先生方に改めてお礼申し上げます。

女性技術者としての働き方事例

復建調査設計(株) 阿南 沙織 (2013年度卒)

1. はじめに

復建調査設計株式会社（以下、復建）の阿南沙織です。2015年入社、現在7年目です。九州産業大学には、2009年に入学し、2015年に博士前期課程を修了しました。プライベートでは、結婚し今年1歳になった娘がいます。復帰時に時短勤務を希望し、現在仕事と育児の両立に奮闘しています。今回は、将来を考える女子学生に、一つの働き方の事例として、現在の私の働き方を知って頂ければ幸いです。

2. 今までの経歴

設計に携わりたいと思い建設コンサルタント業界志望で、復建に入社しました。入社当初は本社勤務で、ソフト防災や空港の耐震設計、また社内初、女性技術者として空港の施工管理業務を行いました。本社時代は、色々な上司の下、基礎的なことから、空港等の難しい業務まで多くを経験しました。また、業務だけでなく、学会活動や研究会等社外活動にも参加し、社内外の人脈を広げることができました。

入社4年目に、結婚を機に福岡に転勤したのですが、他部署配属となり、戸惑うこともありましたが、日々自己学習を行いながら業務遂行に努めました。

入社6年目に、産休・育休を取得し、保育園事情から1年未満で復帰しました。復帰時にまた新たな部署への配属となり、1年目として日々勉強中です。復帰当初は、保育園から呼び出しがあり、年内で有休を4分の3使いました。また、残業時間や、泊りの出張に行けない等制約がある中、上司の方々に支えて頂き、現在も技術者として励むことができます。勤務時間の制約はありますが、娘を寝かしつけた後は資格勉強に励み自己研鑽を図っています。



写真1：液状化対策施工の確認状況

3. 仕事と育児の両立

時短勤務と言っても、多忙時期は残業し（娘のお世話は夫に託し）、土日出勤等もしています。大変ですが、技術者として成長したいので、夫婦で協力し仕事と育児の両立に励んでいます。娘との時間も限られますが、家族で過ごせる時は思いっきり楽しみ、仕事と育児の切り替えをしています。

4. 今後について

将来のキャリアアップや、子育ては予想外の事ばかり起こるので、不安は尽きませんが、臨機応変に対応できたらと思います（現に、育休中の私はこんなに働けると思ってなかったです）。皆さんが社会に出て、同じような悩みを持った時、私は少し先をいって経験できていると思います。そこで悩みを共有し、私の経験をお話しできたらと思います。

5. メッセージ

将来をイメージできないことが不安に繋がります。一つの事例ですが、女性技術者として仕事と育児を両立しているOGもいることを知ってもらえればと思います。家庭の事情等で人それぞれですが、女性は出産後働き方に変化が起こります。なので、その前に経験できることはたくさんチャレンジしておいて下さい。そしたら、働き方が変わっても焦らず、自分の経験の中で考え消化していけるとと思います。私も試行錯誤しながら日々を送っています。支えてくださっている周りの方々に感謝の気持ちを忘れず、今後も女性技術者として精進していきたいです。



写真2：社員旅行

建築学科4年 井上 小奈美

今回、本誌に寄稿する機会を頂いたことに感謝申し上げます。

私が本学の建築学科を志望したのは、建築設計への興味からです。九州産業大学に入学してからの4年間はまさに目まぐるしいスピードで月日が流れていきましたが、同級生、先輩の方々、先生方とのたくさんの出会いによって大きく成長できました。

学業面では、高校までの授業とは一味違う授業に戸惑いもありましたが、建築学科では設計、施工、材料など、建築に関する知識を広く、かつ深く学ぶことができました。授業を受けていく中で、設計デザインを詳しく学びたいと思い、興味のある授業を他学科履修として履修したこともありました。特に私が力を入れたのは、3年間を通して受講する設計実習の授業です。学年を追うごとに作品のクオリティを上げることができました。さらに、学科内で発表を行う機会もいただき、プレゼンのスキルも磨くことができました。

また、課外活動へのサポートも手厚く支援いただいたおかげで4年間の学生生活で多くのことに挑戦することができました。

課外活動では、1年時からABC建築道場に参加させていただきました。ABC建築道場とは、毎週学生がテーマを決めて建築模型を製作し講評し合う「しゅうまい」活動を中心に、国外へのワークショップへの参加、第一線で活躍する建築家を招請する講演会、被災地へのボランティア活動などを行う学生団体です。師範の矢作昌生教授のご指導のもと、建築と真剣に向き合う仲間たちと切磋琢磨しながら活動しています。建築家を招請する講演会では、建築家の考え方、設計の進め方など大学の授業では学べないような話を聞くことができ貴重な経験をさせていただきました。大学の設計実習でも生かすことができましたし、就職後の仕事においても今回の経験は大

いに生かすことができると考えています。

卒業後はハウスメーカーに就職させていただくことが決まりました。大学で授業を受ける中で、住宅の設計に強く興味を惹かれ、これからも住宅の設計を行いたいという思いから志望させていただきました。この4年間での学び、経験を忘れずに、成長できる社会人になりたいと考えています。

九州産業大学で過ごした4年間はあっという間に感じられましたが、自分と真剣に向き合い、何事にも挑戦することができた貴重な4年間でした。楽しいことだけでなく大変だったこと、辛いことも多く経験しましたが、これからの人生の糧になることを願い、今後も日々精進していきます。

この環境を与えていただいた建築都市工学部をはじめ熱心に指導して下さった先生方、また大学で知り合い一緒に頑張った友人たち、その他多くの方々のご尽力のもと有意義な大学生活を送れたことに感謝いたします。



住居・インテリア学科4年 北原 さやか

今回、本誌に寄稿する機会を頂いたこと、心より感謝申し上げます。

九州産業大学に入学してからの4年間という時間は長いようで本当にあっという間だったように感じます。この4年間でたくさんの人たちに出会い、たくさんの人たちに助けられました。そして、支えてもらいながらたくさんのお話を学ぶことができました。

1年次から所属している北欧デザイン研究会では、北欧のデザインはもちろん、他にも興味があった照明や展示の空間を学びました。実際に長野県に行って展示設営をしたのはとても印象に残っています。また、所属しているゼミでは多くのプロジェクトに参加しました。建築の分野に留まらず、ブランディングやグラフィックデザインなど新しいことに多く挑戦することができました。プロジェクトで様々な人と話し合っって何か1つのものを作り上げることを通して、一緒に何かを作ることの大変さ、何事にも挑戦するという意識を持つことができました。ここで経験したことはこれから社会に出た時も

きっと役に立つのだろうと感じています。

大学に入る前はこんなにも大変な大学生活とは思っていませんでした。大学に入ってから、今まで触れ合っってこなかった新しい分野の学びについていくことに必死で、週ごとに出される課題で精いっぱいでした。けれど、それでも乗り越えられたのはみんながいたからです。お互いに励ましあいながら乗り越えてきました。今思えば、CAD室の締め切り前の慌ただしさすら懐かしいです。私が頑張れたのは、自分より頑張っている人たちがいっぱいいたからだと思います。そんな人たちを見て、もっと頑張らなきゃいけないと思っていました。この環境にいられたことに感謝です。大学生活を通して私自身変わったことがあります。それは、挑戦しようとする気持ちです。自ら進んで挑戦することで、できることが増えて自信もつきました。失敗することも多くありましたが、その分、達成感はずごく感じられます。これからも自分らしく挑戦すること、を大事にしていきたいと思っています。

最後に、この環境の中で学ぶことができたことは恵まれていることを自覚し、一番近くで応援してくださった両親、一緒に頑張ってきた友人達、熱心に指導して下さった先生方、たくさんのおかけで有意義な大学生活を送れたことに感謝します。



都市デザイン工学科4年 福田 憲剛

今回、本誌に寄稿する機会を頂き誠にありがとうございます。

私が都市デザイン工学科に入学した理由は、幼い頃に地元で始まった橋梁の建設を見ていくうちに橋梁設計に興味を持ったからです。都市デザイン工学科では4年間で土木の基礎となる構造力学、地盤工学、水理学などを学びました。さらに実務で役立つような実習を通して土木の知識をより広く深く学びました。特に印象に残っている実習は『コンクリートの強度コンテスト』という自分達で自由により強いコンクリートを競い合う課題です。私は水を多く入れると、強いコンクリートができると思っていましたが、結果は逆で弱いコンクリートになってしまいました。失敗してしまいましたが今となってはいい思い出です。

2年次にはビオトップ管理技士や情報系の資格取得に向けて勉強を頑張りました。友達と協力して教えあったり、先生に質問したりすることで資格取得をすることができました。

3年次のインターンシップでは5日間を通して橋梁会社の現場を体験しました。実際に建設中の橋梁の上を歩いたりするなど学内では体験できない良い経験ができました。この経験からさらに橋梁会社に興味をより深め、4年次では念願のPC橋梁メーカーから内定を頂きました。

学業以外では趣味で料理作りをしています。親元を離れて一人暮らしを始めたことをきっかけに料理作りを始めました。親元を離れるまでは料理作りをしたことがなかったため、初めのうちは失敗ばかりでした。そのため料理本を読んでみたりインターネットでレシピを検索したりして練習していくうちに料理作りが楽しくなりました。私の得意料理はカレーです。自分好みに隠し味を加えてアレンジを加

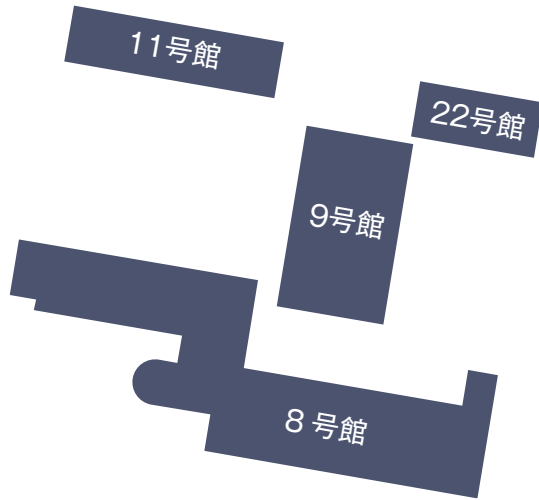
えたりしています。実家に帰省したときに家族へ振り舞い美味しいと言われた時は嬉しかったです。普段1人で料理を作るので他の人から美味しいと言われた時は新鮮さを感じました。1人暮らしを通して自炊する力が身についたと思っています。

大学生活の4年間は本当にあっという間に感じられましたが、その中でもたくさんの経験ができ非常に充実した毎日でした。この環境を与えていただいた建築都市工学部をはじめ熱心に指導していただいた先生方、また共に土木を学んだ友人達、その他多くの方々のご尽力のもと有意義な大学生活を送れたことに感謝致します。

最後に大学生活を有意義に送るためには自分から積極的に行動することが大切です。興味を持ったことや自分のやりたいことには全力で取り組んでください。それでは楽しい学校生活を。



[建築都市工学部 施設一覧]



▲8号館外観

1998年に建替え新築が完了した8階建ての建物です。建築都市工学部の専門科目の多くはここで講義が行われ、ゼミ室等も配置されています。近年、エントランス廻りやトイレが回収されて綺麗になりました。



▲8号館円形ホール

半円形になったガラス張りの空間が特徴的で、待ち合わせや休憩スペースとしてよく利用されます。



▲8号館設計製図室

建築学科および住居・インテリア学科にはそれぞれ設計製図室があり、その名の通り設計デザインや作図の講義が行われます。

写真は、2017年に新しく完成した住居・インテリア学科の設計製図室です。



▲8号館プレゼンテーションルーム

名作照明や椅子が展示されており、パッチワーク状になった床材は実物を体感できるデザインの教材としても使用されます。オープンキャンパスは、アルネ・ヤコブセンデザインの「エッグチェア」に座れるチャンスです。



▲8号館食堂「クラブハウス」

“九産大”にちなんで、毎日93人目に当たるとお代が無料になります。大学内には、クラブハウスを含めて全部で7つの学食やカフェがあります。



▲9号館

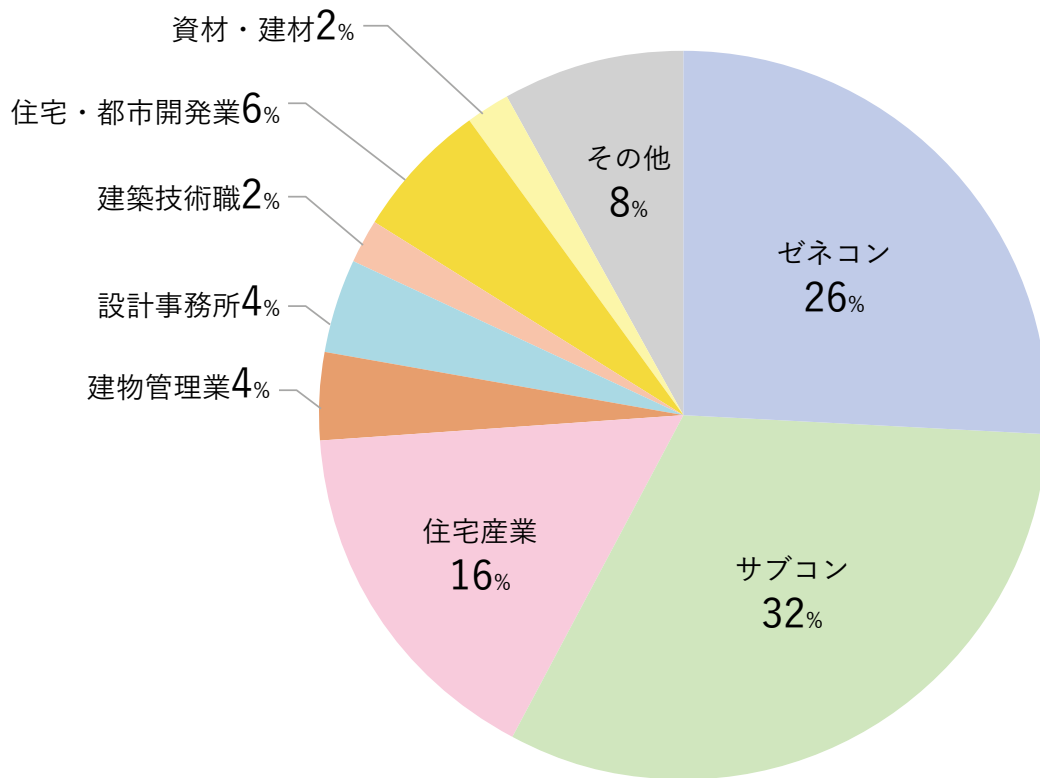
材料・環境実験などが可能な様々な実験設備が備えられており、実験系の講義や研究が行われます。また、木材加工のできる木工室などもあります。



▲22号館

実大立体構造物試験装置や400t万能試験機など大型の実験装置があり、様々な構造物の加力実験などを行うことができる施設です。

2021年度 建築学科 進路実績種別



主な就職先一覧

ゼネコン

飛島建設
若築建設
松井建設
東鉄工業
りんかい日産建設
佐伯建設
上村建設
川口建設
小川建設
岩崎建設
西鉄建設
UTコンストラクション
伸和建設

サブコン

九電工
三機工業
新日本空調
ダイダン
小野建
日本ファシリオ
大成設備

住宅産業

積水ハウス
積水ハウスリフォーム
住友林業ホームエンジニアリング
Lib Work
昭和建設

建物管理業

サン・ライフ
アンサー倶楽部

設計事務所

柴田建築設計事務所
アイ・エス・エス

建築技術職

トランスコスモス

住宅・都市開発

大東建託
西日本高速道路エンジニアリング九州

※ 2022年2月16日 時点の集計により作成
※一部抜粋、順不同 ※(株)(有)は全て省略



株式会社アイ・エス・エス

建築学科

WANG RUOFEI

王 若霏

私の就職活動

私は大学3年の後期にゼミの先生の勧めを受け、株式会社アイ・エス・エスの説明会やインターンシップに参加しました。実際にCADを使って橋梁のモデルを少し作らせていただきました。仕事の楽しさや会社のアットホームな雰囲気に魅力を感じました。主な業務範囲は橋梁で、建物や公園などの公共施設も取り込んでいて、幅広く携わっていることがわかり、ここに入ることを決めました。



株式会社九電工

建築学科

KAWANO RENTA

川野 蓮太

将来の抱負

私は、株式会社九電工の空調管部門として内定を頂きました。

九電工では、比較的若い時期から現場を任せてもらえます。そのため、責任感をもって仕事に取り組み、建築設備という形で社会に貢献できるよう努めたいと思います。



積水ハウス株式会社

建築学科

KOBAYASHI YUKA

小林 由佳

私の就職活動

新型コロナウイルスの影響で、インターンシップから最終面接まで全てオンラインで行われました。あまり例のないことで不安もありましたが、3年の夏から就職活動を始めたことが自分の望む進路実現につながったと思います。

何事にも現実と向き合い、行動を起こすことが大切だと改めて感じた就職活動でした。



りんかい日産建設株式会社

建築学科

YAMADA YUKI

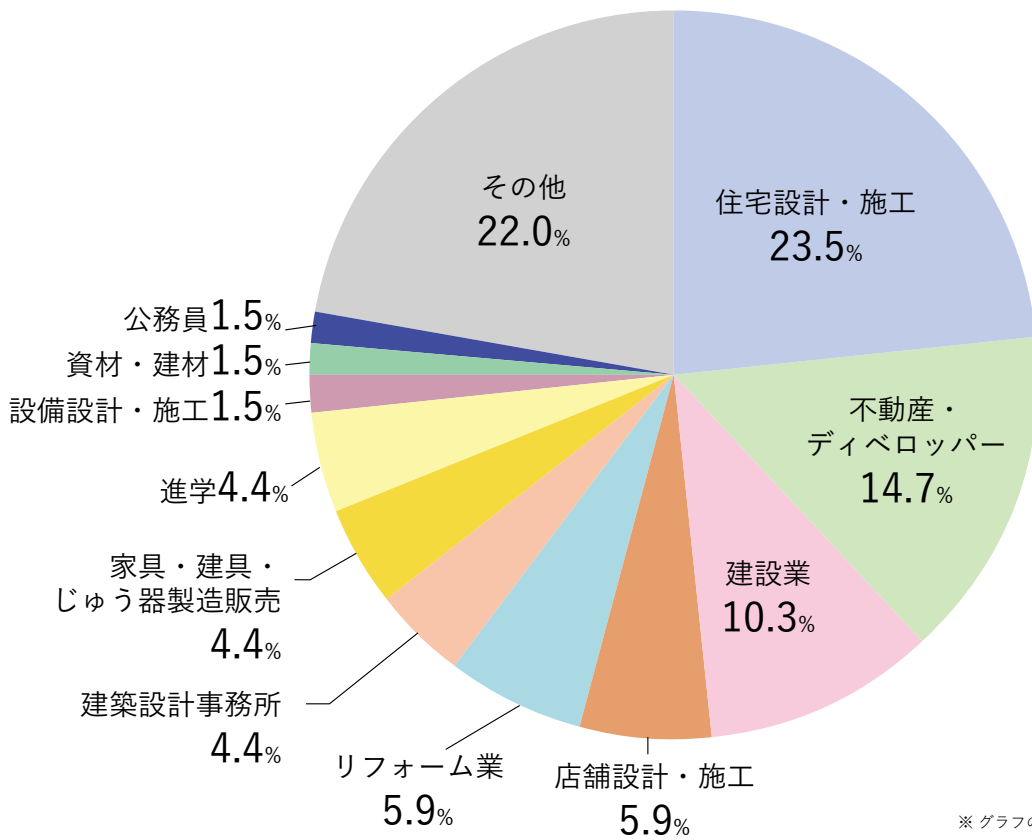
山田 裕起

就職活動

私は、りんかい日産建設株式会社に建築施工管理職として内定を頂きました。

私がこの企業を選んだ理由としては、入社してから一級建築士試験の研修を受けることができ、新入社員へのサポートもしっかりしていると感じたからです。入社後は、研修に真摯に取り組み、多くの現場で経験を積んでいきたいと思っています。

2021年度 住居・インテリア学科 進路実績種別



※ グラフの分類は当学科による教育上の分類です。

主な就職先一覧

住宅設計・施工

- 大和ハウス工業
- エバーフィールド
- シンケン
- 永代ハウス
- シアーズホーム
- 悠悠ホーム
- フクヤ建設
- 未来工房
- ミサワホーム九州

店舗設計・施工

- ラックランド
- ハダ工芸社
- 粹家創房

設計事務所

- 河村・佐藤デザイン
- S A A D建築設計事務所

建設業

- 黒澤組
- スエナガ
- 旭工務店

設備設計・施工

- ダイダン

不動産・ディベロッパー

- 星野リゾート・マネジメント
- 東建コーポレーション
- 三井不動産リアルティ

リフォーム業

- パナソニック リフォーム
- ミサワリフォーム

資材・建材

- リリカラ

家具・建具・じゅう器製造販売

- アダル
- 宮崎木材工業
- 稲葉製作所

進学

- 金沢美術工芸大学大学院
- 九州産業大学大学院

公務員

- 石垣市建築課職員

※ 2022年3月1日時点の集計により作成
 ※一部抜粋、順不同 ※(株)(有)は全て省略



株式会社ラックランド

住居・インテリア学科

ICHIKAWA MISAKI

市川 実咲

将来の抱負

私は株式会社ラックランドの施工管理職として内定を頂きました。ラックランドでは、「食」を基盤に置きながら現在ではホテルやアミューズメントなど、その時代の求められるものを建設しており、常に成長し続けている点に魅力を感じました。

入社後は、設計職と現場の方々と連携をとり、依頼者そして利用するお客様に満足して頂ける建物を作るよう現場経験を積んでいきたいと考えています。



株式会社エバーフィールド

住居・インテリア学科

ODA TAKUMI

小田 拓実

将来の抱負

私は、株式会社エバーフィールドに住宅設計職として内定を頂きました。エバーフィールドでは、ヒアリング・設計・監理までを一貫して行うことで、お客様と近い距離で設計が行えます。私はエバーフィールドのお客様との関わり方に魅力を感じました。

入社後は、お客様に寄り添いながら、お客様の暮らしを豊かにするような設計を行えるよう努力していきます。



SAAD/ 建築設計事務所

住居・インテリア学科

SAKO HARUKA

酒匂 悠花

Glad to meet

興味を持ち自分で選んだ、この学科、時に競い、時に励ましあった設計課題、建築を見て美味しいご飯を食べた旅行、最高の仲間に出会えた、4年間。

ココロ惹かれた、saad 建築設計事務所、デザインに対する視野を広げ、自分にしかできない世界観で、誰かのココロに響くものを創りたい。

Touches someone's heart...



株式会社河村佐藤デザイン

住居・インテリア学科

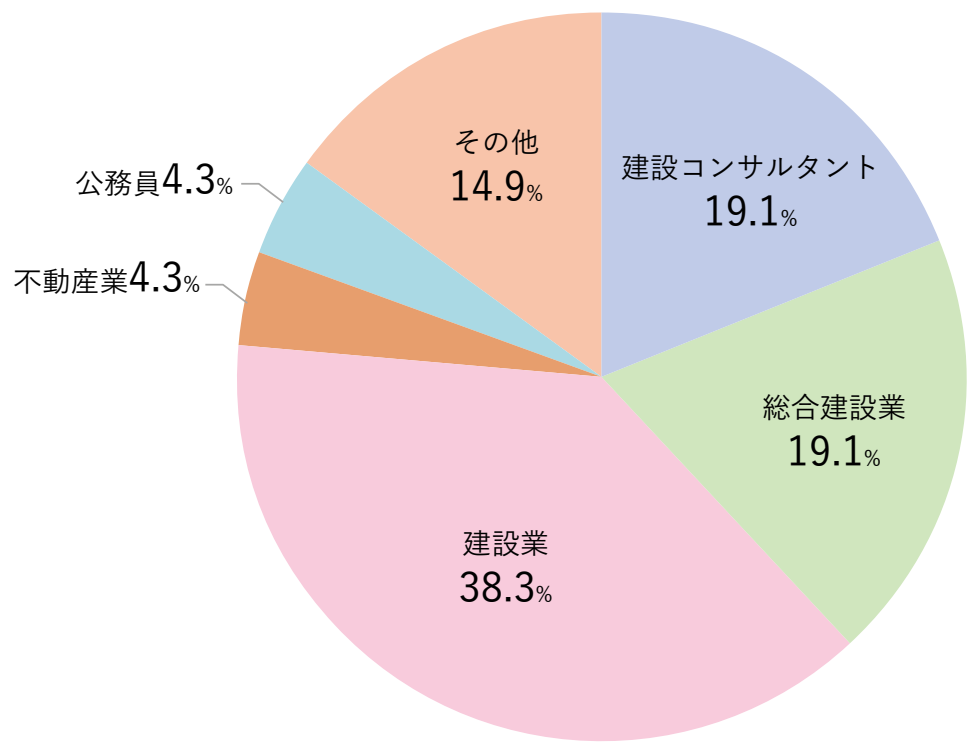
SATO RYOGA

佐藤 凌雅

就職活動について

私は就職活動を楽しみながら行いました。インターンシップは対面のものを選び旅行感覚で行い、選考に落ちてでも縁がなかったと次を見るようにしました。大切なのは落ち込むことではなく、とにかく行動することだと就職活動を通して気づきました。積極的に行動することで何かが生まれると思います。

2021年度 都市デザイン工学科 進路実績種別



主な就職先一覧

建設コンサルタント業	建設業	公務員
エイト日本技術開発	大林道路	佐賀市役所
第一復建	オリエンタル白石	
ティーネットジャパン	川田建設	その他
東光コンサルタンツ	川田工業	スピナ
西日本高速道路エンジニアリング九州	極東興和	大和リース
	広成建設	トランスコスモス
	ピーエス三菱	
	ライト工業	
総合建設業	不動産業	
あおみ建設	別大興産	
九鉄工業	ミクニ	
銭高組		
宮本組		
みらい建設工業		

※ 2022年2月14日 時点の集計により作成
 ※一部抜粋、順不同 ※(株)(有)は全て省略



第一復建株式会社

 都市デザイン工学科
 AKITAKE SHIGETAKA
秋武 重飛

私の就職活動

私は第一復建株式会社から内定を頂きました。自己分析をした中で地元福岡の地域社会を支えたいという思いから地場の総合コンサルタント会社に絞って就職活動を行いました。就活はきつく大変というイメージでしたが、大学生活の中で様々な経験を積んで臨んだため第一希望の企業から内定を頂きました。



株式会社ピーエス三菱

 都市デザイン工学科
 ISHIMARU KAZUYA
石丸 和哉

私の就職活動

私は7月から就職活動を始め、かなり遅いスタートではありましたが、株式会社ピーエス三菱から内定をいただきました。今年はオンラインでの面接となりましたが、特に問題なく対応することができました。就職活動を通してコミュニケーション能力はもちろんのこと親や先生などに相談をすることも大切だと感じました。

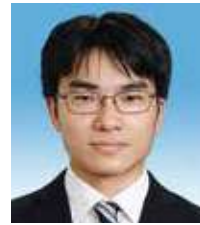


株式会社銭高組

 都市デザイン工学科
 SONODA SUGURU
園田 優

就職活動を終えて

私は、株式会社銭高組から内定を頂きました。私が銭高組を受けたのは、研究室に会社説明をしに来て頂いたのがきっかけでした。私は、橋梁分野の仕事をしたいと思っていたので、会社説明で橋梁分野に力を入れていると聞いてとても魅力を感じたので就職することに決めました。採用試験では、筆記試験やオンライン面接、対面面接などがありました。入社後も向上心を持って頑張りたいと思います。



西日本高速道路エンジニアリング九州株式会社

 都市デザイン工学科
 FUKUSHIMA KOUICHI
福島 広大

就職活動を終えて

私は、西日本高速道路エンジニアリング九州株式会社から内定を頂きました。幼い頃から高速道路が好きで、それに携わる仕事に就きたいと思っていました。夏のインターンシップに参加した際に、地元九州に貢献していることや社内の雰囲気の魅力を感じました。早めに企業研究や筆記試験対策を始めて面接に集中できたことが内定に繋がったと思います。

主な受験資格と大学による取得サポート

資格名	資格種別	キャリアサポート 奨励金ランク*1	学内講座 *2
宅地建物取引士	国家	A	○
二級建築士	国家	S	○
2級建築施工管理技士学科試験	国家	B	
2級造園施工管理技士学科試験	国家	B	
2級土木施工管理技士学科試験	国家	B	
福祉住環境コーディネーター 1級	公的	B	
福祉住環境コーディネーター 2級	公的	C	
色彩検定 1級	公的	B	
色彩検定 2級	公的	-	○
インテリアコーディネーター	民間	B	○
インテリアプランナー	民間	A	
カラーコーディネーター 1級	公的	B	
カラーコーディネーター 2級	公的	C	
環境再生医 初級	民間	C	
土木技術検定試験	民間	B	
ビオトープ計画・施工管理士 2級	民間	B	
CAD 利用技術者試験 1級	公的	B	○
3次元 CAD 利用技術者試験 1級	公的	B	
Illustrator クリエイター能力認定試験 エキスパート	民間	B	○
Photoshop クリエイター能力認定試験 エキスパート	民間	B	○
MOS Word 2016 エキスパート	民間	B	○
MOS Excel 2016 エキスパート	民間	B	○

*1 キャリアサポート奨励金制度

この制度は、在学期間中に本学が奨励する各種資格（国家・公的・民間）を取得した学生に奨励金を給付することで学習意欲の高揚を図り、資格取得を奨励することを目的に設けられました。対象の資格ごとに定められたランクによって、合格すると S：5万円、A：3万円、B：1万円、C：8千円の奨励金が給付されます。

*2 学内講座の開講

九州産業大学では、さまざまな資格取得のための講座を開講しています。放課後に学内で開催されるため、時間を効率的に使って資格学習をする事ができます。



二級建築士

建築学科

OYAMA HARUKI

大山 晴輝

資格取得

私は、二級建築士の資格を取得することができました。受けた理由は、学生の時間のある内に取得したいと考えたからです。二級建築士は、学科と製図の二部構成なので学科を合格しても気が抜けない状況でした。今後は、二級建築士の勉強で得た知識を生かし頑張りたいと思います。



宅地建物取引士

建築学科

FUJII MOTOKI

藤井 基貴

資格取得まで

○資格取得の経緯

不動産業界に就職が決まっていたので、今取っておいて損はないと思い、資格勉強を始めました。

○勉強について

勉強期間3カ月間で遊びと勉強のメリハリをつけて、教科書と応用問題、過去問の3つの参考書を購入し独学しました。



2級土木施工管理技士学科試験

都市デザイン工学科

HIROTANI YOSHIHIDE

廣谷 亮秀

2級土木学会施工管理技士学科試験

私は就職活動や就職後周りより1歩でも前が出る為にこの資格の学科試験を受けました。試験の出題傾向を掴み試験問題を予測し勉強に取り組むことによって合格することが出来ました。

就職先が建設業なため得た知識を活かし仕事に努め、今後も実技試験や1級土木施工管理技士などにも挑戦していきたいと思っています。



二級建築士

大学院工学研究科
(住居・インテリア学科卒)

HAYA SEINA

羽矢 晟菜

二級建築士

私は将来建築士として社会に貢献していく為に、大学院生の中に二級建築士を取得しました。自身の研究や授業などと両立していけるように、スケジュールを計画的に組みながら勉強を進めていきました。

現在、一級建築士合格の為に勉強を行なっているので、研究等と両立していけるようにより一層気を引き締めていこうと思います。

博士前期課程研究課題および指導教員

博士前期課程 建築デザイン分野 20GTI03 末永慎之介

研究科目：滲みの空間～中間領域の多重構造による高密度都市の再考～

指導教員：矢作昌生

(要旨)

現在存在している中間領域の多くは、日本の縁側や庇、雨端のように本来環境制御の目的によって作られていた。しかし、これらの中間領域は技術の進歩によってそれらの要因を部材の性能のみで解決できるようになったことにより、中間領域内での人々の行動や営みなどが限定され、空間内の豊かさがなくなりつつある。そこで、本研究では高密度化された都市に中間領域を挿入し、空間の豊かさを取り戻すため、事例調査と敷地調査を行った。その結果、事例調査からは建築操作によって中間領域内での行動が変化することが分かった。敷地調査は福岡県福岡市中央区大名を調査したが、結果として、使われている中間領域の半数以上が後付けされていることから、現代都市に中間領域が不足していることがわかった。

本計画案では敷地調査を行った大名地区に、事例調査から得られた中間領域を多重的に用いて、現代の高密度都市に中間領域内での空間の豊かさを取り戻す。



<優れた卒業研究への表彰>

No.	氏名	学科名	受賞業績名	備考
1	岩崎 海	建築学科	卒業研究「小さな世界の小さな連鎖」	
2	柴田 智帆	住居・インテリア学科	卒業研究「個が集まり混ざりあいながら共存する全体性をパブリックとする在り方～ランドスケープと建築の間で移ろう私の living & reading space～」	
3	東野 修平	都市デザイン工学科	卒業研究「新設雨庭の水収支と植栽の実測評価」	

<本学部が掲げるカリキュラム・ポリシーに関連した自主的、積極的な活動への表彰>

<本学部が掲げるディプロマ・ポリシーに関連した能力の獲得に向けた自主的、積極的な活動への表彰>

<他学部や学外と連携した活動を通じて、本学部へのプレゼンス向上や発展に寄与した活動への表彰>

No.	氏名	学科名	受賞業績名	備考
1	牛島 誠人 熊本 亮斗	建築学科	実用的な家具「のびす」の提案	

□建築都市工学部長賞について

学生の自主的な諸活動を表彰することで、学生の学習意欲や学力、就職力、技術者としての資質の向上に寄与し、九州産業大学や建築都市工学部(以降、本学部と称する)の発展に寄与することを目的として、建築都市工学部に所属する学生のうち、以下の項目において顕著な成果を上げた個人または団体を表彰するものです。

- 1) 本学部が掲げるカリキュラム・ポリシーに関連した自主的、積極的な活動
- 2) 本学部が掲げるディプロマ・ポリシーに関連した能力の獲得に向けた自主的、積極的な活動
- 3) 他学部や学外と連携した活動を通じて、本学部のプレゼンス向上や発展に寄与した活動
- 4) 卒業研究

(2022年2月9日決定分)

■ 2021 年度建築学科 卒業研究優秀作品

● 卒業研究の総評（矢作昌生教授）

建築学科の卒業研究は、設計または論文の何れか一方を選択する必修科目で、大学で学んだ建築学の集大成でもある。今年度は設計選択者が21%（12/56人）で、前年度の23%（15/64人）と若干減少した。論文は、構造・材料系が16テーマ、環境系が17テーマ、計画系が11テーマの合計44テーマであった。総合的に見て、全体の平均レベルは昨年度と同様で、設計よりも論文の方が、平均点が高い傾向であった。それは受賞にも現れており、銀賞や銅賞で複数の受賞論文が選ばれた。卒業設計で金賞を受賞した「小さな意識の小さな連鎖」は非常に完成度が高く熱量がこもった作品で、卒業研究全体の中で最高点を獲得し、建築都市工学部長賞へ推薦することとなった。

● 設計作品の講評

金賞 「小さな世界の小さな連鎖」 岩崎海君

街歩きを通して、風景は建築だけでなく、洗濯物や道路にはみ出した植木など、人々の意識が形となって作られていると考察し、それらの連鎖の中で建築を設計することに挑戦した意欲的な作品（矢作昌生教授）。

銀賞 「しみ-生成と腐蝕の重なり-」 荒川みなみ君

従来の墓や納骨堂にはない、故人と遺族との関係を再考し、樹木葬と建築空間の提案によって、故人と遺族が思いを通して繋がる場所として設計した非常に示唆的な作品である（矢作昌生教授）。

銅賞 「集合住宅における中間領域の多様性」 小林由佳君

昔は当たり前のように存在した「軒下」や「縁」のような中間領域は近代以降、失われてしまった。集合住宅に中間領域を取り戻し、住民間の良好な関係を作ることを目指した作品（矢作昌生教授）。

佳作 「学びの場の再生」 乗松沙英君

廃校後も地域の拠点であり続けることを目指した提案である。廃校活用における都市農村交流施設の機能や役割について、地域住民とのかかわり方を主軸に丁寧な提案がなされている（大庭知子准教授）。

■ 構造・材料系論文の講評

「アラミド繊維ロッドで曲げ補強した RC 柱の曲げせん断性状に関する考察」 松本隆志君

実験結果の分析が未着手となっていたデータを引き継ぎ、詳細に分析し考察した。試験体を丹念に観察したりデータに真摯に向き合ったりして成果に結びついた点は高く評価できる。（花井伸明教授）

銀賞 「フライアッシュを使用したコンクリートの炭酸化機構の検討」 大西雄也君

コンクリートにセメントの代わりに一部フライアッシュを置換した場合の炭酸化機構について、炭酸化前後の表層部の緻密性を測定することにより検討した研究であり、新たな知見を得ることができている。（白川敏夫教授）

銀賞 「柱 RC 梁 S 造柱梁接合部に及ぼす柱梁せい比の影響に関する解析的研究」 小川元気君

コンクリートと鉄骨間の開き・摩擦を界面要素によって精密にモデル化し解析した結果、柱梁せい比の異なる柱梁接合部のせん断抵抗機構を視覚的に明らかにすることができた。(内田和弘教授)

銅賞 「コンクリート充填角形鋼管短柱の弾塑性性状に関する解析的研究」 片山駿君

外ダイアフラムを有する短柱試験体を対象として、タイイング機能を用いた変位制御方法による繰り返し解析を行い、塑性域に至るまで実験結果を良好に追跡することに成功した。(内田和弘教授)

「RC 造有孔梁のせん断強度評価」 川野蓮太君

開孔を有する RC 梁の許容せん断力の算定方法について、多数の文献より収集した既往実験の結果や力学的観点に基づき、現行の算定法に対する改良案を提案した点が評価できる。(花井伸明教授)

●計画・環境系論文の講評**金賞 「世界遺産登録が住民意識評価構造に及ぼす影響に関する研究—宗像市の非緩衝地域居住者を対象にして—」 石川千広君、王若霏君、築脇麻椰君**

近年、世界遺産登録が様々な地域で推進されている。一方で、周辺住民への影響については検討が不十分な事例も多く見受けられる。そうしたなか、本研究では実データに基づき分析・検討され、その意義は高いといえる。(深川健太准教授)

金賞 「長崎の教会堂の立地に関する研究」 宮崎寛人君

長崎の教会建築の立地に関する研究は少ない。本研究は現存教会の立地形状を定性的に分類し、かつ等高線幅と建築幅の関係を定量的に分析し、特徴を明らかにした事が評価された。(冨田英夫准教授)

銀賞 「バウハウス卒業生ティポール・ヴァイナーによる社会主義都市「スターリンヴァーロシュ」の都市設計」 大海勸斗君

近年、バウハウス卒業生達が 1950 年代に世界各地で都市設計をしていた事が注目を集めている。本研究はハンガリーの社会主義化に注目し、都市設計者の著書を丹念に読み解いた。(冨田英夫准教授)

銀賞 「公立小学校の教室における空調・換気設備運用と温熱・空気環境調節に関する研究」 桑原大生君、小堀善一君、田中秀君

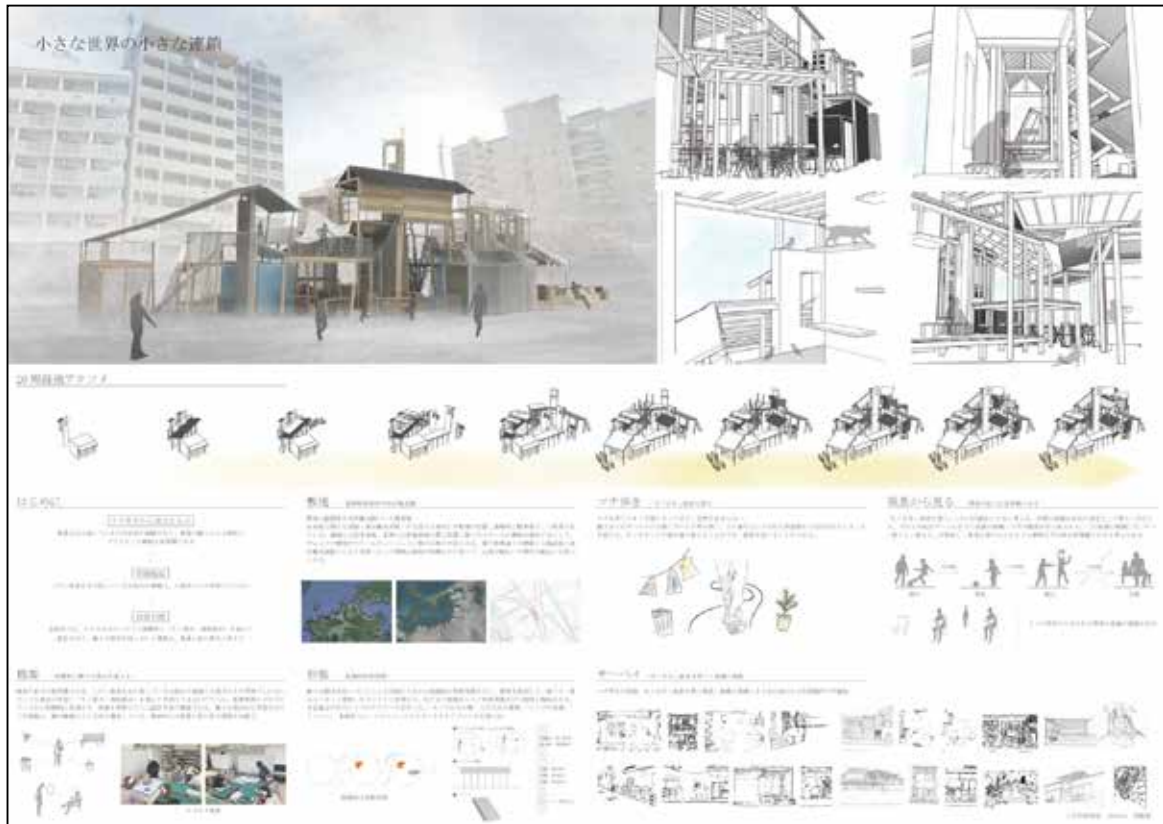
空調・換気設備が導入された福岡県下の小学校教室において長期測定を行い、コロナ禍での空調や換気の利用状況と CO2 濃度や温湿度・熱中症指数の関係を明らかにしたものです。(北山広樹教授)

銅賞 「住宅における床冷暖房の導入に関する実験的研究」 葛原直輝君、黒川元太君

人に優しい放射(床冷暖房)空調の可能性を検討するため、多くの既往文献から快適な室内条件を整理し、試験室での再現実験によって検証を行い、その有効性を示したものです。(北山広樹教授)

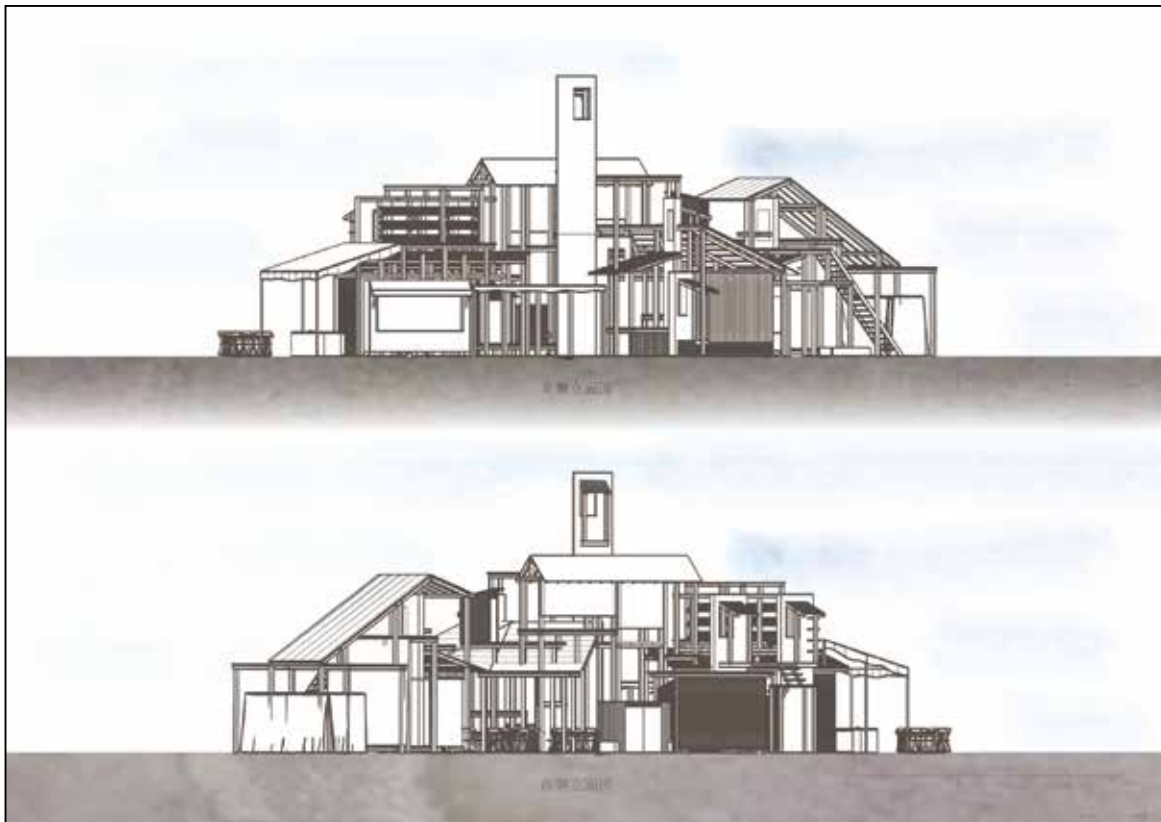
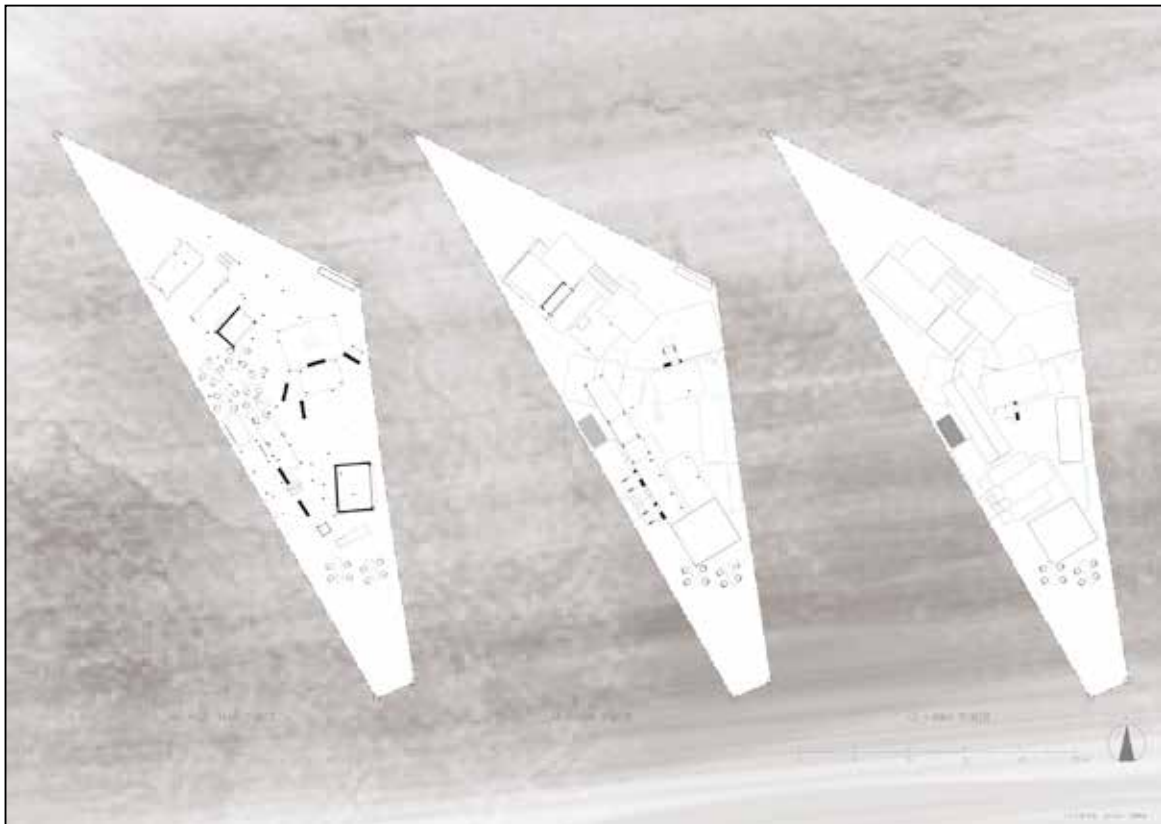
「小さな世界の小さな連鎖」

18UA012 岩崎 海



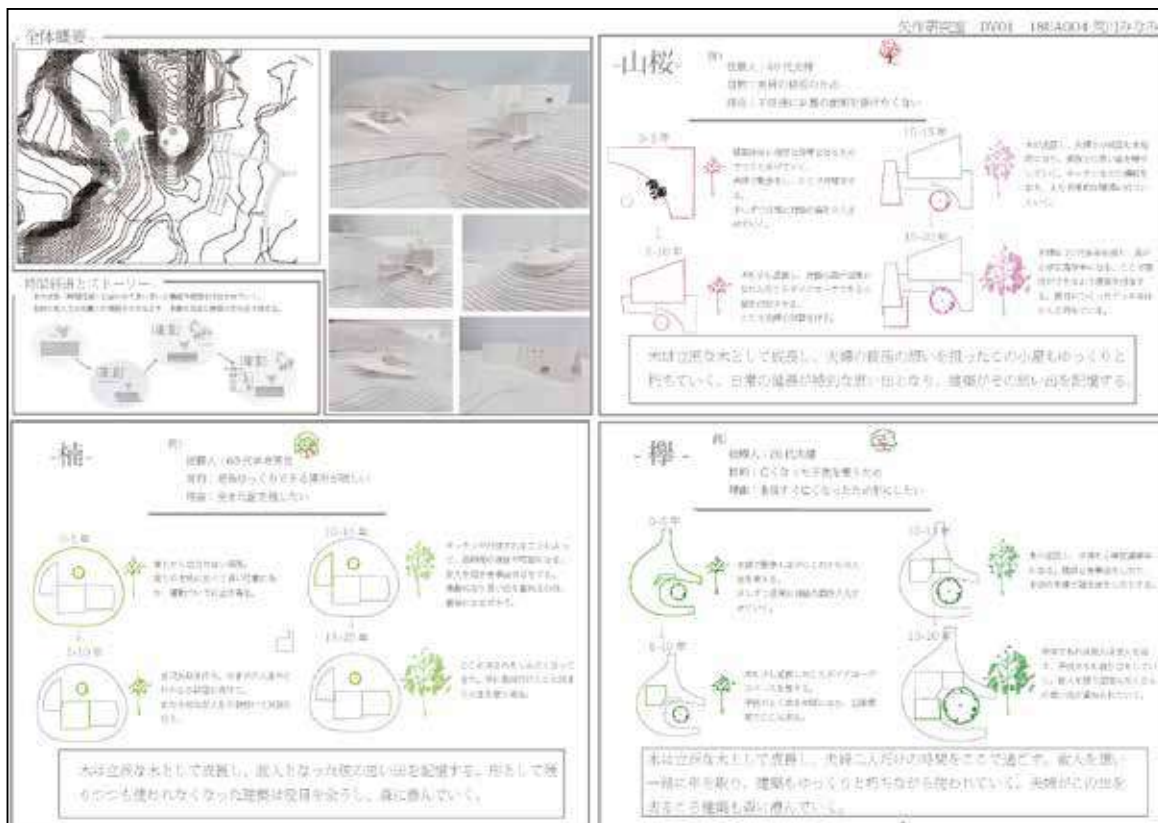
金賞作品

月間「近代建築」別冊「卒業制作」掲載



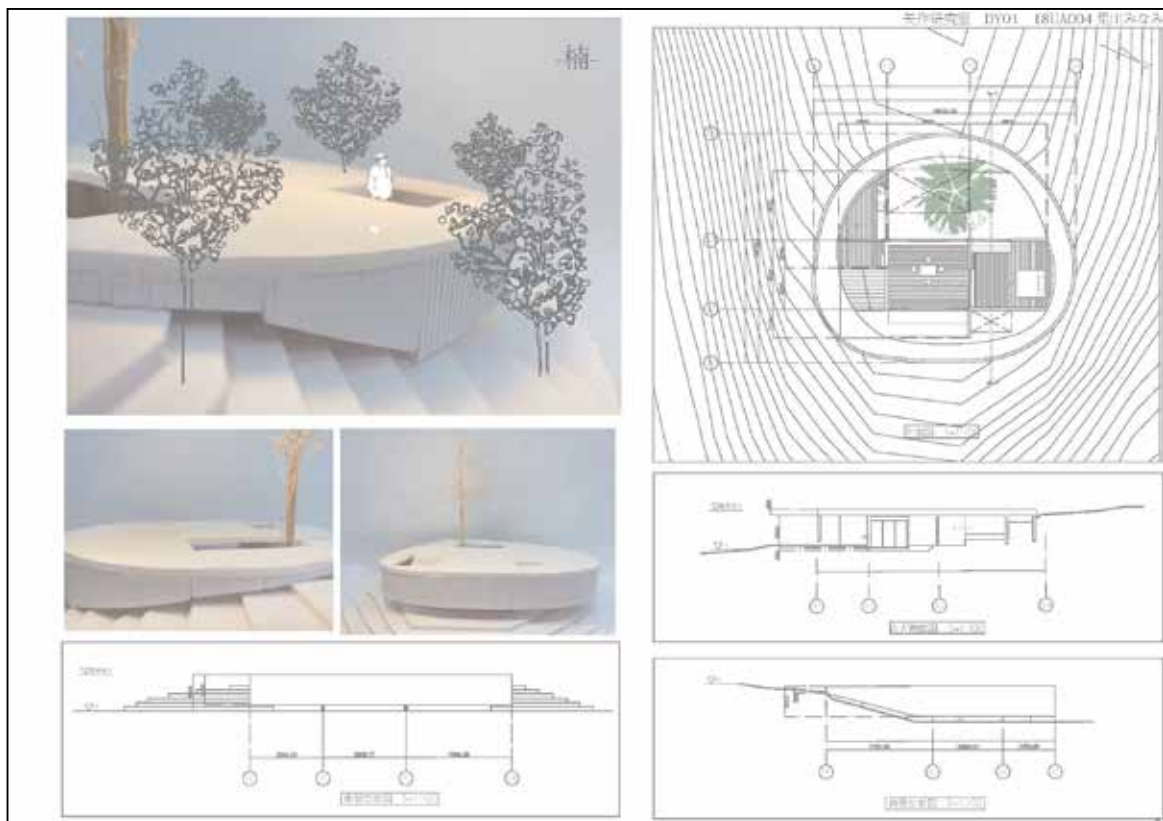
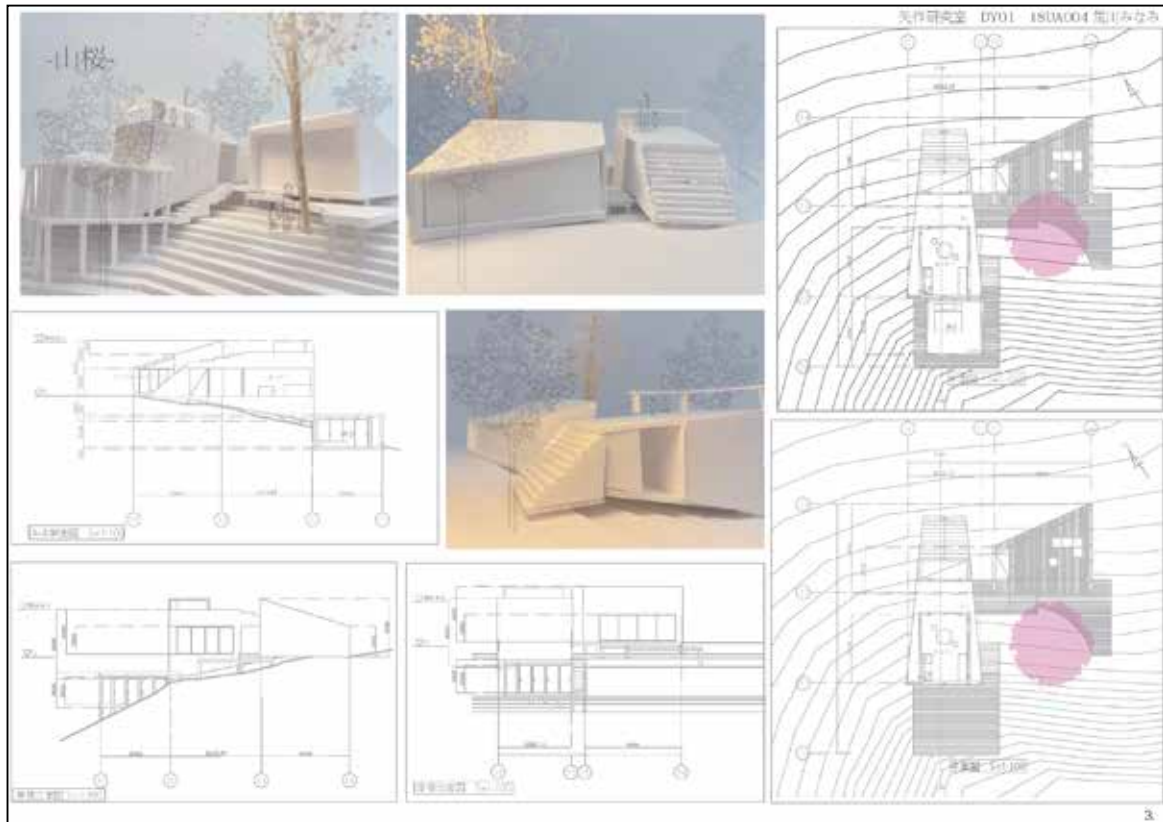
「滲み—生成と腐蝕の重なり—」

18UA004 荒川みなみ



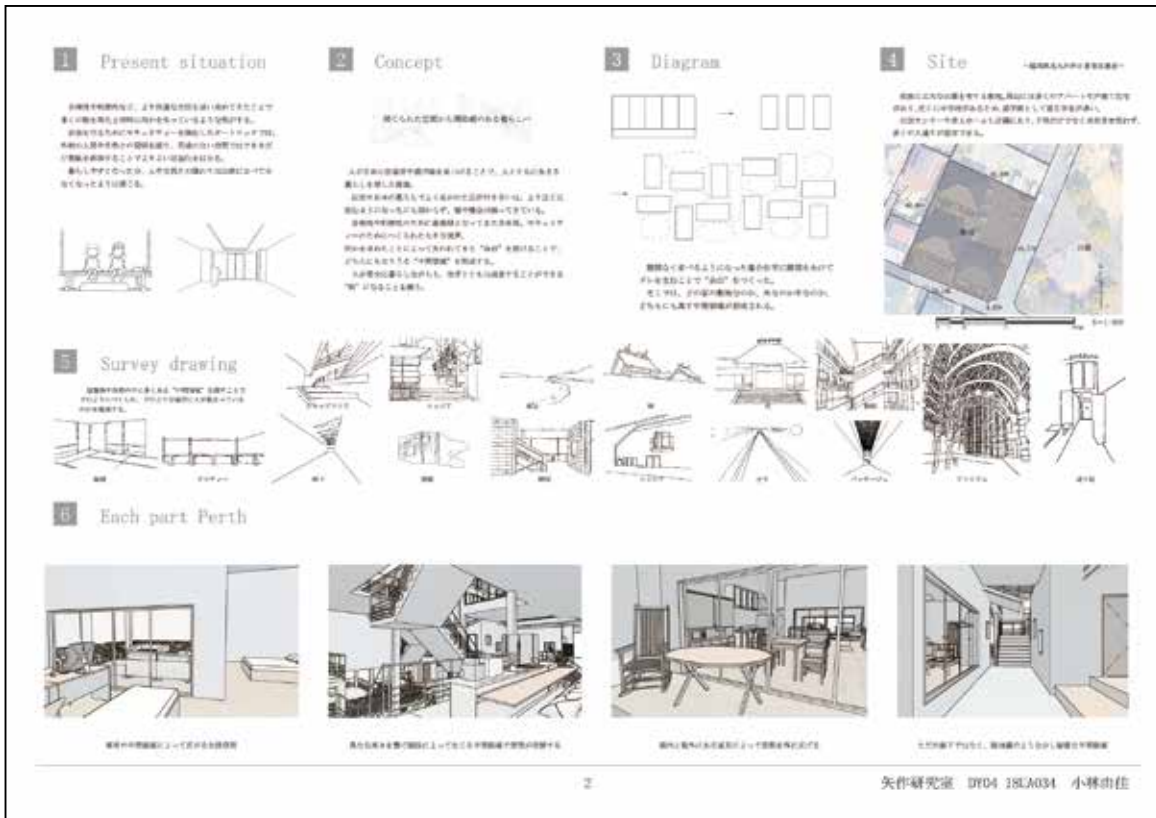
銀賞作品

日本建築学会卒業設計優秀作品展



「集合住宅における中間領域の多様性」

18UA034 小村由佳

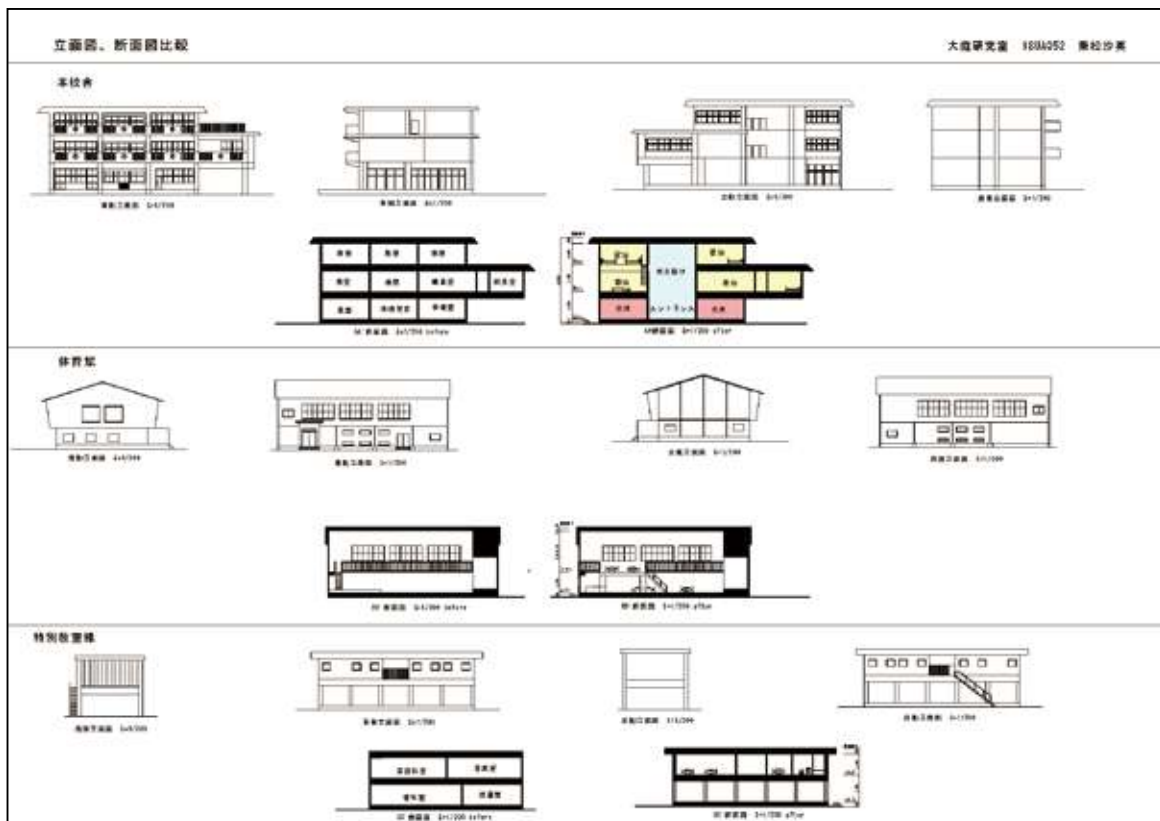


銅賞作品

福岡建築士会賞



佳作作品



■ 2021 年度住居・インテリア学科 卒業研究優秀研究

● 設計部門の講評

金賞 「個が集まり混ざりあいながら共存する全体性をパブリックとする在り方

～ランドスケープと建築の間で移ろう私の living & reading space ～」 18UH036 柴田智帆

「建築」は現在求められている多様性への対応ができてきているのか、意見の平均化や何でも受け入れる均質空間は、本当の「みんなの建築」なのかとの問題意識からスタートし、個性を生かしながら共存させる設計手法論を「心地よく本を読む空間」をテーマに展開した研究。現況への鋭い洞察力とそれを超えたいとする強い意識と熱量、論理的枠組みの構築力と論理から造形への展開力に優れた作品。大学院にて、本設計手法を他の対象・スケールで発展・展開したいとのことも期待したい。(小泉隆教授)

銀賞 「用途や活動を再現しない空間の表現」 18UH019 楮野美沙

情報技術が進む情報化社会の建築が主題である。この手の主題では、単なる技術の新奇性だけに着目し空間の提示まで辿り着かないか、逆に1960年代に多数提示されたアーキグラムの造形だけの提示に落ち着くかのいずれかに陥る場合が多いが、活動領域と空間の関係に着目することである程度の成果を示すことができた。さまざまな活動が現実空間からデジタル空間に置き換えられる現状に対して、活動を実現する内部空間をもつ構築物を建築と位置付けるという、商環境デザインゼミナールの建築の定義・在り方に真摯に向き合った結果である。(福山秀親教授)

銅賞 「開口部まわりの形成によって生まれる空間」 18UH013 大津佳乃香

建築空間の構成において重要な意味を持つ開口部を主題とし、開口断面を読み取ることにより、開口部まわりの領域形成手法につながるよう挑んでいる作品である。一連の分析を通して、開口部を単に一つの部位として扱うのではなく、空間領域を形成する建築言語として捉え、空間設計にフィードバックしようとする意欲的に試みている。開口部のあり方を問う本テーマから、開口部がいかに空間に影響を及ぼすかを改めて認識させられる。(松野尾仁美准教授)

銅賞 「自然の遊びを大切にした「離れ」を持つ学び学び舎」 18UH018 小田拓実

日本の幼少期教育への問題意識から始まり、ドイツや北欧などの自立性等を育む教育の必要性を感じ、多くの関連図書を読み込みながら、日本の良さも踏まえた教育プログラムの構築に大きな力を注いだ。そしてそのプログラムを園舎と離れとの距離・視線のやりとり、地形への対応等、きめ細かいデザインで良質な造形へと発展させた作品。これからの設計者は、ものを設計するだけでなく、プログラムや企画作りへの関わりが必要とされるが、この取り組み姿勢と優れた能力は社会に出てから大いに期待できる。(小泉隆教授)

奨励賞 「不全建築 - 建築における対角線の有益性の考察と設計提案 -」 18UH072 米倉捺生

建築の内部領域を形成している境界の設計操作が主題である。境界という建築要素に絞り活動領域と機能

領域という二つの領域と空間の関係をデ・ステイルなどの過去のデザイン思想をレファレンスしながら考察を丁寧に行なった。成果として示した形態にたどり着く関数を示すまでには至らずやや消化不良である。研究の継続を期待する。(福山秀親教授)

●論文部門の講評

奨励賞 「椅子の配置が利用者間の距離に与える影響に関する研究」 18UH025 釘本光

釘本さんは、本研究室が2019年度から取り組んでいる利用者の動線データの分析精度を向上させることにより、椅子の配置が共有空間での利用者間の距離を近づけたり遠ざけたりする可能性を明らかにしました。この研究は、よりよい空間の提供を目的として、今年度同様に、次の卒研生に引き継がれていきます。

釘本さんには、感謝の気持ちを忘れずに、健康に気をつけて、さらなるご活躍を期待しています。

(香川治美准教授)



写真1 優秀卒業設計作品の展示の様子（全景）



写真2 優秀卒業設計作品の展示の様子（金賞作品の模型）

「個が集まり混ざりあいながら共存する全体性をパブリックとする在り方 ～ランドスケープと建築の間で移ろう私の living & reading space～」

18UH036 柴田智帆



01 introduction

違うものを、
違ったまま、
どう共存させる？

「個性のあいだ」
を考える。
→ 特質が固定化
されていないため、
人が主体的に建築や環境の形
を創りだせる空間になる？



03 Assumption

「個性のあいだ」をつくと、
建築の「つくりかた」と「在り方」が変わる？

- 建築のつくりかた 個性が集まって共有する全体性として
建築を内包するのではないかと「部分の集まり＝全体」
- おどす状態 機能がまよっていても、他の何かの意味がまよっていても、
人のいるまよいを共存する建築になる

04 effect

「個性」=○○にする
→××のつくりかた/関係性を
再考することになる。



05 conclusion

個性 =
人の価値観 + 空間の質
「ある人にとって最も心地の良い空間の質」

↓
個性をこれに
することで
パブリックの「つくりかた」と、
パブリックにおける
「個人とみんなの空間の関係性（在り方）」
を再考する。



日本建築学会卒業設計優秀作品展／月間「近代建築」別冊「卒業設計」掲載

06 plan
街の延長としての、「本を読むことを中心とし、その他の活動も許容する建築」の計画。

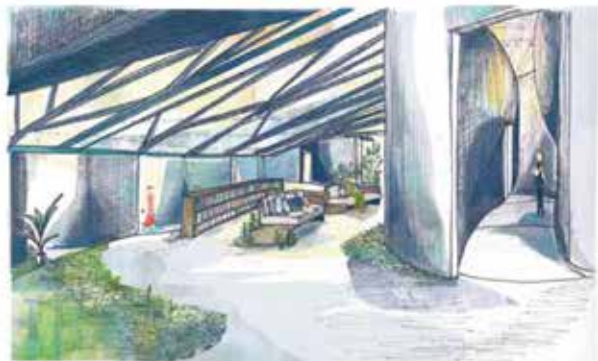
07 process
設計プロセス 街が壊れし置どけい関わりあう構造も、設計手法によって強し弱し計画を行う。



08 process 2
第IIフェーズ=分析・分解・再構築



09 outline
最終的にこの個性と手法によって見えてきた、パブリックの「つくりかた」と「在り方」



10 Feedback
この個性と手法によって見えてきた、フレキシビリティの種類



09 view 11
人も猫のように、心地よい空間を追い求めたい。



「用途や活動を再現しない空間の表現」

18UH019 楮野美沙



用途や活動を再現しない 建築空間の実現

→情報社会における建築・インテリアが
持つ活動領域の連続性の喪失について→

担当：インテリア学科 環境デザインゼミナール
18UH019 楮野 美沙

Vision -目的-

建築空間をデジタルセカイに接続された人間の身体を収めるためだけの空間として捉えることで、用途や活動を再現しない建築空間の実現を目指す。さらに、この空間の実現によって、情報社会においても認められる建築・インテリアの物質的存在意義・価値を見出す。

Meaning -意義-

建築・インテリアは人間の活動領域をリアルセカイ上で表現することでその存在意義と価値を維持続けてきた。しかし、背景で成ったように情報技術の発達によって人間の活動領域はデジタルセカイ上で再現が可能となった。さらに近年ではデジタルセカイ上での多量な活動領域も生まれるような活動領域が誕生しつつあり、人間はより多様な活動領域を求めてデジタルセカイに没頭していくようになった。このような状況下において、デジタルセカイ上で創出された活動領域をリアルセカイ上で「再現」したり、これまでに表現してきた活動領域を「再現」したりすることは建築・インテリアの存在価値や価値の維持を可能にするのである。

Background -背景-



従来のハードウェアソフトウェアの領域が縮小されている現状を鑑みると、用途や活動と建築空間の関係性を再度考え直し、情報社会において建築・インテリアがどのような価値を見出さず、社会に必要とされるかについて考えるべきではないだろうか。

Program -設計概要-

用途：(広場)
 敷地：福岡市博多区博多駅前3丁目1
 西日本シティ銀行本町跡地一部
 敷地面積：2000㎡
 構造：鉄骨造
 設備：空調、無線Wi-Fi、充電用コンセント



敷地



設計：磯崎新
 当時から約半世紀前
 に建築とデジタル
 の関係性を設計に
 取り込んできた建
 築家の作品

博多コネクティッド

官庁系の建群
 用途：複合ビル
 敷地面積：5200㎡ 鉄骨造は商業フロア
 延床面積：2階以上 商業階はオフィスフロア
 商業階はオフィスフロア
 地下1階に約90坪の地

敷地の新築 → 「空間＝活動領域」といった旧態の建築的考えに基づく発想
 本研究が示す空間は敷地の敷地に對して批判的である

用途

デジタルセカイに没頭するべくで遊戯(遊ぶスペース)、散歩(散歩)できるようにして立つなど、人間の身体より安全で多様な収まり所

→都市の外の広場的なもの

Concept - 設計手法 -

アンリアルセカイの実感らしさを体験し、人間の精神や感情をアンリアルセカイに投影させる場としての空間。そして、リアリセカイに落ちた人間の身体を収める空間の先行事例として宗教建築をあげる。宗教建築で用いられた、神のセカイとの関係性を建築空間に表現する手法をデジタルセカイとの関係性に置き換えて設計を行う。

軸となる2点の視点

アンリアルセカイに投影するセカイ
設備・空間・状況

宗教建築(神のセカイ) →

- 祭壇
- 礼拝(集中するためのスペース)
- 静けさ(気象さ・集中)
- 多くの人数が同じことを行う場


目標建築(デジタルセカイ)

- コメント・声・声
- 身体を安全な場所に留めておく
- 落ち着き・集中
- 明確な色との間取りを組み合わせることによって生まれる没入感

色の選択について

デジタルセカイ(アバックス上)で色を表現するために基本となる光の三原色である。

Red	赤
Green	緑
Blue	青



に加え、その中間色

Magenta	マゼンタ
Yellow	イエロー
Cyan	シアン

と白(透明)・黒の色によってスタンドガラスを構成した。


建築空間でのアンリアルセカイの再現手法

宗教建築(神のセカイ) →

- スタンドガラス・アバックスによる複雑な光と色の演出
- 精神的な開放性のある空間、静寂
- 聖書やコーランなどに記載された、没入型人物の具象化

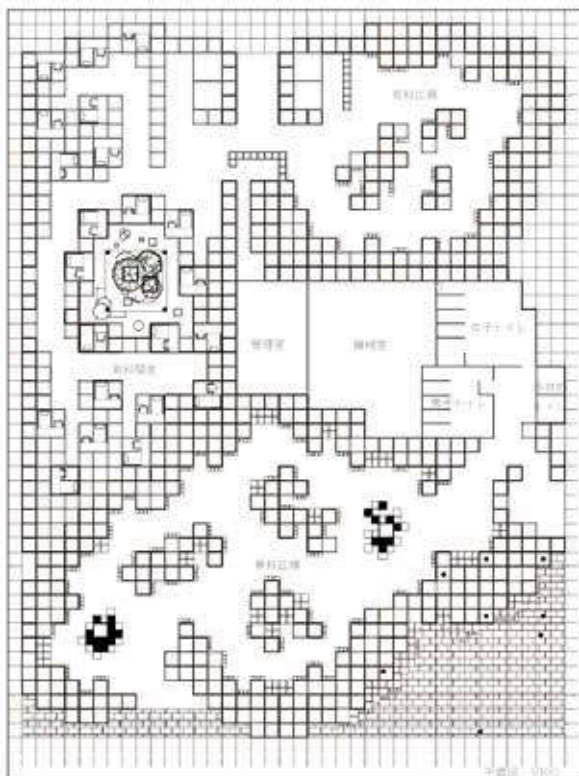
目標建築(デジタルセカイ)

- アバックスの柱で単位である、2700(24mm)を1辺の長さとする立方体格子による建築
- 平面的なユニットが格子を立体的に組み直し立体的な格子構造に作り出すことにより、局所的な単純な構成ながらも複雑な空間
- 直線的な格子をつけたままのあんぐり



デジタルセカイの特徴

- 心と心による単純な構成要素と風景の組み合わせ
- グリッドによる直線・空間構成
- 広大な空間感の中で人が入ることによって、格子の格子は格子の格子を構成



「開口部まわりの形成によって生まれる空間」

18UH013 大津佳乃香

見え方の変化する展望台
— 開口部まわりの形成によって生まれる空間 —

植物環境実室 (18UH013) 大津佳乃香
権現山

眺望ポイント

- 01 広大な景色を見る**
開口部が広く、遠くまで視線が伸びる。図解では視線が水平に伸びる様子を示している。
- 02 地中から景色を見る**
開口部が低く、視線が地面近くを通り、遠くまで伸びる。図解では視線が低い位置から伸びる様子を示している。
- 03 壮大な山々を見る**
開口部が傾斜しており、視線が山々を捉える。図解では視線が傾斜した開口部から山々を捉える様子を示している。

I. 導入

□ 社会背景

日本国は国土の約70%が山地であり、人口の約90%が平野部に集中している。このため、都市部では限られた平地を有効に活用し、高度な都市計画が必要となる。また、近年は都市部の人口増加に伴い、都市部の環境改善や緑地の確保が求められる。本設計は、都市部の限られた平地を有効に活用し、高度な都市計画を実現するための提案である。

□ 研究目的

本研究では、都市部の限られた平地を有効に活用し、高度な都市計画を実現するための提案である。具体的には、開口部まわりの形成によって生まれる空間の特性を明らかにし、都市部の環境改善や緑地の確保に貢献することを目的とする。

II. 敷地概要/配置図

□ 対象敷地：平尾台茶屋敷地一帯 (約1.5ha) 所在地：京都府京都市東山区

敷地概要: 敷地は、平尾台茶屋敷地一帯に位置し、周囲は山地に囲まれている。敷地内には、既存の建物や緑地が存在する。また、敷地は、公共交通機関や道路にアクセスしやすい立地に位置している。

III. 分類・分析方法とその流れ

step1 調査データの作成
現地調査による地形・建物・植生等のデータ収集。

step2 地域の背景分析
地域の歴史・文化・社会背景の調査。

step3 地域形成の手法分析
地域の形成過程や手法の分析。

step4 開口部の位置と形状
開口部の位置と形状の決定。

step5 設計図の作成
最終的な設計図の作成。

step6 結果の検証と評価
設計図の検証と評価。

IV. 設計趣旨・手法

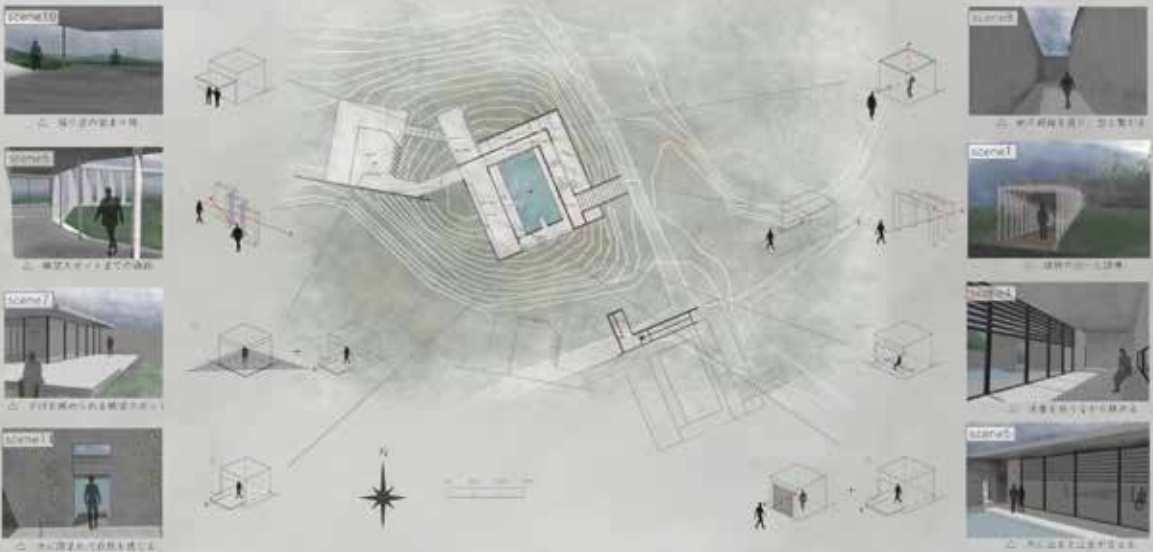
□ 設計趣旨

空間環境を適切に創出すること、ユーザが自然体で活動できる空間を創出すること、空間を有効活用することを実現し、そのための具体的な設計手法を提案することを目指す。そのためには、建築環境を「空間環境」として捉え、環境学的な視点から空間環境を捉え、空間環境の形成を促すこと、ユーザが自然体で活動できる空間を創出すること、空間を有効活用することを実現し、そのための具体的な設計手法を提案することを目指す。

□ 手法計画

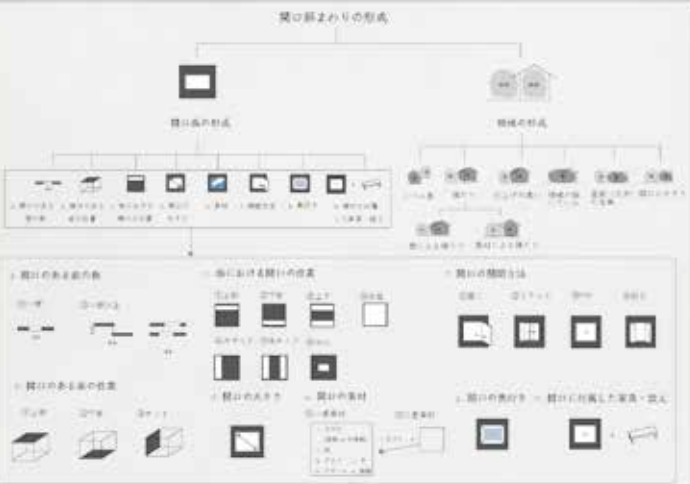


V. 平面図/設計に取り入れた各開口パターン

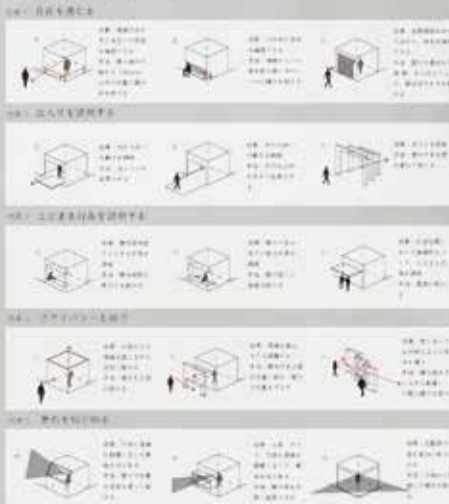


VI. 設計に用いた開口部まわりの形成に関する研究内容

□ 開口部の要素分解図



□ 各効果にて有効化開口パターン



□ 各事例の分析 (全24事例)



「自然の遊びを大切にした「離れ」を持つ学び学び舎」

18UH018 小田拓実

子ども達にとって自然の静寂は、安らぎを与えると同時に好奇心の発生源ともなる。現代では静寂が生み出されるような機会は、ほとんど無くなってしまっている。常に生活音などからなる騒音ストレスの中で暮らしている子ども達に、本研究では、自然の静寂を通して様々な思考、体験、知覚の機会を与えるような静的な空間を持つ「学び舎」の設計計画を行う。

自然の遊びを大切にした「離れ」を持つ学び舎

緑と暮らす こども達



園舎〈生活の場〉

野外活動ができるための準備

子ども達が、日一杯活動するには、衣服などの準備が重要になる。冬に子ども達を、寒さから守れるような温かい服装や、雨などの天候の時に活動できるようにする道具の準備が園舎では必要になる。また野外活動から帰ってきた、子ども達を園舎に入れる間に、手足などを清潔にするための流しや土間空間を設ける必要がある。

保育の形態

園舎内で保育を行う際に、日常生活の延長線といった感覚を大切に保育を行う。学び舎では、0〜2歳、3〜6歳と園舎を分けて保育を行う。0〜2歳は、月年齢の差が大きくなることから年齢ごとにクラスを分けて保育を行い、3〜6歳は縦割りの保育を行う。この園舎は、視覚的なつながりを持ち0〜2歳児は年上の子ども達を見て様々なことを学び高揚をする。3〜6歳の子ども達は、年下の子ども達と交流することで、人に対しての力加減や思いやりといった感情が芽生える機会となる。



自然〈遊びを生む場〉

自然は子ども達の好きの遊び場となる。子ども達は、自然環境に合わせて活動をし、体を動かすことで様々なことを学ぶ。

1950年代半ばは、ゲンマークで発祥した保育方法で、今では、北欧やドイツといった各国に広まっている。森の幼稚園は、園での活動のほとんどを野外で行い、子ども達を、森や川などの自然の中で保育をすることで、様々な体験・思考・知覚の機会を与えるといった保育方法である。



離れ〈静的な空間〉

小泉研究室 18UH018 小田拓実

保育における静的空間の重要性

自然環境の静的な空間は、子どもにとっても良い影響を与える。現代の日常生活では、自然という環境が無条件で与えられるモノではなく、探し求めるモノとなっている。自然の静寂には、子ども達を騒音ストレスから守ったり、騒音から離れることで、音に対する関心を高める。また無駄な情報が遮断されることで他の感覚器官も研ぎ澄まされる。

離れは子ども達に静寂を感じさせる場であり、本研究では野外活動を通して感じたことを、離れという静的な空間で言葉にし大人に伝える場としても利用する。騒音から解放された空間で、対話することは子ども達の言語習得にも重要な要素になる。

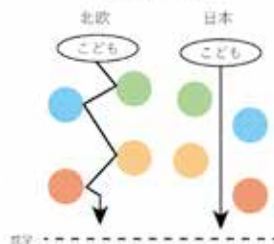


北欧・ドイツとの比較

日本の保育方針も近年、子ども達を管理するといった目的から変化している。北欧やドイツの自然を使った保育のように、子ども自らが、好奇心を持ち行動をし学ぶような工夫がされ、それは園舎の造りにも現れている。

しかし北欧やドイツなどの自然を使った保育とは大きく異なるのは、好奇心を生み出す要素が、大人がコントロールできるモノだということ。森や川など広い、管理のできる環境は好奇心を生む要素が少ない。好奇心の要素の少なさは、子ども達の思考、知覚、体験の機会を与えられないことにつながる。

教育方針の違い

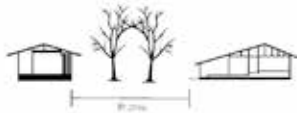


日本の保育は、算数までに習得すべき項目があり、それらの習得を目標に教育を行う。しかし北欧では早期教育を充実させるのではなく、0〜6歳といった人間の人格形成に重要な期間に自然環境のなかで感覚を通して、こども一人ひとりに、これから教育を受けて伸びていくための基礎をつくることを目的とする。



「園舎」と「離れ」の配置計画

離れ同士の間、園舎間にある自然環境は子ども達にとって遊歩のあそび場である。斜面や木々、影森などを活かした配置とし、それぞれは約20mの距離とし、子ども達をある程度コントロールできるようにしている。



離れは、子ども達が自然に身を置くときの安心できる目印となり、子ども達の安全が確保できる場であり、自然内でも大人の管理が行き届くような基地でもある。



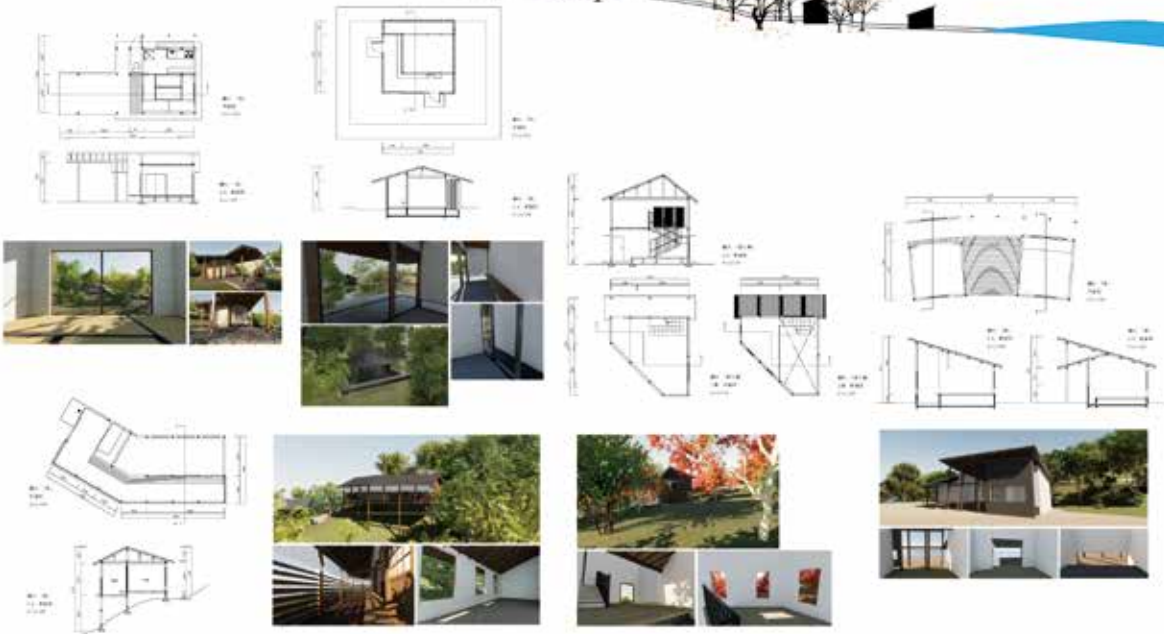
「園舎」、「離れ」、「自然」の関係性



3～6歳 園舎



0～2歳 園舎



「不全建築 - 建築における対角線の有益性の考察と設計提案 -」

設計部門 奨励賞

18UH072 米倉捺生

1 空間概念

もは、建築を人間の活動を規定するための場であると定義する。
建築を構成する境界という概念は人間の外的要因から守るものであり、境界の内外部環境を形成している。境界について考察することこそ建築のあり方を考えることだと感じる。
人間の活動を規定する建築を「境界」という概念に着目して考察、研究設計を行っていく。

2 研究背景

建築を構成する境界面といった要素は多様多様であるが、中にはあまり使われていない要素もあり、宮内やインテリアには使われていたが建築にまでは其のまゝななかったものが存在する。
例えばオランダの自由運動であるデ・ステイルはフェルム色の要素を出る限りの幾何学的な建築、家具、インテリアといった空間デザインにおいても理念を實踐しようとしていたが、デ・ステイルが欲った二原色、水平垂直という要素では単純、平面な形となり、表現の自由さ、多様性を奪う傾向にあった。そこで新しく導入された要素が対角線であったが、そこでつくられた作品はセント・ゴラスやデ・ステイルといった平面図的なデザインにとどまり、建築の立体空間にまで昇華されることはなかった。

3 研究目的

建築において対角線を用いて実務されている例はいくつかあるが、そのほとんどはファサードや壁、天井といった平面的、機械的なデザインである。現代においても対角線を用いた例は存在するが、それらは平面図からきた対角線であり、それに高さや厚さを加えたものである。
建築における対角線の取り方は平面的なものばかりではなく立体物だからその取り方があるはずである。
本研究設計では対角線を立体空間で扱う、新しい建築的境界を考察している。機械的に置いた領域に対して対角線の機能ではなく人間の活動に対して合理的に作用することを目的とする。
また、対角線を基準とした形態操作による空間モデルを提案する。

4 研究方法

現在の建築はリビング、ダイニングなどそれぞれにされた機能領域の集積で一つの建物が形成されている。また、作りやすさ、積いやすさという点から建築は水平垂直な要素(壁、スラブ、柱など)が多用された空間構成がなされている。
本研究設計ではこういった機能領域(空間そのもの)、水平垂直(空間を構成するもの)に対して、対角線という斜線を導入し、其対角線はももとの機能領域を不全にするもの、ある活動にとっては合理的な要素として使われる。
対角線を導入することで機能領域を活動領域へと変換していく。

5 対角線は領域を欠く

対角線を使うことは1つの空間に対して空間を二分したり、欠いたりする。直線的に対角線を使うことは1つの空間を半分に分けるか、もしくは繋ぐ。このようにもともと成り立っていた空間を分割縮小することでこれまでの機能が成り立たなくなることを本研究では機能不全という。
対角線の取り方は多様多様であり、取り方次第で空間に与える影響も変化する。直線的な対角線の出現は多しの機能不全の代わりに、シェークスピアと関係による身体性を付加する。

6 立体空間で対角線をとる

6.1で挙げた事例では平面から対角線をとる計画であった。それに対して本研究では対角線を立体空間内にて結び境界を構成していく。
立体空間にて対角線がそのまま現れること、直線的な面を与えることは機能空間を分割縮小し、既知の出現といった機能不全を招くことと考えられる。そこで対角線を基準として曲面を導く。曲面の出発は直線と同様に機能不全を促す。しかし同時に曲面による凹凸の出現や光の反射、シェークスピアの形成も現れ、空間に多様性を与えたと考えられる。

対角線を基準として曲面を導く

対角線は領域を欠く

対角線を基準として曲面を導く

対角線は領域を欠く

対角線を基準として曲面を導く

対角線は領域を欠く

7 異なる曲率

対角線をひく空間、空間に導入要素(壁、スラブなど)の厚さ、高さ、進行さによって出現する曲面をひくは異なってくる。
曲率の違いがそれぞれの空間、機能要素が形成する機能不全に対する機能不全の程度やその空間に与える活動を変化させていく。

8 対角線曲面を組み合わせる

対角線を基準に出た曲面は空間を形成する境界として現れる。
これらを組み合わせながら空間を構成していく。機能から活動へと領域を変換していく。
組み合わせる中で曲面が壁、天井、曲率によっては床として現れ、各空間も三次曲面によって仕切られるため多様多様な空間が広がる。また、水平垂直面をなくし曲面のみの組み合わせも考察していくことで空間内にシェークスピアが生まれる。
活動によって異なる合理的で質の高い空間を考察する。

そのまゝ組み合わせる

曲面のひくを組み合わせる

9 設計

エー・エー・ファン・デル・ローエによるファンズワーエ邸に対して、これまで平面的なデザインに止まっていた対角線という斜線を軸として建築を計画、対角線によるデザインを建築という領域にまで昇華させていく。
対角線を基準とした曲面(対角線曲面)はシェークスピアのサイズによって多様な曲率が出てくる。曲率によって機能不全の程度、曲率に導いた活動が異なることで同一の空間内に多様多様な領域が出現してくる。
機能領域に限らずユニバーサルスペースという空間の概念までも不全にした。
新しい空間の作り方、活動に合わせた合理的性を考えた建築を計画していく。

「椅子の配置が利用者間の距離に与える影響に関する研究」

論文部門 奨励賞

18UH025 釘本 光

椅子の配置が利用者間の距離に与える影響に関する研究

香川 治美研究室 主任 建築デザインゼミナール 18UH025 釘本 光

本研究の目的は、ある空間を利用するすべての利用者に快適な空間を提供するための環境整備である。本報では、椅子の配置が利用者間の距離に与える影響を明らかにする。

ソーシャルディスタンスはWHOが提唱していた概念であるが、現在では、入館に配慮したより適切な表現として「フィジカルディスタンス」と言い換えられている。人と人との距離に関する研究は非常に重要であると考えられる。

利用者の動線の測定データを用いて、人と人との距離と、利用者が一人当たり占有面積を把握できるようにした。



図1 手書きの動線記録と測定データを重ねた動線記録

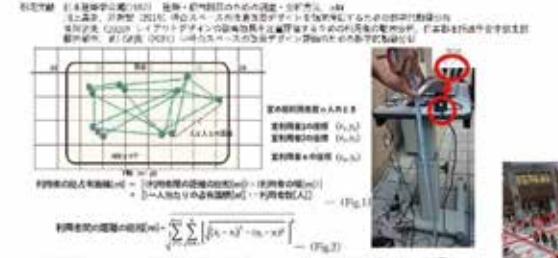


図2 インテリアデザインの改善効果を定量的に明らかにするための計算式

図1中の曲線は実利用者の動線である。床高0.70[m]の高さの直交座標系で、実利用者の位置と動きを表している。椅子の配置を変える前と変えた後(写真3)の実利用者の動線の測定結果を分けることで、椅子のレイアウトデザインの改善効果を定量的に評価できる。

研究方法

写真1に示す測距センサーを床高0.70[m]の位置に5.4[m]間隔で2台設置する。またビデオカメラを上壁に設置し、動線測定と同時に利用者の椅子を録画する。2019年11月27日と28日の両日の14:45から30分間の動線を測定した。場所は本学1号館1階のメインホール(1,250[m²])である。

- 2日目(改善後)は、1日目(改善前)の測定結果をもとにして、椅子の配置を考慮実際に椅子を移動させて測定した。
- 1) 既往研究の最新の測定データを利用して、(図3)の赤点の時刻を算出する。
- 2) 壁に付した場所や通路側の場所研究対象とする室内空間を9つのエリアに分けて、利用者の距離について分析する。
- 3) エリアごとに利用者間の距離の平均と占有面積の算出を行う。(図4)
- 4) 椅子の配置変更前後についてエリアに分けて分析する。

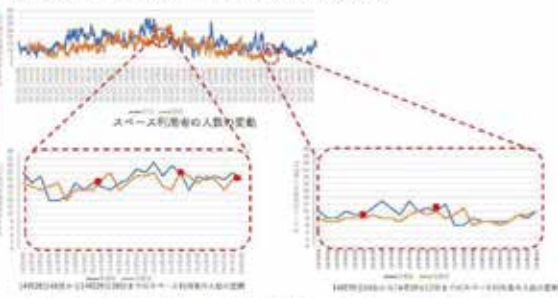


図3 人数と時間とのグラフ

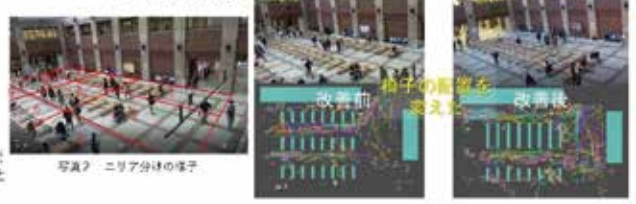


写真2 ニアア分の様子 写真3 改善前後の椅子の配置の比較(左:改善前 右:改善後)



結果
利用者がいるエリアのみピックアップして比較した結果、椅子の配置変更後の利用者間の距離が長くなったことが分かった。また、1つの時刻のみ利用者間の距離が短くなった。

今後の課題
空間全体ではなくエリアごとにもと椅子の配置の影響で利用者間の距離の平均値は大きく、長くなっていることが分かった。今後の課題は、より効果的な椅子の配置により快適な空間を整備することが課題である。

■ 学生のコメント

「新設雨庭の水収支と植栽の実測評価」 18UC003 東野 修平

近年、地球温暖化等によるものと考えられる集中豪雨が増えています。その結果、河川の外水氾濫や都市部の内水氾濫といった災害が頻発するようになりました。この対策として、流域治水に寄与する分散型水管理における小規模グリーンインフラの技術として雨庭が注目されています。しかし、小規模グリーンインフラ設備が効果を発揮するには多数の敷地での設置が必要であり、民間へ広く普及させることが欠かせません。そこで、雨庭における水収支と年間を通した植栽の実測を行うことで、一般的な庭から雨庭へと転換することによる利点を追究し、雨庭の普及につながる評価をすることを目的としました。

対象施設は、新宮町に位置する株式会社立花建設事務所の敷地内に導入された雨庭です。集水面積に降雨強度をかけることで雨水流入量を、三角堰を設けた集水柵を排水箇所に設置し、水位計を用いた観測を行い敷地外への流出量を算出しました。これらから雨庭における水収支を9月から11月の期間で調査しました。植栽の実測では、月に1回の植栽観測調査4項目と代表株の高さ・被度の計測、雨庭内の開花状況、雑草の侵入度合いに関して4月から12月の期間で調査しました。また、11月には第18回ふくおか水もり自慢 in 杷木に参加し、本雨庭の発表・紹介を行いました。

研究を進めるにあたって多くの困難はありましたが、山下先生のご指導と助言、京都先端科学大学の共同研究者のおかげで多くの知識を得ることができました。また、研究室の仲間とはお互いの研究課題の意見交換や指摘、相談など協力して一年間研究することができ、充実した研究生活を送ることができました。最後になりましたが、本雨庭の観測に協力してくださった関係者の皆さんに心から感謝します。

■ 指導教員のコメント

山下 三平

東野修平君の卒業論文は「雨庭」という、近年、都市型水害対策のひとつとして注目を集めているグリーンインフラ要素技術にかかわるものです。新宮町にある民間企業のご協力のもと、昨年11月3日に竣工したあたらしい雨庭の雨水管理と植栽に関する定期的な観測によってその機能を評価しました。

雨庭の実装はわが国ではまだまだ少なく、その普及に工夫が必要です。東野君の卒論は雨庭の雨水流出抑制機能を実証し、かつだれでもが導入をしたくなるような魅力があることを示す研究であり、雨庭の普及のための重要な知見を提供するものです。

今年度から毎月、事務所に設置した水位計のデータを回収し、雨量計のデータと照らし合わせて水収支を求めました。また、多様な植栽の成長の具合を植物観測の方法にのっとり把握し、雨量観測との関係や土壌水分との関係を分析しました。雑草の生え具合を調べもして、維持管理に必要な情報を整理しました。その結果、この雨庭は流出抑制効果が極めて高いこと、植物は年間を通して花をつける計画通りに開花したこと、枯れる植物はほとんどなかったこと、水やりや雑草取りの作業はほとんどなく、これも雨庭のデザインで土層の構成を注意し植栽の種類に配慮した結果であると確認できたことなど、1年を通しての観測から重要な知見が得られました。

1月27日に実施の卒業研究発表会では、わかりやすいプレゼンで聴衆の先生方の理解が進み、本質的でやや厳しい質問がありましたが、地道な観測と分析に基づく余裕から、それらへの応答も極めて適切でした。

■学生のコメント

「生死を分ける生存 72 時間に関する調査研究」 18UC061 吉本 信志

災害時には発生からの 72 時間が重要といわれている。これは、災害が発生してから 3 日目を境に救出者中の生存者の割合が低下することが根拠とされています。しかし、既往研究では、どの災害で 72 時間といわれるようになったか。また、災害種別が相違した場合に 72 時間を境に生存者の割合が低下するか明らかにされていませんでした。

本研究では、新聞において災害発生からの 72 時間について報じられた災害を調査し、どのような災害で 72 時間と報じられたか明らかにすること及び近年発生した土砂災害を事例に災害発生から 72 時間で生存の境があるか検証することを目的としました。

全国主要 4 紙の Web データベースを利用し調査したところ、38 件の災害で 72 時間と報じられていました。また、国内外関係なく 72 時間と報じており、平成 7 年兵庫県南部地震から 72 時間と報じていることがわかりました。次に、近年発生した土砂災害の事例（令和 3 年伊豆山豪雨、令和 3 年 8 月豪雨、令和 2 年 7 月豪雨）で 72 時間の生存の境を検証したところ、災害発生から 3 日目までの救出者に生存者がいる一方で 4 日目以降の救出者は全員が死亡していたことがわかりました。すなわち、土砂災害事例にも 72 時間に生存の境があることが明らかになりました。

研究を進めるにあたって多くの困難がありましたが、山田忠先生のご指導のおかげで多くの知識を得ることができました。また、研究室での仲間と切磋琢磨し合いながらこの一年間研究することができ、充実した研究生生活を行うことができました。携わっていただいた方々に感謝し、この経験をこれからの社会に活かしたいと思います。

■指導教員のコメント

山田 忠

報道機関は、平成 28 年年熊本地震や令和 2 年 7 月豪雨など災害が発生すると 72 時間以内に被災者を救出する重要性を報じます。しかし、この 72 時間の重要性についていつから報じられるようになったのでしょうか？という疑問が吉本さんの研究のスタートでした。既往研究では、1995 年兵庫県南部地震で 72 時間を境に救出者の生存率が低下したことについて言及していましたが、それ以外の情報はありませんでした。吉本さんは、全国紙で最も創刊が古い毎日新聞の 1871 年 4 月 1 日を手始めに、各紙で検索できる最も古い年月から 2021 年 11 月 30 日までの記事を対象に丹念な調査を行いました。その結果、全国紙が 1995 年兵庫県南部地震をきっかけに 72 時間の救出の重要性について報じたことや、国内外を問わず地震災害や風水害において 72 時間の救出の重要性を報じていたことがわかりました。さらに、全国紙は、72 時間以内の救出の重要性を報じるものの、報じた災害において救出者の生存率が 72 時間で変化するか検証した記事がないこともわかりました。本来ならばこれだけでも十分な成果ですが、72 時間以内に救出されると本当に生存率が高いのか？とさらなる疑問が生じ、収集した記事をもとに検証しました。最終的に豪雨による土砂災害の事例では救出者の生存率に 72 時間の境があることがわかりました。

卒業研究では、剣道部の主務を務めながらも熱心に取り組み、貴重な成果を残すことができました。卒業後も、吉本さんらしさを大切に、土木技術者として活躍されることを願っています。

新設雨庭の水収支と植栽の実測評価

18UC003 東野修平

1. はじめに

近年、地球温暖化等によるものと考えられる集中豪雨が増えている。その結果、河川の外水氾濫や都市部の内水氾濫といった災害が頻発するようになった。

この対策としてグリーンインフラの導入が進められている。グリーンインフラには雨水流出抑制による防災・減災だけでなく、水質浄化やヒートアイランド現象の緩和、自然体験の場の提供、コミュニティの交流促進、景観向上、生物多様性の保全といった多様な効果がある。

ところで既存インフラの維持管理費の増加や、人口減少の進む日本では、コストの嵩む大規模集中型の対策よりも、流域治水に寄与する分散型水管理が重要である。

分散型水管理における小規模グリーンインフラの技術として、雨庭が注目されている。しかし、小規模グリーンインフラ設備が効果を発揮するには多数の敷地での設置が必要であり、民間へ広く普及させることが欠かせない。

そこで本研究は、雨庭における水収支と年間を通じた植栽の実測を行うことで、一般的な庭から雨庭へと転換することによる利点を追究し、雨庭の普及につながる評価をすることを目的とする。

2. 方法

(1) 雨庭の概要

対象施設は福岡県糟屋郡新宮町に位置する、株式会社立花建設事務所の敷地内に導入された雨庭である。この事務所は国道3号線沿いにあり、敷地面積は1319.09m²である。対象とする雨庭は事務所北側に位置し、海・山・街をシンボルとした新宮町らしい雨庭をコンセプトとして設計され、新宮町の代表的な自然要素が取り入れられた。事務所側の雨庭は立花山・三日月山をイメージした“山”，3号線側の雨庭は新宮海岸をイメージした“海”がテーマである(図-1)。これらの雨庭は2020年11月3日に竣工した。事務所の屋根に降った雨水がまず“山”に、つづいて“海”に流れる形式で貯留・浸透し、余剰分が“海”の末端から

側溝へと流出する。



図-1 立花建設事務所敷地¹⁾。矢印は雨水の流れを示す。

(2) 水収支の求め方

事務所の屋根の雨量計と“山”と“海”の末端に設置した水位計を用いた観測によって水収支を明らかにする。屋根の一部(107m²)と，“山”の面積22.365m²，“海”の面積12m²を合計した141.365m²を集水面積とし、これに雨量強度をかけることで雨庭への雨水流入量を算出する。

本事務所への雨庭導入の経緯と、観測方法の概要を図-2に示す。

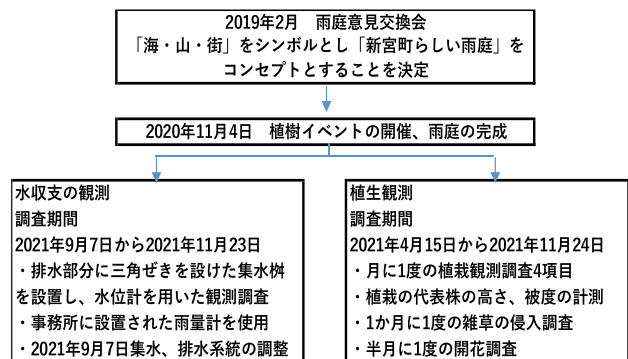


図-2 雨庭導入の過程

(3) 植生の観測

植生はコドラートを使って、4つの項目についてそれぞれ目視で評価した(表-1)。雨庭内に侵入した雑草は、毎月の調査後に除草し、その間の侵入度合いを探った。

表-1 4つの調査項目とその評価

	良(2点)	可(1点)	不可(0点)
開花	複数開花	1つ開花	開花なし
葉の状態	良好	変色・部分的な枯損あり	多くが変色・枯損
病害虫	なし	部分的にみられる	大部分にみられる
しおれ	なし	程度：小	程度：大

3. 結果

(1) 水収支

流出の発生した降雨イベントのときの浸透率を表-2に示す。降雨イベントは、無降雨期間が6時間以上経過した降雨とする。

表-2 期間内の降雨イベント

	9月14日	9月17日	9月22日	11月9日	11月11日
最大10分雨量(mm)	3	4	8	3	6
最大時間雨量(mm)	11	10	8	6	12
累積雨量(mm)	23	17	17	34	16
降雨継続時間(分)	610	560	140	1630	330
浸透率(%)	99.75	99.98	99.96	99.88	99.85

水収支の把握のために観測できた降雨イベントは全22回で、うち5回で側溝への流出が発生した。しかしこの5回の浸透率はすべて99%以上であり、極めて高い値となった。図-3に2021年11月9日の降雨と流出の時間変化を一例として示す。側溝への流出は降雨のピーク時と一致していることがわかる(他も同様)。

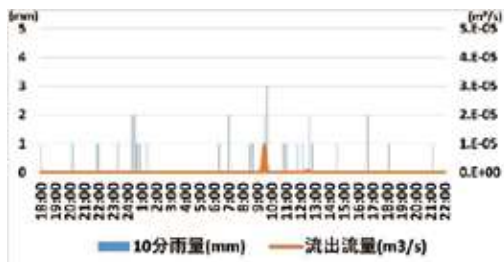


図-3 11月9日の降雨と流出の時間変化

(2) 植生の観測

散水は6月、7月および10月の降雨が少なかった月の調査後に雨庭全体に行ったのみである。2021年は梅雨期に降雨が極度に少なかったが、植栽の枯死が観測されたのは、シャガ32株のうち5株だけであった。図-4に3月から12月までの植栽開花時期を示す。年間を通していずれかの花が、重複するものも含めて、楽しめることがわかる(図-4)。

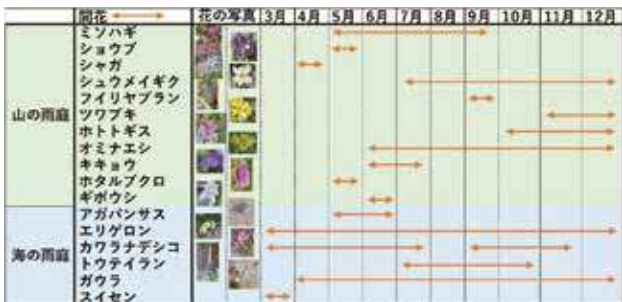


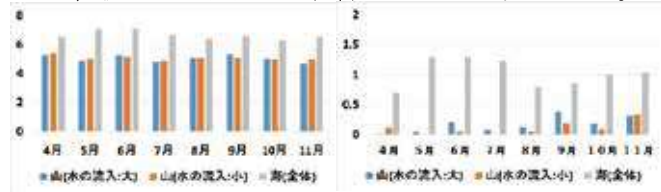
図-4 雨庭の開花状況

雑草の侵入度合いについては、“海”と“山”で違いが顕著であった。“山”は上層の砂利敷き厚がほぼ一様に約5cmであるのに対し、“海”は15cmと5cmの領域

をもつ。“海”の場合15cmの箇所では侵入度合いが最も少なくなり、5cmの箇所では“山”と比較しても多くなった。“海”は“山”より側道に近い。“山”は植栽の根元で雑草が確認された。また、追加の植え付けを行った翌月は侵入度合いが多かった。前者は雑草侵入の曝露、後者は植えた際の土に雑草の株や種が混じっていたことが理由と考えられる。

図-5は雨庭の植栽位置を3領域に分類し、その中の植生の総合評価点と開花評価点のそれぞれの平均を月ごとに示したものである。“山”は想定される水の流入量の差で分類し、“海”と合わせて3つに分類した。

“海”の総合評価点の平均値は全体を通して“山”よりも良好であり、“山”と“海”では平均値に約2点の差がある(図-5(a))。これは“海”に、より乾燥に強い植栽を選んだためと思われる。一方、“山”の2分類は総合点では差がないが、開花点に差がみられた(図-5(b))。水の流入が大きい領域の平均値が高い傾向がみられ、流入量は花付きに影響があったと考えられる。



(a) 総合評価点の平均 (b) 開花評価点の平均

図-5 植栽位置による違い

4. おわりに

本研究は小規模グリーンインフラとしての雨庭の普及を目指すために、雨庭の水収支と植栽を実測評価した。その主な成果は以下のとおりである。

- 1) 2つの雨庭の浸透率はともに99%以上となり、雨水流出抑制効果が高い。
- 2) 雨庭内で植え替えせずに、最低限の散水のみで生育し、年間を通して花が咲いた。
- 3) 15cmの砂利層箇所では、雑草の侵入を抑えられている。月1回の除草のみで雑草は目立たず、手のかからない管理のしやすい庭となっている。

このように本雨庭は高い流出抑制機能をもつとともに、通常の庭と比べ、水やり・雑草処理を簡略化することができ、季節を通した植栽を楽しめる。

今後は、継続した実測調査を行い、梅雨時期や豪雨時の水収支と植栽の経年変化を調べる必要がある。

参考文献

- 1) Esri_JP_Content : 衛星画像(World Imagery) 2018/02/07

生死を分ける 72 時間に関する調査研究

18UC061 吉本信志

1. はじめに

災害時には発生からの72時間が重要といわれている。これは、災害が発生してから3日目を境に救出者中の生存者の割合が低下すること¹⁾が根拠とされている。しかし、既往研究では、どの災害で72時間といわれるようになったか。また、災害種別が相違した場合に72時間を境に生存者の割合が低下するか明らかにされていない。

本研究では、新聞において災害発生からの72時間について報じられた災害を調査し、どのような災害で72時間と報じられたか明らかにすること及び近年発生した土砂災害を事例に災害発生から72時間で生存の境があるか検証することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査方法

72時間と報じられた災害を全国主要4紙(朝日新聞²⁾、日本経済新聞³⁾、毎日新聞⁴⁾、読売新聞⁵⁾)のWebデータベースで調査する。検索ワードは(災害_72時間)で検索する。検索期間は、新聞社の中で一番収録期間が古い毎日新聞の1872年4月1日から2021年11月31日までとする。

(2) 分析方法

まず、72時間と報じられた災害の特徴と報じ方を明らかにする。具体的には72時間と報じられた災害を国内と国外の災害種別に分類し、比較した。災害別は地震、風水害、雪害、その他の4区分にした。

次に、災害発生から72時間の生存状況を検証する。具体的には、72時間と報じられた災害について新聞記事で救出者と死者が判明できた最近2年間の土砂災害(令和3年伊豆山土砂災害、令和3年8月豪雨(雲仙市)、令和2年7月豪雨(津奈木町(福浜地区)と芦北町(田川地区、伏木地区、女島地区、小田浦地区))を対象とし、救出人数や救出後の生存者から生存率を算出し、土砂災害において生存をわける72時間が存在するのかを検証する。

3. 新聞で72時間について報じられた災害

新聞で72時間について報じられた災害は38件あり、1995年兵庫県南部地震が最初であった⁶⁾。72時間と報じられた災害を分類した(図-1)。図-1より、地震は、国内6件と国外19件であり、国外の方が72時間と報じていたことがわかった。風水害は、国内10件と国外2件であり、国内の方が報じられていたことがわかった。雪害は0件だった。その他は、国内で1件のみであり、地震や豪雨によらない土砂災害であった。災害種別で比較すると、国外の地震の記事が最も多かった。

新聞での報じ方について、国内外の災害問わず1995年兵庫県南部地震の事例を引用する形で72時間以内での救助の重要性を報じているもの⁷⁾と、単に生存の72時間が重要と報じていた記事⁸⁾があった。一方で、当該災害での72時間で生存の境があったことについて言及した記事は見受けられなかった。

以上より、新聞紙で災害発生からの72時間について報じられた災害は38件あり、地震が最も多かった。初めて報じられた災害は1995年兵庫県南部地震であり、これ以外の災害は国内外を問わず兵庫県南部地震を引用する記事と単に生存の72時間が重要と報じていた記事があった。

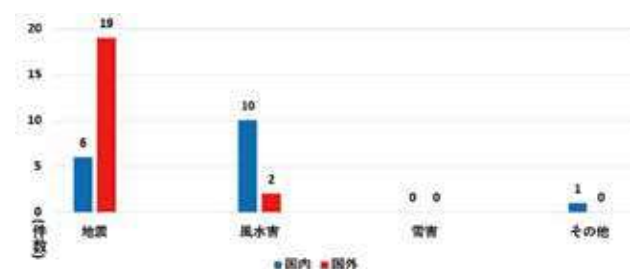


図-1 新聞紙で72時間と報じられた災害の分類

4. 土砂災害事例による生存率検証

(1) 令和3年伊豆山土砂災害(熱海市)の事例

静岡県熱海市にある気象庁の網代観測地点では2021年7月3日午後3時20分までの48時間で315.0mmの降水量を観測した。この豪雨により3日午前10時30分頃に伊豆山地区の逢初川で土石流が発

生し、住宅 128 棟が巻き込まれ、救出活動が行われた。新聞記事より明らかになった救出人数や救出者の生存率を図-2 に示している。図-2 より、3 日目までは救出者の中で生存者がおり、4 日目以降は全員が死亡していたことが明らかになった。生存率は、1 日目が 100%、2 日目が 92%、72 時間となる 3 日目が 66% になり、3 日目までに救出できれば生存の可能性が高いことがわかった。

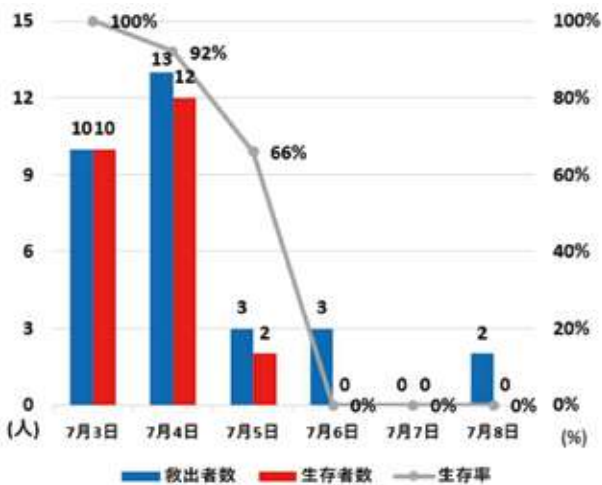


図-2 熱海市における救出者の生存率

(2) 令和 3 年 8 月豪雨(雲仙市)の事例

長崎県雲仙市にある気象庁の雲仙岳観測所では 2021 年 8 月 13 日午前 10 時 20 分までの 48 時間で 737.5mm の雨量が観測された。豪雨により土砂崩れが発生し住宅 2 棟が巻き込まれ、救出活動が行われた。救出者の生存状況を図-3 に示している。図-3 より、1 日目に 2 人救出され、そのうち 1 人が生存していたが、それ以降の救出者に生存者はいなかった。

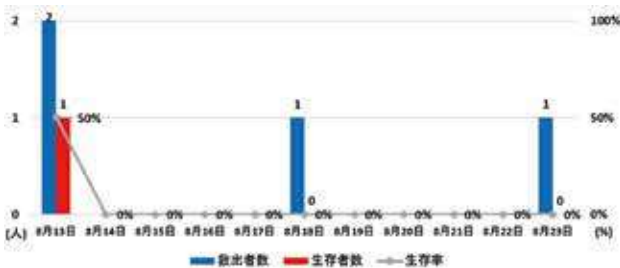


図-3 雲仙市における救出者の生存率

(3) 令和 2 年 7 月豪雨(津奈木町, 芦北町)の事例

熊本県人吉市にある気象庁の人吉観測所では 2020 年 7 月 4 日午前 10 時までの 24 時間で約 700mm の大

雨を観測した。この豪雨により発生した土砂により、津奈木町で 1 棟、芦北町で 7 棟が土石流に巻き込まれた。救出者の生存率を図-4 に示している。図-4 より、1 日目に 8 人救出され、そのうち 3 人が生存していたが、それ以降の救出者に生存者はいなかった。

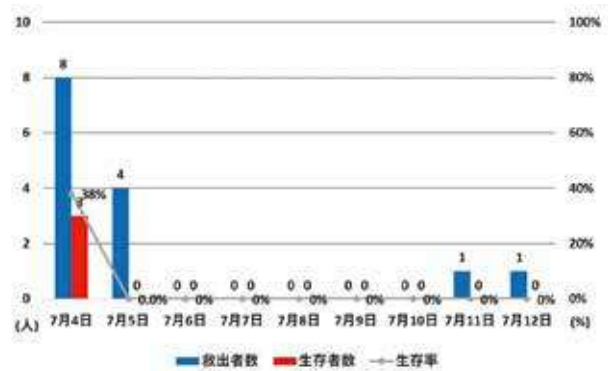


図-4 津奈木町と芦北町における救出者の生存率

5. まとめ

新聞で 72 時間と報じていた災害は 38 件あり、1995 年兵庫県南部地震が最初であった。また、新聞では、国内外の災害を問わず 72 時間について報じていたが、兵庫県南部地震の事例を引用するものと、単に生存の 72 時間の重要性を報じているものがあつた。

土砂災害の 3 事例では、災害発生から 3 日目までの救出者に生存者がいる一方で 4 日目以降の救出者は全員が死亡していたことがわかつた。すなわち、土砂災害についても兵庫県南部地震と同様に 72 時間に生存の境があることが示唆された。

参考文献

- 1) 飯開輝久雄・岩田健一・上田敏雄:大地震発生後の生死を分ける「黄金の 72 時間」とコミュニティ ~ご近所づきあいが街(いのち)を救う~, 熊本大学政策研究所, pp. 81-92, 2011
- 2) 朝日新聞記事検索 <https://database.asahi.com/>
- 3) 日本経済新聞記事検索 <https://www.nikkei.com/search>
- 4) 毎日新聞記事検索 <https://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>
- 5) 読売新聞記事検索 <https://www.yomiuri.co.jp/web-search/>
- 6) 『朝日新聞』1995 年 12 月 21 日朝刊, 東京
- 7) 『朝日新聞』2014 年 08 月 22 日夕刊, p13
- 8) 『朝日新聞』2019 年 01 月 29 日朝刊, p13

来たれ、高校生!

グランプリ 12 万円相当

■ 建築都市工学部全国高等学校プロジェクトコンテストについて

九州産業大学建築都市工学部は、インテリアから住宅、建築、そして都市、地球環境まで、人間の住まう環境を総合的に学べる全国でも珍しい建築系の学部です。

九州発「プロコン」は、九州産業大学建築都市工学部が、私たちの住まい、地域、そして国土をよりよくするために、将来に向けて考えるべきテーマなどを毎年掲げ、全国の高校生と一緒に考えようとするコンテスト形式のイベントです。〈住居・インテリア〉の領域から〈建築〉の領域、さらに〈都市デザイン〉の領域まで幅広い内容を扱います。設計部門とアイデア部門があり、高校生であればどなたでも応募・参加できます。

応募作品の中から一次審査を通過した入選者には、秋の学園祭の時期に本学に来ていただき、最終発表会でプレゼンの上、各賞の入賞者を決定します。

第4回の課題は、「未来に遺したい住まい・まち」に関する課題です。高等学校での日頃の学習やクラブ活動などの成果を活かして、ぜひともグランプリを目指して「プロコン」に挑戦してください。高校生の皆さんのフレッシュなアイデアをお待ちしています。

■ 課題について

2021年 第4回課題

未来に遺したいものを活かす「住まいづくり」や「まちづくり」の提案

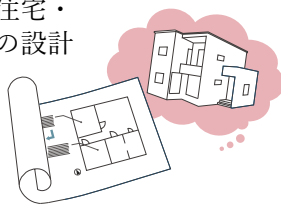
私達は、人々に愛される建物や町並み、生活を支えるみちや土木構築物、地域の誇りの祭や伝統など、先人が遺してくれた有形無形のものに囲まれて生活しています。それらは私達が未来に遺そうと工夫をしなければ簡単に失われてしまいます。既に失われてしまったものや今にも無くなってしまいそうなものもあります。

そこで、皆さん自身が未来の人々のために遺したいと考えるものを幅広く捉えていただき、それを活かす「住まいづくり」や「まちづくり」に関する新しいアイデアや実現可能な具体的な提案を求めます。

■ 部門について ～設計を学んでいる人も、学んでいない人も、自由にどちらの部門にも応募できます～

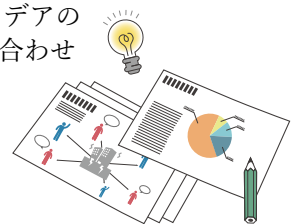
a 設計部門

具体的なまち・建築・住宅・
インテリア・装置などの設計
(設計図面を提出)



b アイデア部門

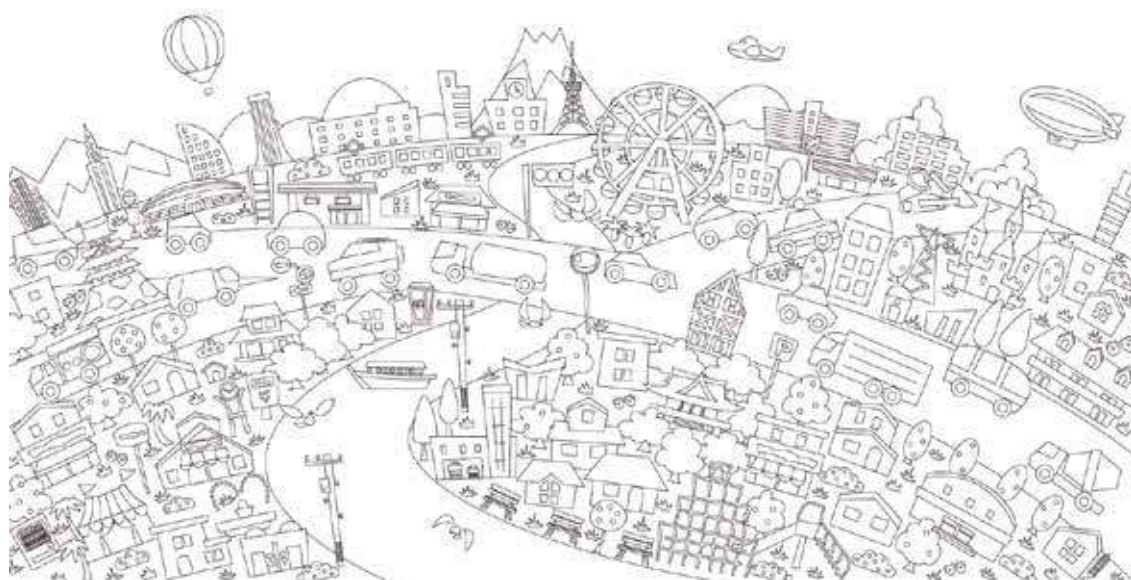
研究調査に基づいたアイデアの
提案 (図表と文書を組み合わせた
提案書を提出)



*9月16日に一次審査を行い、通過した7都道府県8高等学校の8名がオンラインにて開催された最終発表および審査会に参加しました。結果、金賞1点(6万円相当)、銀賞3点(3万円相当)、奨励賞4点(5千円相当)が決定しました。



未来に遺^{のこ}したいものを活^いかす 「住まいづくり」や「まちづくり」



九州産業大学第4回建築都市工学部 全国高等学校プロジェクトコンテスト

提出締切：2021年9月1日（消印有効）／一次審査結果発表：9月29日／グランプリ 賞品 12万円

九産大
プロコン
2021

課題：未来に遺したいものを活かす「住まいづくり」や「まちづくり」の提案

私達は、人々に愛される建物や町並み、生活を支えるみちや土木構築物、地域の誇りの祭や伝統など、先人が遺してくれた有形無形のものに囲まれて生活しています。それらは私達が未来に遺そうと工夫をしなければ簡単に失われてしまいます。既に失われてしまったものや今にも無くなってしまいそうなものもあります。

そこで、皆さん自身が未来の人々のために遺したいと考えるものを幅広く捉えていただき、それを活かす「住まいづくり」や「まちづくり」に関する新しいアイデアや実現可能な具体的な提案を求めます。

小さなことでも、大きなことでも、みんなのアイデアで私たちの住環境をより良くしましょう。

〈住居・インテリア〉〈建築〉〈地域・コミュニティ〉の領域を対象に、どの部分でも、どのような側面からでも結構です。

日本国内の高等学校に在籍する生徒であれば、どなたでも参加できます（高等専門学校は除く）。

図面等を用いて設計提案する「設計部門」と、スケッチやダイアグラムでアイデアを表現する「アイデア部門」のどちらかを選択し、挑戦してください。多くの高校生のフレッシュなアイデアをお待ちしています。

応募作品に対する一次審査通過者を九州産業大学（福岡市）に招待し、最終プレゼンテーションの結果、グランプリ以下の各賞を決定します。

*裏面に応募要項

審査委員長 建築学科 准教授 富田 英夫

総評

人々に愛される建物や町並み、生活を支えるみちや土木構築物、地域の誇りの祭や伝統など、私達は、先人が遺してくれた有形無形のものに囲まれて生活しています。それらは私達が未来に遺そうと工夫をしなければ簡単に失われてしまいます。いつの間にか失われてしまったものや、今にも無くなってしまいそうなものもあります。

このような状況に注目して、「第4回九州産業大学建築都市工学部全国高等学校プロジェクトコンテスト」では、課題を「未来に遺したいものを活かす『住まいづくり』や『まちづくり』の提案」としました。そして、高校生自身が未来の人々のために遺したいと考えるものを幅広く捉え、それを活かす「住まいづくり」や「まちづくり」に関する新しいアイデアや実現可能な具体的な提案を求めました。

結果として、設計部門33作品、アイデア部門7作品の、合計41作品の応募がありました。昨年度の第3回と比べるとアイデア部門の応募が減った一方で、設計部門の応募は少し増えました。未来に遺したいものとしては、縁側や畳といった伝統的な建築の要素や、愛着のある地域の建築、地域の特長のある文化、自然を生かした暮らし方、自然そのものなどがあり、幅広い対象が取り上げられていました。

2021年9月16日（木）開催の審査会において、応募作品について厳正に審査を行い、設計部門6作品、アイデア部門2作品、計8作品を入選作品として選出しました。8作品に絞り込んだ入選作品は全て一定のレベルを超えた優れた作品でした。10月31日（日）に実施された最終審査会では、金賞の「石の丘 -見晴らしの良い丘を石でつくります-」が、建築、都市デザイン、住居・インテリアという様々な専門分野の審査員の支持を集め、評価されました。

出題者としては、作品を応募してくれた高校生の皆さんが単に古いものを優れているとみなす懐古主義に陥らずに、「未来に目を向ける」という課題に込めたメッセージに答えてくれた事を頼もしく思いました。

金賞

三重県立伊勢工業高等学校 三浦 凜太郎 [設計部門]

「石の丘 -見晴らしの良い丘を石でつくります-」

今回の第4回コンテストにおいて最も高い評価となった本作品は、礫石が堆積してできた陸繁砂州（トンボロ）に注目し、それを防災や海岸沿いのまちづくりに活かし、避難所・集会所を提案したという内容です。トンボロという長い年月の中で自然に出来上がった土木的なスケールの存在に注目しつつも、海沿いの地域の避難所・集会所としての建築造形と上手に融合させ、かつ内部空間としても海風の通り抜ける気持ちの良い空間が提示できていた点が非常に高く評価されました。

さらに、作者は主要な素材である礫石に関して、日中の表面温度の変化の様子を1時間ごとに測り、かつアムスラーで強度も測っています。このように素材の特徴について実際に実験を重ねて分析している工学的なアプローチも、審査において評価されたポイントの一つでした。そういった特徴の一方で、提案された建築とその周囲の関係が質疑応答を経てもなお明確にならなかったという点が審査委員間で指摘され、最高賞であるグランプリには至りませんでした。自然が作り上げたトンボロという土木的スケールの造形と人間が作る建築の造形の融合に果敢に挑戦し、自然の力に寄り添い抗わない構築環境を作り上げた本作品は、建築・土木・インテリアの領域をあつかう本コンテストにもっとも相応しい作品でした。

銀賞

兵庫県立兵庫工業高等学校 岩城 朱里 [設計部門]

「十年一昔 一新たに添える間」

本作品では、コンテナハウスを活用して、商店街の再活性の提案が行われています。建設に時間がかからず比較的短期間に設置する事ができるコンテナハウスを活用する提案には、衰退し空地が多くなってしまった商店街を目の前にして、少しでも早く即効性のある提案をしようという作者の切実な思いが現れているようにも思われました。

コンテナには三種類の大きさが用意され、単身者用の賃貸住宅や高齢者用住宅、店舗、貸しスペースなど多様な使われ方が可能です。コンテナの長さがそれぞれの用途に応じて効果的に使われている点がこの提案の特色です。加えて、この提案の魅力は、既存建築と新しく置かれるコンテナの間にできるオープンスペースにもあるように思われます。例えば、コンテナの下のピロティ状の空間は、まわりにある既存建築の壁によってゆるやかに閉じられる事になり、新旧が入り混じった居心地の良い場所になっています。

銀賞

静岡県立浜松工業高等学校 サバレタ サイトロ [設計部門]

「三斤花火の家」

本作品は、手筒花火の文化を遺すために、空き家を活用して、その一階部分に手筒花火を使う空間・見る空間・学ぶ空間を備えた「三斤花火」の家を提案するものです。提案の敷地のすぐ近くに手筒花火を奉納する白山西宮神社が位置しているため、とりたてて特徴の無いどこにでもありそうな空き家が、この提案によって手筒花火を使う・見る・学ぶ空間として劇的に変わる事になります。二階には、花火職人の夫婦が住まいます。新築ではなく既存建築のリノベーションとした事で提案のリアリティがでていますし、空き家問題という文脈での評価も加わる事になりました。

このように、本作品における提案のストーリーは大変緻密に構成されており、感心しました。加えて、調査の過程では空き家の平面を把握する際に内部の調査ができなかったため、外部から見て内部を推定するなど、困難に対して柔軟な発想で対処された姿勢にも好感を持ちました。

銀賞

千葉県立千葉工業高等学校 竹村 旭陽 [アイデア部門]

「 「コアな存在としての駅」 再構築（まちづくり）の提案 —千の歴史を紡ぐ道 分断から融合へ— 」

本作品では、東千葉駅を対象にして、サイクリング観光に特化した駅として再生する提案が行われています。千葉駅の移転までは、この駅付近には歴史のある商店があり、人の交流で賑わっていたと言われます。そのかつての姿を、自転車を主題にして駅を再生する事によって取り戻そうというものです。

具体的に、駅は自転車を持参していても利用可能な電車（B.B.BASE）がサイクリストの移動基地として整備され、鉄道の存在によって分断されている房総往還をつなぐ橋を新たに設けることで房総往還はサイクリングロードとなり、駅の屋上はBMXの練習場となります。駅はそれらを利用するサイクリストの拠点となるのが容易に想像できます。描かれた宿泊施設の姿が提案の中で異なるなど気になる点もありましたが、アイデア部門の作品として自転車という統一したテーマの下でリアリティのあるアイデアを提示したという点が多くの審査委員から評価されました。

奨励賞

三重県立四日市工業高等学校 池田 蒼生 [アイデア部門]

「 奉納神楽 —おじいちゃん輝く 町輝く— 」

本作品は、地域の神楽の担い手が、特技（例えば笛の演奏など）を「町に奉納」し、その様子をまわりの人々がSNSで発信することで、町の人々同士あるいは町外の人々と繋げようとする提案です。発信の場として、板状の部材を組み合わせた小規模な舞台が、町の要所にいくつか配置されます。神様への奉納と町への奉納という捉え方や、神楽という形のないものを中心に形成された人と人の関係をSNSというやはり形のないもので再構築しようとする方法には、よく考えられ整理された跡を読み取る事ができました。今回のコンテストでは小規模工作物の提案が1割程度ありましたが、その中でもっとも優れていた提案です。

奨励賞

長崎県立島原工業高等学校 本村 響 [設計部門]

「 emotional —廃校となった母校でできること— 」

本作品は、地域の人々に愛されながらも、小学校の統廃合により使われなくなった小学校の外観をそのままに、内部空間に手を加えて活用する提案です。一部の内部空間の床を撤去し大規模な吹き抜け空間を新たに設け、1階を市場と図書館、2階を楽器演奏や工作の場、3階をドミトリーに転用する計画が行われています。単に小学校の躯体を利用し、無関係な新たな用途を割り当てるようなリノベーションではなく、もともとの図書室やPC教室などは活用案でも図書室やPC室とされる事からわかるように、既存の使われ方の記憶をも受け継ぐような丁寧な活用の提案がなされている点が評価されました。



▲ Zoom によるプレゼンテーションと質疑応答の様子

奨励賞 青森県立青森工業高等学校 酒井 俊輔 [設計部門]

「 舞い戻れ！青森のねぶた！ 」

－ 国有形文化財「青森ねぶた祭」の伝統文化の継承が青森の未来を築く－ 」

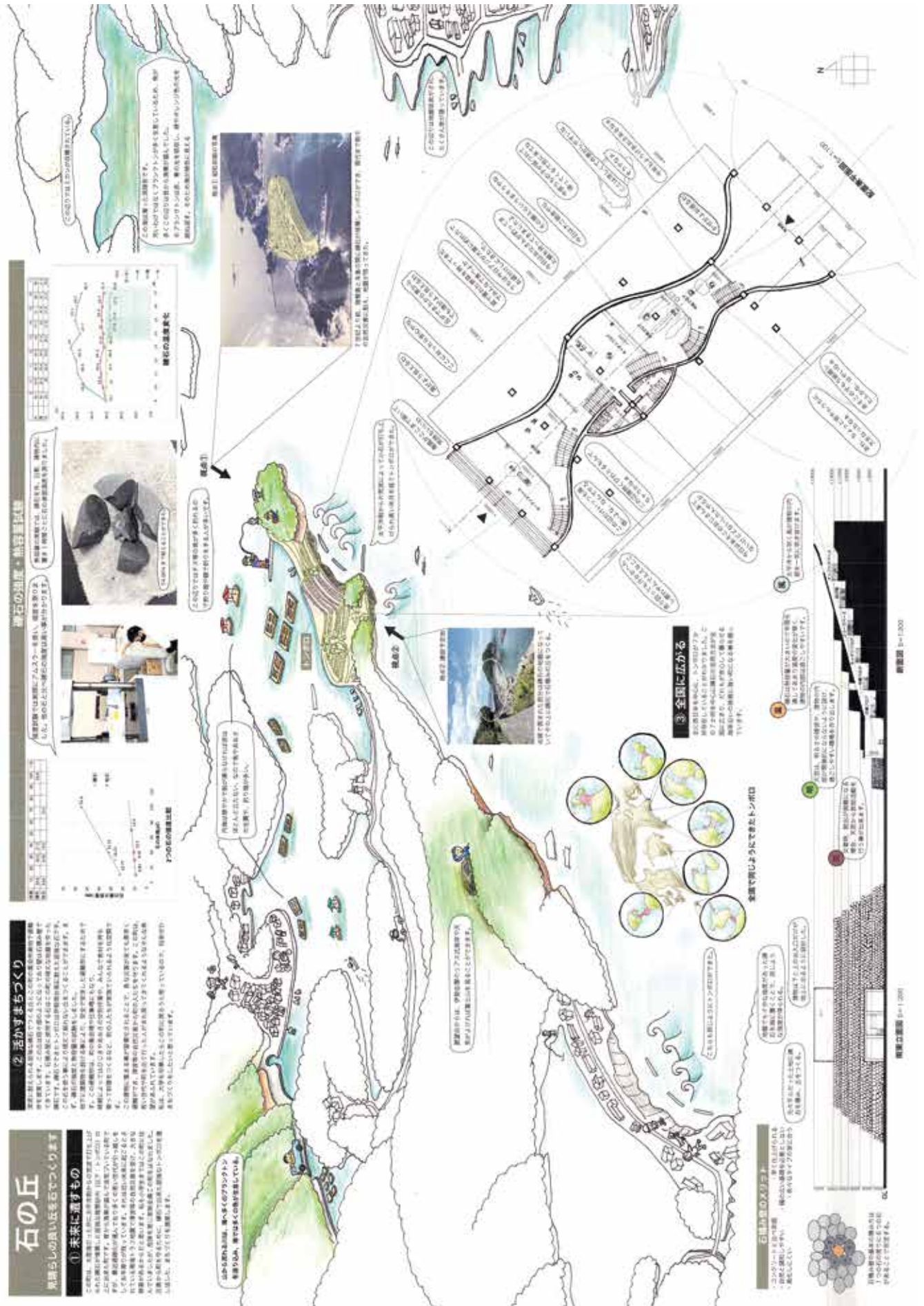
本作品は、青森のねぶた祭という文化を守るために、ねぶたの様々な特徴を見学・体験できる建築を提案されています。ねぶた製作状況を観覧できる建築、ねぶたの鑑賞、ねぶたで使われる楽器の演奏を体験できる建築というように、祭りを作り上げていく過程から祭りそのものまで、魅力をあますところなく伝えるための5種類の建築が設計されています。重要なのは、それらの建築にまとまりをもたせるために新しいねぶたの運行ルートを考えている事です。祭りと都市・建築空間は密接な関係がありますので、ねぶた祭を後世に伝えるために都市・建築空間の提案を行った事は、実は本質を突いていると言えます。

奨励賞 大分県立大分工業高等学校 森 音凜 [設計部門]

「 仏の里を守る ー臼杵石仏インフォメーションセンターー 」

本作品は、国宝の臼杵石仏のある地域に、石仏を学び、研究する施設を設計する提案です。タイトルが「仏の里を守る」とされるように、国宝として手厚く保存される石仏そのものではなく、石仏の周囲で生活を営んでいる人々の里を守るという点に、提案としての新しい視点があると評価しました。2階建ての公共建築という比較的ヴォリューム感が出やすい形式にもかかわらず、背後にある山の傾斜に沿うように屋根勾配を調整し、公園側に開けた半屋外空間を設けて既存の構築環境との関係をつくり、外壁は石仏と同じ凝灰岩にするなど、建築設計としての完成度は高いものでした。

金賞 | 「石の丘 -見晴らしの良い丘を石でつくります-」三浦 凛太郎



銀賞 | 「三斤花火の家」サバタ サイトロ

三斤花火の家

1. コンセプト

本作品は「三斤花火の家」をコンセプトとして設計された。個人でも多くに作りやすくなるように、外観はシンプルで、内部は多岐にわたる用途を想定し、柔軟に対応できるように設計された。また、環境に配慮し、自然素材を使用し、省エネルギーを実現している。さらに、地域の文化や歴史を大切にし、伝統的な工法や技術を継承している。

この家は、伝統的な「三斤花火」の文化を大切にし、地域の人々にとっての集いの場となることを目指している。また、環境に配慮し、自然素材を使用し、省エネルギーを実現している。さらに、地域の文化や歴史を大切にし、伝統的な工法や技術を継承している。

2. 敷地の調査から「三斤花火」



3. 空き家問題

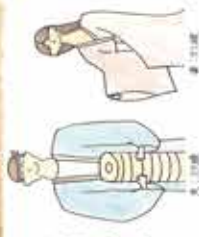
空き家問題は、地域社会に大きな影響を及ぼしている。特に、高齢化が進む地域では、空き家の増加が深刻な問題となっている。本作品は、空き家を有効活用し、地域社会に貢献することを目的としている。

4. 建物



5. 家族構成

家族構成は、多岐にわたる用途を想定している。特に、高齢者や障がい者の方々が安心して生活できるように設計されている。また、地域の文化や歴史を大切にし、伝統的な工法や技術を継承している。



6. ふれろ建築へ



7. 建物の形状

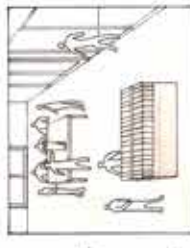


8. 空き家の空間構成



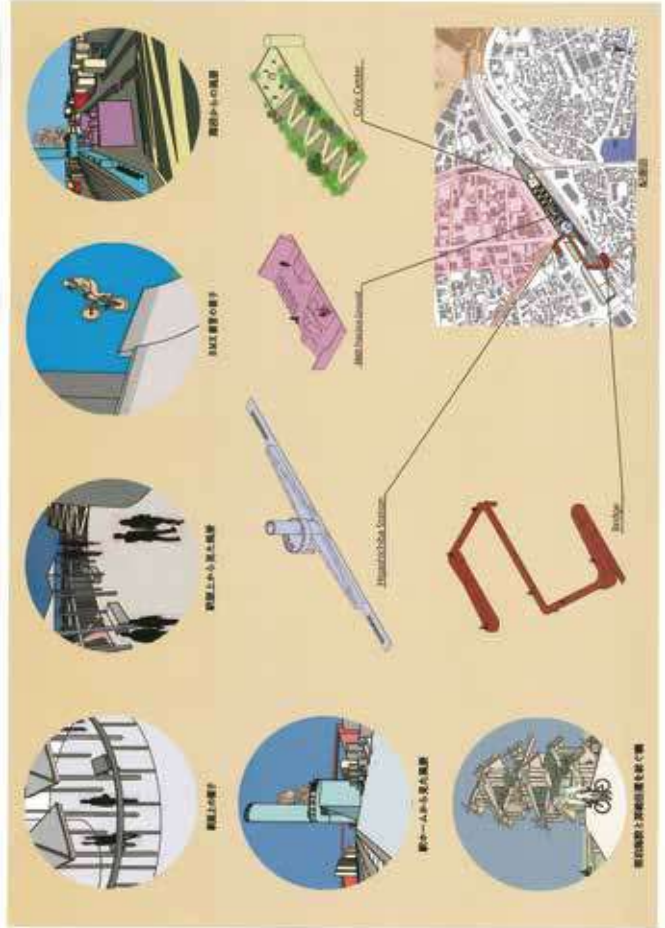
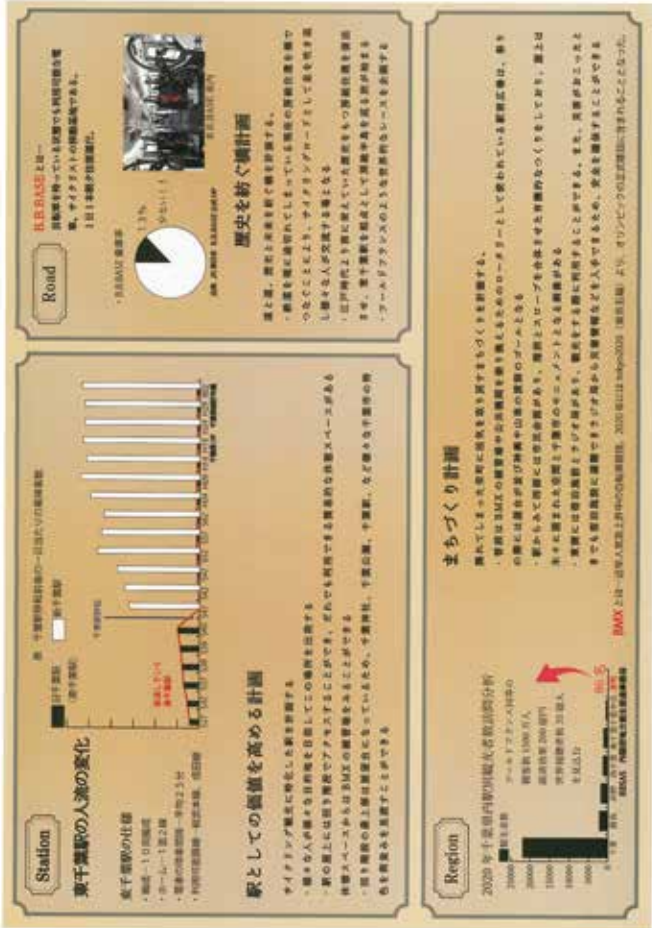
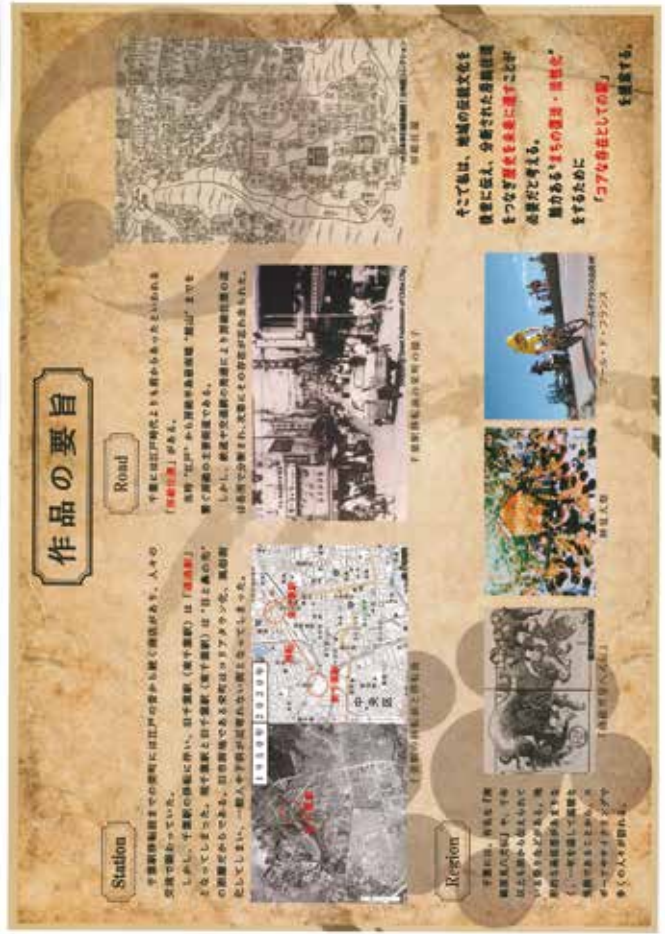
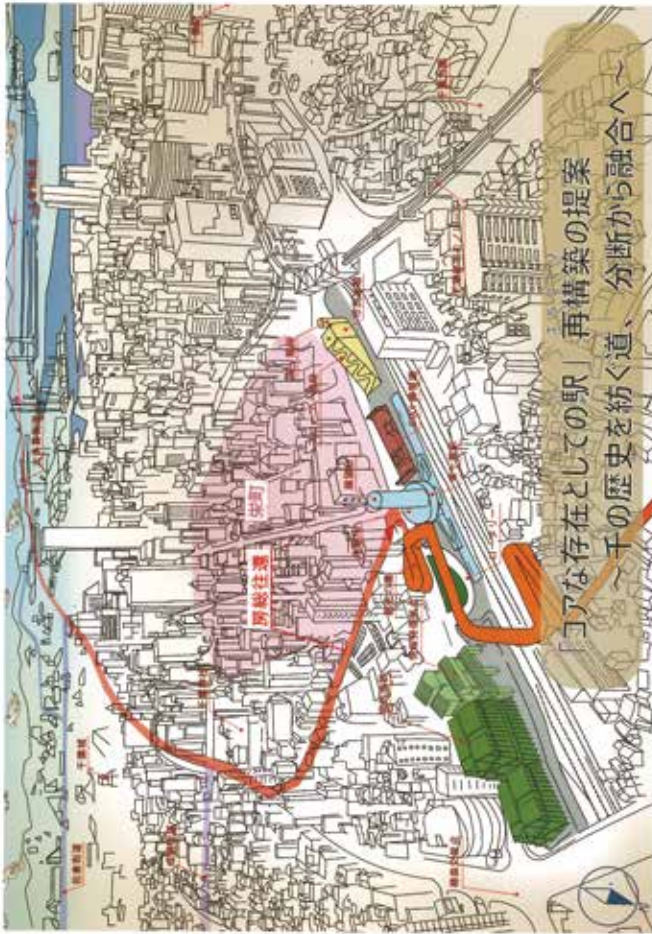
9. 機能の三構成

機能の三構成は、多岐にわたる用途を想定している。特に、高齢者や障がい者の方々が安心して生活できるように設計されている。また、地域の文化や歴史を大切にし、伝統的な工法や技術を継承している。

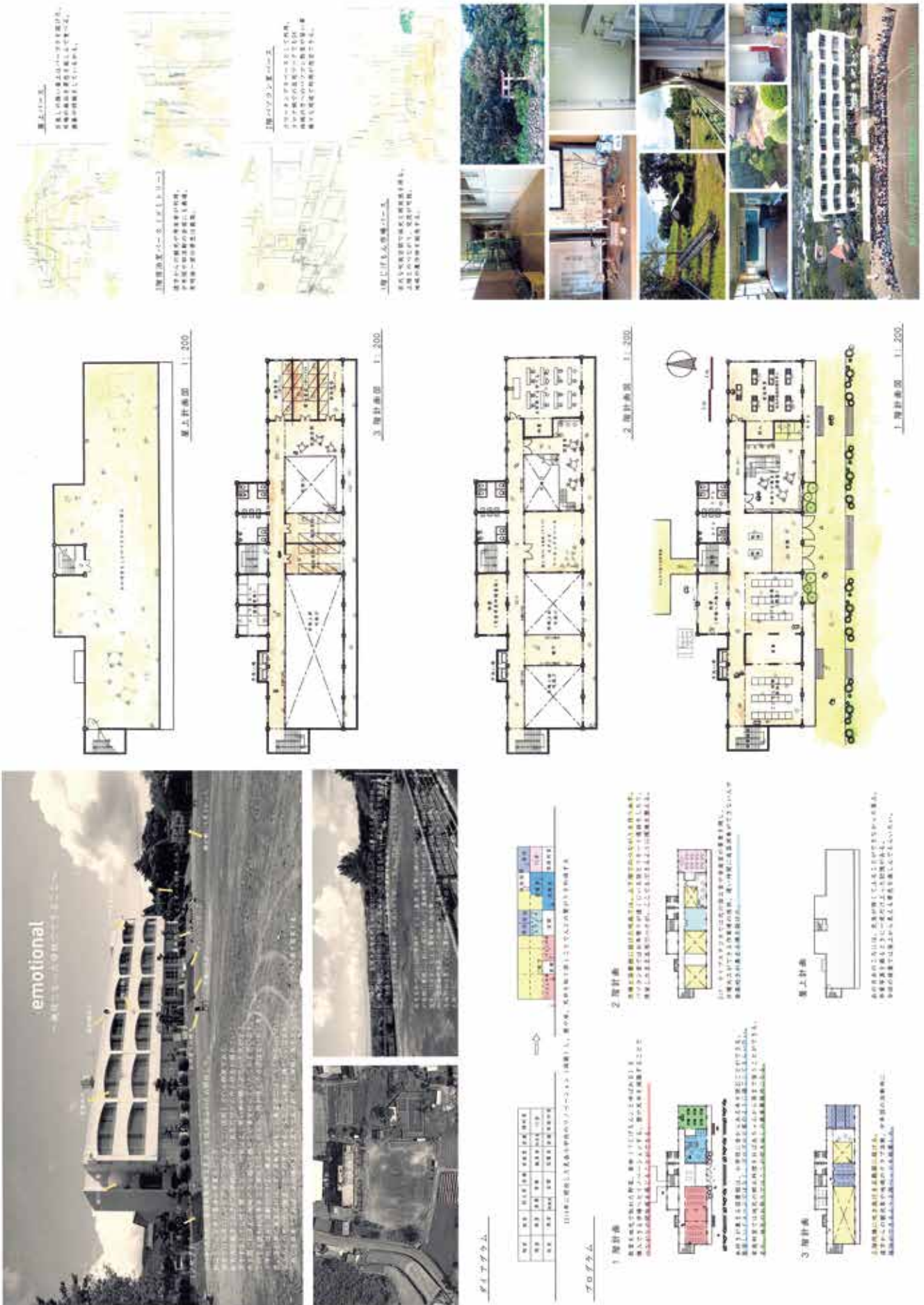




銀賞 | 「「コアな存在としての駅」再構築(まちづくり)の提案 一千の歴史を紡ぐ道 分断から融合へ」竹村 旭陽

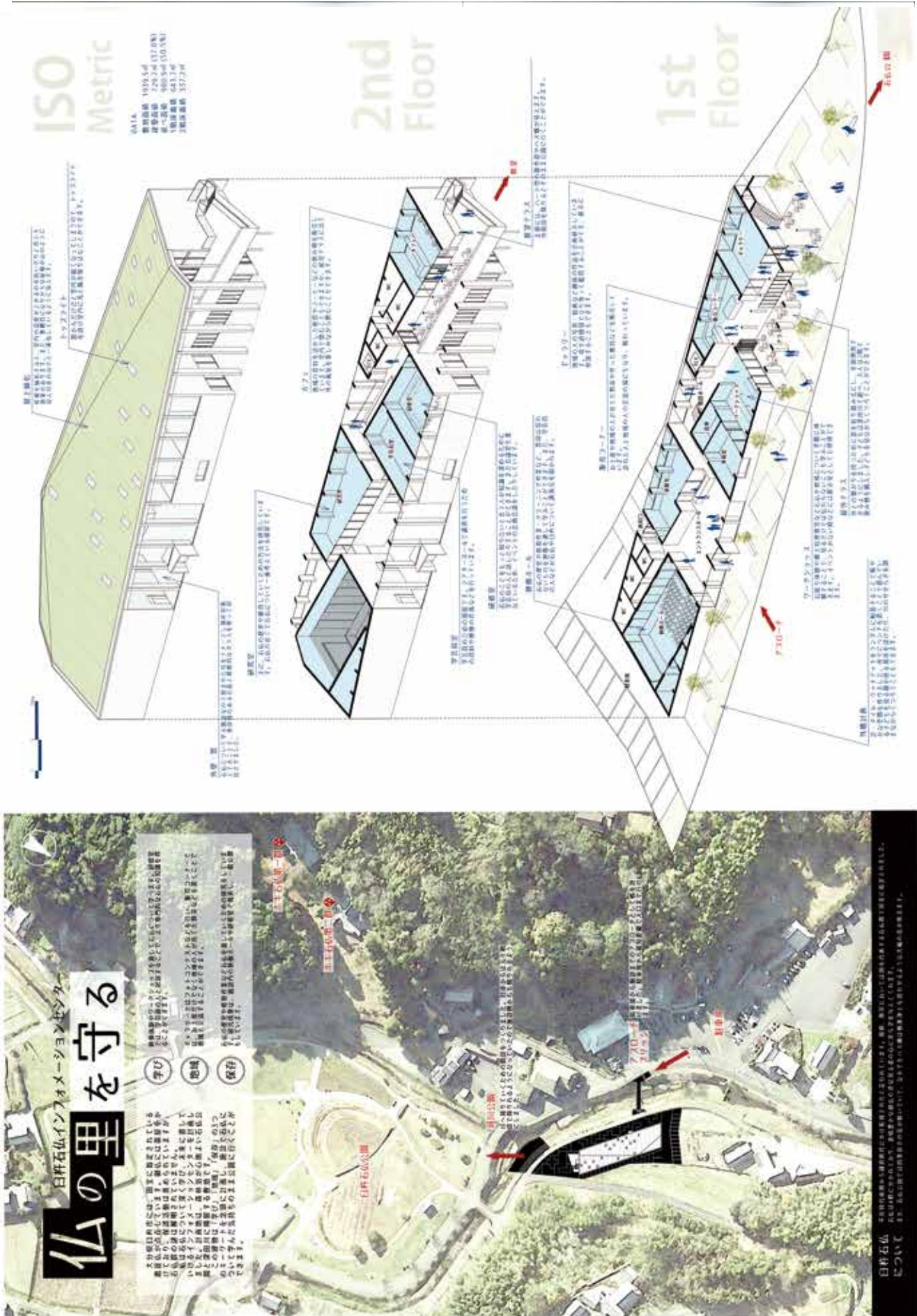


奨励賞 | 「emotional 一廃校となった母校のできること」 本村 響





奨励賞 | 「 仏の里を守る -白杵石仏インフォメーションセンター- 」 森 音凜



本年度のオープンキャンパスは、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、オンライン型と来場型のハイブリッド形式での開催でした。本稿では、来場型の開催時の様子をご紹介します。

1. 学科紹介

学科紹介コーナーでは、9つの分野の研究室の紹介や、受講コースの紹介（JABEEコース）、卒業生の活躍等についての説明パネルの展示を行いました。来場者へは、教員が適宜補足説明をさせていただきました。

2. 製図授業作品展示

在学生の製図等の授業での作品展示を行いました。1年次の授業では手を動かし創造する体験から始めることを、実際に制作した空間模型や段ボール椅子、名作の軸組み模型等を通して紹介しました。また、3年次では集合住宅等の大規模建築の設計課題に取り組むことを、優秀作品の展示を通して紹介させていただきました。

3. 卒業設計作品の展示

4年次の卒業設計の優秀作品の展示を行いました。迫力のある模型や平面図に、来場者の方々は真剣に見入っている様子でした。実際に指導した教員から、当時の様子や、どのようにしてスキルを身につけていくかという指導の過程についても説明をさせていただきました。

4. ABC建築道場作品展示

毎年学内で開催している「ABC建築道場の展」を移設し、来場者の方々にも見ていただく機会を設けました。今回は、「ゆらぎ」をテーマに、道場で毎日設計に向き合っている学生たちの努力の結晶である模型作品を展示しました。また、ABC建築道場が主催の「建築レクチャーシリーズ」でご講演いただいた建築家・構造家の方々のパネル展示も行いました。



学科紹介会場



指導教員による卒業設計の説明



卒業設計優秀作品の展示



ABC 建築道場の作品展示会場

本学では、毎年夏にオープンキャンパス（以下、OCとする）を開催しています。OCは、受験生や保護者の方々に役立つ情報を提供する体験型イベントです。本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン型と対面型を併用して、実施されました。

【対面型：住居・インテリア学科の新カリキュラム紹介】

教務委員の信濃准教授より、2022年度からスタートする、空間設計のスペシャリストを育成する独自の新しいカリキュラムについて次のような説明がありました。

「新カリキュラムでは、まず、1・2年次で①空間、②住居、③業務系施設のインテリア、④住居系複合施設のインテリアを対象に、主幹科目である設計実習を主軸に学びます。また、設計に必要な環境・設備、構造、周辺領域である家具、色彩、照明、地域環境などの基盤科目も学びます。3年次からは、自分に適した進路・分野を選択し、スタジオに所属します。大学では珍しいスタジオ制によって、少人数で実践的に専門性を高めます。各種空間の設計系を中心に、環境・設備、構造・施工、家具、まちづくりまで、学生の興味関心に応える多彩なスタジオがあります。早期から専門性が身につけられ、昨今早まるキャリア活動に向けても有効です。」

【オンライン動画：学科での学び】

4年生の西本さんはゼミ活動で団地や空き家のリノベーションを行っています（図1）。「今後、リノベーションが増えることが予想されますが、既存の建築物を扱う際は構造や設備などの技術的な知識が不可欠です。こうしたことを学びながら、住居・インテリア領域での設計に取り組むことができます。」「建築に正解はないものですが、コミュニケーションの中で正解を見つけ、地域の発展に貢献していく過程に、難しさと面白さを感じています。」と語りました。



図1 「名島三の丸団地」再生プロジェクト

【対面型：北欧名作照明や椅子を体験しよう！】

北欧の建築・デザインに関する著書を多数出版されている小泉教授による、北欧名作照明の魅力の解説とその照明器具の光の広がり方を体験できる断面模型を用いた体験学習が行われました（図2）。参加者のみなさんは断面模型を観察したり、名作椅子の座り心地を確かめたり、熱心に参加している姿が印象的でした。



図2 北欧名作照明器具の断面模型（小泉研究室）



図3 学科所有の北欧名作椅子

本学科に興味のある方は、ぜひ、OCに参加して、教員や学生と意見を交わして、良い進路選択につなげていただけたらと思います。

文：住居・インテリア学科 講師 吉村

今年度は、事前予約による人数制限を設けたうえで対面形式のオープンキャンパスを実施しました。

都市デザイン工学科では、以下の3つの体験型の企画を行いました。

1. コンクリートでミニモアイ像とダースペイダーを作ろう！



コンクリート材料を練り混ぜてユニークな型枠に詰めて脱型まで体験しました。10分程度で固まる特殊なコンクリートを用い、製作したオブジェはお土産として持ち帰っていただきました。

2. ドローンで地形を測る？



屋外に移動し、小型ドローンのテスト飛行を実演しました。ドローンに搭載のビデオカメラからの映像をモニターに映しながら飛行し、はるか上空からの景色を眺めました。さらに事前に撮影した画像で作った3D地形モデルの紹介を行い、災害時における活用方法について説明しました。

3. 建造物の揺れ方を観察してみよう



小型の振動台に設置した模型が揺らし方の違いによりどのように変化するか観察してみました。また、大学で行っている耐震実験について紹介しました。

一部ではありましたが、オープンキャンパスに参加したことで、本学科の雰囲気をつかんでいただけたら幸いです。

ABC建築道場

ABC建築道場は2011年からはじまり2021年度で11年目を迎えました。きっかけは2011年に3年生であった数名の学生が、私が現役の建築家だということを知って、建築サークルを立上げたいとの相談からでした。

話は少し逸れますが、建築学科は日本では工学分野であり、エンジニア（技術者）を育成することを目的としていますが、欧米では建築学や芸術学の分野で、技術のみならず美学的な能力も兼ね備えているアーキテクト（建築家）を育成します。そのため、日本の建築教育は一級建築士資格取得を前提としたカリキュラムとして技術的知識を優先して組みざるをえません。しかしながら、ものづくりで一番必要な能力は、クリエイティビティ（創造力）、他者との協調性、統合力です。そこを鍛えようと思うと、4年間のカリキュラムでは収まらなくなります。そのため、ABC建築道場では授業を補う教育として以下のような活動を行っています。

1) しゅうまい

テーマを決めて模型で空間デザインを表現してみんなで議論を行います。毎週やるから「しゅうまい」なのですが、造形力と表現力がかなり鍛えられる「建築筋トレ」です。最近では遠隔で東京や広島の大学生も参加しています。

2) 建築レクチャーシリーズ

第一線で活躍している建築家・構造家などを招聘して講演会を開催しています。単に講演を聴講するだけでなく、講演者の講演テーマで「しゅうまい」をつくり、懇親会でゲリラ的にプレゼンテーションを行って批評を行ってもらっています。こんなに積極的な学生達を見たことないと講演者から高い評価を頂き、就職やインターンシップの受入れに結びついています。

3) ABC建築道場の展

毎年、学内でABC建築道場の活動展示会を行っています。単なる展示ではなく、会場構成もデザインして原寸で空間をつくります。また、同時に講演

会を開催し、講演者には「公開しゅうまい」の講評も行っています。

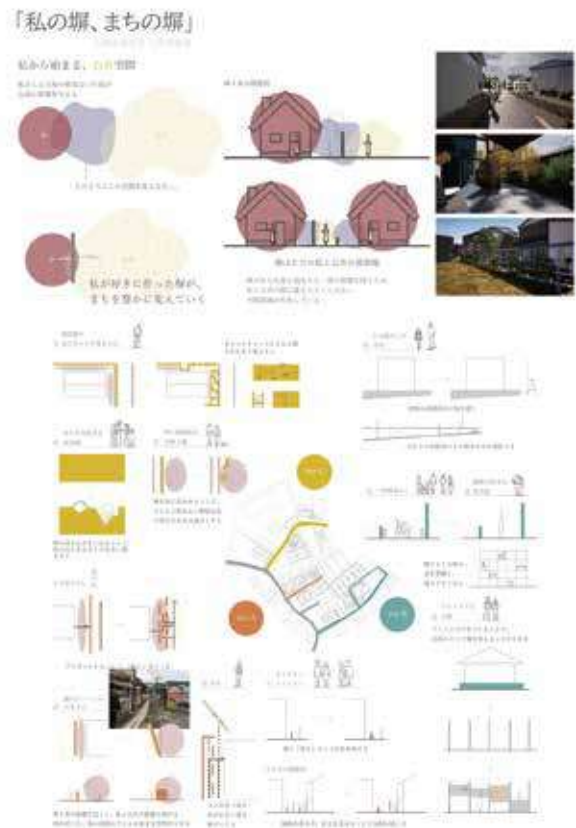
4) 国内外ワークショップ

年に1度は学外のワークショップに参加して、共通のテーマで他大学や外国の学生と建築で競い合っています。また、グループ設計なので、他者との協調性を身につけることができます。

5) 学外建築イベント

建築の甲子園と言われる「SDL卒業設計日本一決定戦」や3年生以下の学生も参加できる「Fukuoka Design Review」「tonica北九州」など学外の大会に出場して、毎年コンスタントに優秀な成績を取っています。

矢作 昌生



JIA 日韓合学生ワークショップ 2020 最優秀賞

■北欧デザイン研究会

「北欧建築ガイド 500の建築・都市空間」完成

2021年度もコロナ渦のためイベントは開催できませんでしたが、北欧デザイン研究会メンバーを主として、2020年度のKSUプロジェクト型授業「北欧の建築・デザインに関する現地調査とガイドブック出版プロジェクト」にて作成してきた本が、出版されることになりました。

当初の計画では、実体験調査をした上で、資料調査等も踏まえてガイドブックとしてまとめる予定でしたが、新型コロナで残念ながら現地調査には行けませんでしたが、そこで国内外の資料を多数収集し、手分けして、500事例に及ぶガイドブックの編集・執筆作業を行いました。2022年3月1日刊行が決定しました。著者は、小泉隆+小泉隆研究室として、北欧デザイン研究会メンバー以外も加わった形式としていきます。アマゾンで予約受付中。

<https://www.amazon.co.jp/dp/4761528044/>

<https://book.gakugei-pub.co.jp>

以下、学芸出版社のHPより、学生情報加筆の上記します。

■書名 北欧建築ガイド 500の建築・都市空間

■内容紹介

デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、アイスランドの174都市から500の建築を紹介する北欧建築ガイド決定版。近現代の建築家が手掛けた美術館、図書館、ホテル、教会、役所、商業店舗の名作から、サウナや公園、街路など公共空間、注目の都市開発エリアまで、多彩な空間の魅力を1000枚超の写真で体験！

■体裁 A5変・240頁・定価 本体2700円+税

■発行日 2022-02-15

■著者……小泉隆+九州産業大学小泉隆研究室

■発行所……株式会社 学芸出版社

■執筆……北原さやか(唐津西高等学校、4年、(株)オリバー)、酒匂悠花(宮崎西高等学校、4年、S A A D建築設計事務所)、柴田智帆(九州産業大学附属九州高等学校、4年、大学院進学)、彌永葵(福翔高等学校、4年、大和ハウス工業(株))、吉田真帆(防府商工高等学校、4年、(株)吉田建設工業(フルマークハウス))、

信濃康博、松野尾仁美、吉村祐樹

■執筆協力……鬼塚文哉(筑前高等学校出身3年)、山口未夢(筑紫中央高等学校出身3年)、山下桃乃(西陵高等学校出身3年)、中野壮馬(九州産業大学附属九州高等学校、2020年度卒、(株)孝和建设)、藤田琢磨(2020年度卒、ナガノインテリア工業(株))

注：学生の()内は、(出身高等学校、在学年・卒業年、就職先・進路)

001 コペンハーゲン中央駅

ハイムリッヒ・ヴェンク
テポリ公園前に立つ重厚な赤煉瓦造りの駅舎。地上レベルのホールを覆う集成材のアーチ屋根は竣工当時のままで、その風合いが100年を超える月日の経過を感じさせる。ガラスの天窓からは柔らかな光が降り注ぎ、地階ホームからの送迎者を出迎える。
Copenhagen Central Station/Henrich Wenck 1911/Bernstorffsgade 18-22, Copenhagen



002 SAS ロイヤルホテル

アルネ・ヤコブセン
22階建ての客室部とロビー等の低層部からなる国内初の高層建築。ヤコブセンは建物のみならず、カトラリーに至るまですべてのデザインを手がけ、オリジナルのスイートルームも現存する。優美な螺旋階段が目を引くロビーでは、上質な家具や照明を楽しむことができる。
SAS Royal Hotel/Arne Jacobsen 1967/Hærenichsgade 1, Copenhagen



コペンハーゲンのページ例

■九産大野生動植物研究会

九産大野生動植物研究会は、地域の子供たちや大人の方々に「自然の大切さ」、「自然の不思議さ」、「自然とふれあう楽しさ」を学び感じてもらい、同時に私達自身も自然環境の保護・保全のあり方を見出すために活動を行っています。さらに、熊本地震からの復興にも貢献すべく、熊本地方ならびに阿蘇地方

での活動も実施しています。今年度は新型コロナウイルス蔓延の影響で一部活動は中止となりましたが、可能な範囲内で活動を行っています。本報では、近年実施してきた活動の一部を紹介します。

内田研研究室 古野正章

活動紹介



■小学校プールにおける理科実験といきもの観察会

香椎東小学校、勝馬小学校にて、プールに生息しているヤゴなどの水生生物の観察会ならびに特別授業を実施しています（今年度は中止）。実際にプールに入って水生生物を捕まえ、子供たちに観察してもらいます。最初は気持ち悪がっていた子も、終了間際には触れるようにまできました。

■川のいきもの環境教育

新宮町の協力のもと、2018年より新宮町の小学生を対象とした川のいきものの観察会を実施しています（今年度は中止）。今年度は、新宮町の野地区にて、地域の方々と協力して魚や水辺のいきものの捕まえ方や観察方法、くわえて昆虫に関する環境教育を実施しました。



■阿蘇荻岳の観光資源としての「花」調べとその写真展

熊本地震からの復興に貢献するため、阿蘇市波野地区の方々と地域の魅力を内外に発信する活動を行っています。活動では、荻岳を主なフィールドとし、植物の観察および撮影などを行っています。現在、道の駅にて写真展を開催するための調整を行っています。



「建築都市工学部 Year Book 2021」の発刊にあたって

九州産業大学では2017年4月に理工学領域の学部再編を行い、理工学部、生命科学部とともに、西日本では初の建築系学部である建築都市工学部が誕生しました。建築都市工学部は、建築学科、住居・インテリア学科、都市デザイン工学科の3学科から構成されており、住居からまちや都市、国土まで幅広い空間のデザインやインテリア、建築物、社会基盤施設などの空間デザインやものづくりを総合的に学び研究することができるのが特徴です。

「建築都市工学部 Year Book」は、建築都市工学部のさまざまな活動を紹介するための機関誌として2018年度に創刊しました。学部・学科、教員や研究室の紹介、学生の進路や課外活動、学内の施設、卒業研究、卒業生の寄稿など在校生が必要とする情報が幅広く得られる内容になっています。さらに、「建築都市工学部プロジェクトコンテスト」の入賞作品の紹介やオープンキャンパスの情報なども網羅しており、これから大学や学部・学科を選ぶみなさんにも役立ててほしい内容になっていると思います。

前号から「OB・OG 寄稿」を設け、社会で活躍する女性を紹介し、本号では各学科男女各1名に拡大しました。卒業生の活躍は私たち教職員にとっても嬉しいものですし、みなさんの目標にもなると思いますので、これからも積極的に卒業生の活躍を紹介したいと思います。ほかにも新しい企画のご要望がございましたら、学部事務室までご連絡ください。

Year Book は建築都市工学部のウェブサイトでも公開しています。在学生、教職員、高校生のみならず、卒業生や企業、地域の方々にも是非ご覧いただき、私たちと新しいつながりが生まれるきっかけとしてほしいと思います。さらには本学部の発展に寄与するものになってくれることを期待しています。

建築都市工学部長 林 泰弘

2021年度建築都市工学部機関誌編集委員会

- 委員：内田 泰三（都市デザイン工学科）
- 委員：松野尾 仁美（住居・インテリア学科）
- 委員：大庭 知子（建築学科）
- ワーキングメンバー：
 - 嘉野 広美（住居・インテリア学科）
 - 江上 史恭（建築学科）
- 建築都市工学部長：林 泰弘
- 建築都市工学部事務室長：鶴田 亜矢

Year Book 2021

2022年3月18日 印刷

2022年3月31日 発行

発行者 九州産業大学建築都市工学部
林 泰弘

福岡市東区松香台2-3-1

印刷所 ヨシミ工産株式会社

北九州市戸畑区天神1-13-5

